

第1章 現代日本語におけるマス・メディアの言語表現

第1節 マス・メディアメディアの社会的な役割と特徴

本論文では現代日本語におけるマス・メディアの言語表現をテーマにして、特に新聞の言語表現について実証的な研究を行うものである。従来の日本語研究では、マス・メディア抜きには考えられないような日本語の現象を扱っていても、マス・メディアの特質に関する洞察が不足していた。言語資料として新聞を取り上げているが、マス・メディアとしての視点から考察を行っていない研究もある。また、マス・メディアの言語をテーマとして真正面から取り上げたり、現代日本語における現象をマス・メディアとの関連から具体的に考察したりする研究もほとんどなかった。本論文は、マス・メディアによる日本語への影響という視点に立って新たな研究領域を切り拓こうとするものである。

マス・メディアの言語表現を研究するためには、言語学だけでなく、マス・メディア研究、ジャーナリズム研究の視点を加えることも極めて有益である。すなわち、マス・メディアにはどのような性格があるのか、マス・メディアは社会的にどのような役割を果たしているか。どのような特徴を持っているかをあらかじめ研究する必要があると考える。また、ジャーナリストから提供される実質的な知見も非常に貴重である。

現代社会の中で、人間は他の多くの人との関係の中で生活している。そして、メディアも社会から独立して存在しているわけではない。メディアは社会の中に埋め込まれながら、社会に必要とされながら普及していくのである。社会の中で普及したメディアは、確実に社会の在り方を変えていく。このように、メディアと社会は、相互依存的な関係にあると言える。まず、このようなメディアと社会との関係について指摘しておきたい。

メディアには公共性が期待されてはいるが、現実にはメディアは構成されたもの（編集されたもの）である。そのことから公共性が十分に発揮されているのか疑問が残る。メディアの公共性と編集性との関係の中でメディアの言語表現がいったいどのような形態をとっているのか。このような視点から明らかにしよう。

そのことを考えるためには、メディアの性格を述べておく必要があると思う。

メディアとは何らかの情報やメッセージを人々に伝えるための様々な媒体や手段を指している。

横井俊夫によれば^{注1}、一般的にはマス・メディアとは「情報を表現し、情報を運ぶ媒体」である。ただし、「表現する」「運ぶ」は、視点をどこに定めるかによってさまざまな意味もってくる。例えば、送り手に視点を置くと、メディアには新聞とかテレビ局という社会の中で機能するシステム、または組織体を意味する。次に、伝えられる情報の受け手との接点

で考えるとメディアとは「印刷され、配達される新聞の記事や放映されるテレビ番組」を意味する。

さらには、新聞やテレビで伝えられる情報（メディア・メッセージ）の表現形式から見ると「新聞やテレビ番組の内容を構成する編集の枠組みや形式」を意味する。その上、伝えられる情報の編集の仕方によって、メディアは情報内容を構成する表現手段を意味する場合もある。たとえば、新聞の編集では言語面及び画像（写真）・図形（表・グラフ・イラスト）などと総称したビジュアル面が、テレビ番組の編集では映像・音声・音響といった表現手段がそれぞれ多用されるという。このように、メディアは多様性をもつために、どこに視点を置くかによってその定義も異なったものになる。

マス・メディアはどのような特徴を持っているだろうか^{注2}。

第1に、不特定多数の大衆を対象とする大量生産物であり、一か所から大勢の人々に同時に発せられるものである。

第2に、大量生産物には機械的・技術的手段が必要であり、それらは技術の発展段階に規定される。

第3に、機械的・技術的手段を用いることは、送り手と受け手の間に機械を介することとなり、非対面的・間接的コミュニケーションとなる。

第4に機械的・技術的手段を利用するために、送り手は大規模な組織、高度な技術的装置を持たなくてはならない。そのためマス・コミュニケーションの生産と伝達は専門的職業人の組織によって行われる。

第5に、そうしたマス・コミュニケーションが成立することによって送り手と受け手の役割分担が固定化した情報の流れは、一方向的となる。

第6に、受け手は不特定で匿名の大衆であり、大量の受け手を確保する必要上、情報の内容は大衆の共有する関心事に制約され易くなり、通俗化・画一化を生み出す傾向がある。

さらに、メディアということばに対して、人は多様なイメージを抱いている。浦島郁夫・竹下俊郎・芹川洋一は^{注3}、メディアをもっとも狭義なものから広義なものへと分類し定義している。もっとも狭義なメディアとは、マス・メディアのうちでも時事的問題に関する報道や論評を提供するテレビ・ラジオ・新聞・雑誌に代表されるニュース・メディアやプレス・報道機関を指している。次に、やや広義のメディアとは、通常のマスメディアの定義が示す領域に該当し、マス・コミュニケーションと同義語で使われる。ここでいうマス・メディアとは、新聞社・ラジオ・テレビ局という組織体としての送り手が不特定多数の大量で異質性に富んだ受け手に対して、公共性の強いメッセージを一時的・直接的・高速で搬送する特徴を備えたコミュニケーションのことである。日本語では「マスコミ」と短縮されることが多い。このような情報伝達は新聞・雑誌・ラジオ・テレビ・映画などのメディアを通じて行われ、それらは①報道、②評論、③娯楽、④教育、⑤広告・宣伝等の5つの活動領域のあることが言われている。

マス・メディアによるコミュニケーションが、社会生活に及ぼす影響とはどのようなものだろうか。

「メディアは現実を構成する」という視点から、日常生活からメディアを考えるならば、次のような役割を示していると考えられる^{注4}。

- 1) メディアはすべて構成されたものである。
- 2) メディアは現実を構成する。
- 3) オーディエンスがメディアから意味を読み取る。
- 4) メディアは商売と密接な関係がある。
- 5) メディアはものの考え方（イデオロギー）と価値観を伝えている。
- 6) メディアは社会的、政治的意味を持っている。
- 7) メディアの様式と内容は密接に関係している。
- 8) メディアはそれぞれ独自の芸術様式を持っている。

また、社会生活のすべての面にメディアの働きが浸透しているという点について考える。マス・メディアの社会生活に与える影響についての関心は、一般社会においても、学術研究の分野においても、20世紀初頭から今日まで続いてきたと言える。20世紀初頭から1930年代末頃までは、マス・メディアの強力な効果が指摘された時期であった。W. リップマン^{注5}は『世論』（Lippmann 1922～1987）において「疑似環境（pseudo-environment）」という概念を提起した。新聞の普及は、メッセージ伝播の大量化と定期化を実現させ、多くの人々に情報の共有や意見の交流を可能にしたが、一方で、抽象化された疑似的な環境を人々の頭の中に作り出し、真の環境（real environment）への対応を誤らせると指摘したのである。また、マス・メディアの「議題設定機能（the agenda-setting function）」の仮説は、社会生活の中で「何が重要なことか」「重要度の優先順位はどうであるか」ということについて、私たちが判断する際に、マス・メディアは強力な情報源になっていることを示したのである。

マス・メディアによる媒介という作用は、文化・社会・場所・社会集団に対する帰属意識の共有と関連する。また、国民性・言語・労働・民族・宗教・信念・ライフスタイルなどとも関わっている。マス・メディアは、アイデンティティの形成・維持・解体といった様々な局面とも関連している。メディアにおいて表現されている言説やイメージが、一体どのような文脈のもとで、いかなる意図や方法によって編集されたものであるのかを客観的に読み解き、そこから対話的コミュニケーションを作り出していく。日々の社会生活は、日常化されたメディア利用によってかなりの程度パターン化され、メディアの内容に強く影響されている。即ち、余暇の過ごし方・ライフスタイルに対する影響・会話の話題など、あらゆる場面での行動のモデルをマス・メディアは提供するのである。

第2節 マス・メディアの公共性

メディアには常に公共性が求められている。岡本厚^{注6}『「文字から離れていく社会のなかで」編集者の立場から「メディアの公共性」を問う』という論文の論説によると、公共性とは、誰にとっても共通に欠かせないものであり、メディアに関わる人々は、公共性があることを常に自覚していなければならないと述べ、一方、メディアを担っているのは殆どが民間であるので、ビジネスとしての側面と公共性の側面という両者の矛盾や綱の引っ張り合いを直視することが、公共性を考える上で重要であると述べている。

J・カラン+M・グレウィッチ編^{注7}によると、メディアの規範的枠組の提案の基礎を成しているものは、メディアが意図的にせよ偶然にせよ「公共性」又は「一般の福祉」に奉仕しているのだという基本的な前提である。これは、マス・メディアが、他のビジネスやサービス産業とは異なり、その実践において、特に文化的、政治的生活において、社会のより広い利益のため必要不可欠な役割を果たしていることを意味する。それ故に、メディアは、メディア自体が何をしないかということに対しても、法的責任を持たなければならない。メディアがやろうとしないことをせよという要求に対しても法的義務を負っている。

また、奥田博子^{注8}によると、メディアは、現代市民社会において、公共的役割を担うことが期待されてきたという。なぜなら、メディアの言論や報道活動は、読者・視聴者である有権者や言論・表現の自由の極めて大きな影響を及ぼすからである。歴史的にみると、新聞や出版メディアは、近代市民革命の過程で民主主義社会にとって不可欠な世論や価値観の形成に重要な役割を果たしてきたと述べている。

一方、マス・メディアのメッセージをどのように受容するかという問題にも注目する。現在どのような変化が起きていようとも、現実の社会、即ち政治、文化、日常の社会生活、経済といった分野におけるマス・メディアは重要なものと考えられる。マス・メディアは政治の分野では議論の場を提供する。政策形成、選挙の候補者、そして有用な事実や考え方を社会に周知する。それに加えて、政治家、利益集団、政府機関に対しては、情報を公にする手段や社会に影響を及ぼす手段も提供する。文化の領域では文化的な表象や現象を行うための主要なチャンネルとなるものといえよう。

マス・メディアはまた、社会的現実に関わるイメージを形成し、社会的アイデンティティを形成し、維持する際の主要な担い手ということができる。現代社会では、メディアの媒介なしに自分たちの問題は自覚できない。国なり社会なりについて国民自身が方向性、行き方を決めていくことが民主主義である。そのための判断材料は主としてメディアから得ることになる。メディアが事実を伝えず、あるいは歪めて伝えれば、正しい判断が出来ないことになり、だからこそ「言論・表現の自由」が重要なことである。「言論・表現の自由」が保証されることによって健全な民主主義社会が形成される。そのためにメディアが事実正しく情報を伝え、それによって国民自身が正しい方向性を決めることができるのである。

メディアに携わる者は常にメディアの公共性を認識しなければならないといわれている。

このようなメディアの公共性はメディアの用いる言語にも反映されると考えられている。メディアには強く公共性が期待されている。しかし、現実にはたしてメディアが、どこまで公共性を発揮しているといえるか明らかとはいえない。そもそも、このことを検証すべきであるが、本論文ではこれを追究することは避けることにする。本論文で問題にするのは、公共的であろうと努めるメディアが、その言語・表現においていかなる公共性を発揮しようとしているか、この点を具体的に明らかにすることである。

第3節 新聞の社会的な影響力と公共性

本論文ではメディアの言語表現という観点から、メディアの中でも特に新聞を取り上げて研究を行う。その前提として新聞の社会的な影響力について、公共性の観点から明らかにしておきたい。

新聞は識字層の読者を受け手とするメディアの一種である。新聞は一般の人々の日常的话题から社会的に重要な問題まで取り上げることが出来る。しかし、現代の新聞はかつてのような強い影響力をもっていない。テレビという強力なメディアが登場したこと、さらに、近年、情報伝達のチャンネルが多様化したことなどが新聞の退潮の要因として挙げられている。それにしても、新聞は社会の行方に影響を与える重要なメディアであることは否定できない。新聞は客観的な情報伝達を理想に掲げているとともに、新聞の伝達する情報に対する信頼性と社会的影響力は、読者の中につよく認識されている。

「新聞」は、文字通りに解釈すれば、「新しく聞いた話」、「新しい話題」だが、幕末に中国から「新聞」、「新聞紙」が newspaper の訳語として取り入れられたものらしい。日本での初めての新聞は「官板バタバヤ新聞」であると言われている。幕末の1862年にジャワのオランダ新聞を翻訳して発行されたとのことである。和紙を綴じたもので、新聞という名の書物であった。邦字紙第1号は1865年ジョセ・ヒコ（浜田彦蔵）によって横浜で発行された「海外新聞」であった。最初の日刊紙は「横浜毎日新聞」で1870年（明治3年）の発行である。1872年に東京日日新聞（毎日新聞の前身）、郵便報知新聞（報知新聞の前身）などが発行されている。

一般庶民向けに通俗的な社会ダネを扱った「小（こ）新聞」が平仮名やるびつき漢字表記で発行された。「読売新聞」（1874年）、大阪の「朝日新聞」（1879年）、「東京朝日新聞」（1888年、この年「朝日新聞」は「大阪朝日新聞」と改称）などで、いまの大手紙は小新聞が発展したものである^{注9}。

当初新聞は種々の情報の伝達・記録・娯楽・企業の広告等のために利用されてきたが、その志向が読者の理解や現実の出来事に向いていたから大きな発展への転機ともなった。その結果、新聞はマス・メディアの中で、今日でも人々の間で最も信頼を得ているものとなったのである。新聞は、政府や政党などにコントロールされることなく、常に「主体性」を持っている。言い換えれば、公平・中立である。そのため、人々の信頼度が高い。

全国紙は2003年4月調査によると読売新聞（1,006万部）、朝日新聞（830万部）、毎日新聞（397万部）などがある。現在、読売新聞は朝刊約1022万部、夕刊約433万部が発行されていて、日本の新聞の中で最も発行部数が多い。産経新聞は朝刊約162万部である。毎日新聞は朝刊約340万部、夕刊約290万部である。日本経済新聞は273万部である。そして、朝日新聞は朝刊約754万部、夕刊約273万部である^{注10}。

こうした全国紙体制は歴史的には1888年、大阪朝日新聞が東京に進出したのが始まりで、関東大震災後に東京の新聞社が震災で被害を受けたことに伴って、朝日、毎日両紙が市場を

拡大していった。戦後、1952年読売新聞が大阪に進出し、高度経済成長と技術革新を生かした市場拡大競争の結果、現在の全国紙体制が築かれた。

このことを裏付けるものとして、日本新聞協会の行った「2015年全国メディア接触・評価調査」がある。この調査（隔年の調査）は、2015年11～12月、全国7千人を対象に実施され、3845人から回答を得た。新聞を読んでいる人の割合は77.7%で、テレビの97.3%に次ぐ接触率である。選挙で投票の参考にする情報源を尋ねたところ、新聞記事が51.4%で政見放送43.8%や選挙公報30.8%を上回った。大学生、大学院生に限ると、就職活動の重要な情報源として、「紙の新聞」と答えた人が44.1%で、テレビやSNSなどを上回った。新聞の無料の電子版を登録・購読している人は8.5%、有料の電子版を登録・購読している人は1.4%だった。新聞の読者が減少する傾向があるとはいえ、選挙に対する新聞の影響力はなお健在である^{注11}。

さらに、2016年10月公益財団法人 新聞通信調査会の調査による一部示したものである。

1. 新聞についてどう思うかを尋ねたところ

●情報の「多様性」「正確性」「責任感」に高い評価

「多種多様な情報を知ることができる」が70%である。

2. 新聞の記事の満足度について尋ねたところ

●ラ・テ（ラジオ・テレビ）欄、地元記事、社会記事など、身近な事柄についての記事の満足度が高かった。

3. 新聞全般の満足度について尋ねたところ

●満足している人は52%、不満な人は8%。高年齢層で満足度が高いという結果であった。

新聞は一般の人々の話し言葉からあらゆる社会的な集合体の世界に至るものまで取り上げることが出来る。私たちは、新聞は客観的な事実のみを伝えるものと認識しがちである。新聞に書かれた記事の内容について、一般の読者の多くはそれが客観的かつ正確なものと思っているかもしれない。ところがさまざまな制約によって、新聞紙面に掲載された記事は、現実のほんの一部が取り上げられたにすぎないものである。また、新聞において言語を選択・配列する際に記者・編集者の主観が働いている。もちろん、新聞の記事の内容において主観をできるだけ排除して、中立的で客観的な表現をもちいることを心がけるのが記者の態度であろう。

新聞は客観的であるとともに、常に「公平・中立」「不偏不党」の「主体性」を持っていて、記者の見識に基づいて「主体的」に書かれている。さらに、新聞の大切な機能の一つは、「公共性」である。公共性というのは、社会の人々が皆平等に情報を得ることが出来るということである。新聞を読めば誰でも公平に情報を得ることが出来る。その情報をもとに、社会に参加することも平等に可能であるということであろう。新聞は情報を常に読者（受け手）の認識に一致するように意識的に努めている。新聞を通して、大量の情報を伝えると同時に、

文化・社会・地域に対する共通の帰属意識を形成する影響や作用を担っている。

新聞は新しい社会形態の文化を担っている。メディアの伝えるメッセージの中には現代における日本語の多様な姿が溢れている。言い換えれば、現代社会が持つテキストというべきものであろう。マス・メディアのメッセージを分析することによって現代日本語の在り方を研究することを可能にする。ここで考えるべきことは新聞と言語との関連である。新聞が努めて公共的であろうとするならば、新聞の言語についても公共的であるはずである。しかし、はたしてこのように認めてよいのであろうか。

本研究は、新聞の言語が本当に公共的なものと言えるのか、このことを検証していきたいと考えている。

第4節 マス・メディアと日本語

近年、日本語に関する様々な世論調査が行なわれている。日本語が揺れている。もしくは日本語が乱れている傾向にあるという認識を持っている人が多いことが明らかになった。いくつかの調査を取り上げてみよう。

1992年11月30日朝日新聞の「日本語の乱れ」という（テーマ討論・調査）によると、全国読者から400通を超す（東京本社分は290通余）投稿が寄せられ、日本語の乱れが指摘されている。乱れの代表格とされる「ら抜き」言葉は「文法的におかしい」「耳障り」とする気になる現象として、カタカナ語、アルファベット略語、敬語の混乱、助詞抜き、とか弁、サ入れ言葉、語尾のはね上げ・伸ばし、CMの「感字」使用など多くの実例が寄せられた^{注12}。また、2000年1月の世論調査では「言葉が乱れている」と思う人の割合は85%にものぼることを占めている。言葉の乱れには、時代による変化、「揺れ」と考えられる要素が多様であろう。この問題については、特に近年、省略語や外来語のはんらん、そして敬語の使用などが注目されている。

この問題に意識して、NHK放送文化研究所の塩田雄大・滝島雅子の『放送研究と調査』^{注13}によれば

「日本語は乱れている：9割」時代の実相～

日本語ゆれに関する調査（2013年3月）から②～

● 日本語は乱れているかの質問に尋ねたところ

「非常に乱れている」が33%、「多少乱れている」が57%、足して合わせると9割にする。

「多少乱れている」が主流で、「非常に乱れている」が二番手であり、乱れていないと感じる人は少数派であることが明らかになった。

次に、文化庁は、国語施策の参考とするために、平成7年度から毎年「国語に関する世論調査」を実施している^{注14}。

平成19年度は、ほかの人の言葉遣いが気になるか、国語力向上のための課題は何か、また、外国人とのコミュニケーション、外来語・外国語などのカタカナ語使用についてどう感じるかなどを中心に、国語に関する一般の人々の意識を調査した。

また、毎年取り上げている、慣用句等の言い方や、その意味についても調査を実施し、「国語が乱れていると思うか」の質問に対して次のような結果になったことが分かった。

● 今の国語は乱れていると思うか、乱れていないと思うかを尋ねたところ

— 全体で約8割が乱れていると思っている。特に30代～50代で高い—

〔全体・性別・過去の調査との比較〕

- ふだんの生活の中で接している言葉から考えて、今の国語は乱れていると思うか、それとも、乱れていないと思うかを尋ねたところ、
「非常に乱れている」と「ある程度乱れている」を合わせた「乱れていると思う（計）」は8割弱という回答を得た。

「全く乱れていない」と「余り乱れていない」を合わせた「乱れていないと思う（計）」は16%となっている。

表1

乱れていると思う（計）		乱れていないと思う（計）		分からない
79.5%	【80.4%】	16.2%	【17.0%】	
非常に乱れている	ある程度乱れている	余り乱れていない	全く乱れていない	4.3%
20.2%	59.3%	15.1%	1.1%	
【24.4%】	【56.0%】	【15.8%】	【1.2%】	【2.5%】

さらに、NHK 放送文化研究所が行なった「放送と外来語 全国調査」によると、「テレビや新聞で、外国語や外来語が多く使われている」と答えた人は約8割という結果になった。そして、「意味が分からなくて困った経験がある」人も8割という結果が明らかになった。しかし、「外来語が増えることの是非」を問うと賛否が半ばして、迷いがうかがえる。世代間の差も大きい。外来語全体に対する意識で「外来語が多い」と考える人の比率は、この種の調査をする度に増え続けている。88年のNHK調査で64%、95年で69%。今回は79%になった。外来語の多用を感じているかどうかを尋ねたところ（複数回答）では、「意味が分かりにくくなる」が50%、「漢字と違って文字から意味がとりにくい」34%、「日本語の伝統が破壊される」16%と抵抗を感じる答えが多かった^{注15}。

以上の調査結果において日本語の乱れが現実の問題になっていると考える人の多いことが明らかになった。さらに、現代日本語の在り方を探るために、ここでは、公共性を有し、社会的に影響力が大きいと考えられる新聞との関連を検証して試みよう。新聞は広範な社会と文化を映し出す鏡と言われているが、新聞の言語がなにを映し出しているかについて考察しよう。

現代社会における日本語の在り方は公共性をもつメディアによって大きな影響を受けていることは言うまでもない。そもそも、近現代における共通語の普及の過程においてもラジオやテレビなどのメディアが大きな影響を与えたことが指摘されている。また、情報を伝達する手段によって言語の表現形式はかなり異なっている。例えば、新聞や雑誌などのように活字・印刷物として読者中心に書き言葉を用いるが。それに対して、放送メディアはラジオやテレビのように音声・映像として話す言葉である。ちなみに、それぞれの形式によって特徴をもっている。したかつて、どちらも、ことばの正しさが要求されている^{注 16}。さらに、すべての読者、視聴者は理解しやすい言葉を求めている。つまり、親しみやすい表現、美しい表現、共感をうる表現、愛情のこもった表現、簡潔な表現などのあることが望ましい。

しかし、実際には、メディア公共性における日本語の表現に対しては様々な疑問が問われている。

以下は、新聞とテレビを中心に、公共性をもつメディアがもたらした、日本語への影響について考察し、探りたいと考えている。

第5節 テレビがもたらす日本語への影響

1953年に開始されたテレビによって、話し言葉に大きな影響が与えられたと考えられる。共通語が全国に普及するきっかけとなった。このような影響の大きさを考慮して、NHKでは、放送用語を通じてよりよい日本語を育成することを目的としている。また、視聴者が情報の内容を容易に理解されるため、理解しやすいことばをつかうことが要請されている。

2016年10月公益財団法人 新聞通信調査会の調査によると

《各メディアの印象・信頼度》について調査した^{注17}。

各メディアの情報をどの程度信頼しているかを、全面的に信頼している場合は100点、全く信頼をしていない場合は0点、普通の場合は50点として点数をつけてもらった。

1. 各メディアの情報の信頼度は？

●1位「NHK テレビ」69.8点、2位「新聞」68.6点、3位「民放テレビ」59.1点

2. 各メディアにつけた信頼度得点に影響が大きかったのは？

●「情報が分かりやすい」「情報源として欠かせない」「社会的影響力がある」

3. 各メディアの印象は？

●情報源として欠かせない「新聞」、信頼の「NHK テレビ」、面白い「民放テレビ」、手軽な「インターネット」

以上の調査の結果において、メディアの情報の信頼度においてはNHKが最も点数が高い。NHKのみならず、メディアは一般に公共性が期待されており、したがってメディアの言語使用というものはあくまでも公共的なものでなくてはならないはずである。しかし、南博^{注18}によると、メディアがことばを乱れさせているという実例が数多く指摘されている。これはメディアの公共性に違反してメディア自身がことばを乱れさせている例でもある。とりわけ、近年、外来語の氾濫が指摘されている。特殊な外来語については、その意味が理解されにくいのでコミュニケーションの障害となる恐れがある。

標準語、共通語を使うものと多くの人々に思われているNHKの場合には、放送で使うことばの誤用が日本語のみだれを大量に拡大することになる。この点については、NHKの自己反省として、放送でのことばの誤用に関して、いくつかの点があげられている。

○文法的におかしくても、放送で聞くと正しいことばだと思ってしまう。

○国名、地名、人名の発音や呼び名を間違えて放送する。

○語尾を（……のようです）（……と言えそうです）（……なのではないでしょうか）のようにあいまいに結ぶのも、一般に悪い影響を与える。

○乱脈な敬語。

○人格を尊重したことばづかいが、軽く見られている。

○生活用語と社会用語との混同。

○ゆれていることば（国民一般が正しいと認定していないもの）を使いすぎる。

さらに、民放の放送において悪い点が多いとされたものの中には「コマーシャルに限って考える」などの付帯意見をつけられたものが含まれている。悪い影響としては、次のような点があげられている。

- 1 一部のコマーシャルでのどぎつい表現。
- 2 一部の娯楽番組での芸能人や司会者のオーバーな表現。
- 3 流行語を広める。
- 4 以上については特に若年層に悪影響を与える。
- 5 放送で使うことばにより一般の人々の日常の表現が画一化される。
- 6 放送での誤用は正しいものとして受けとられる。

また、ことばのみだれの実態としては、次のような点があげられている。

「敬語のあやまり」、「敬語の過剰」、「敬語の不足」、「待遇表現のみだれ」「流行語、省略語、外来語などの乱用」

〈語法〉

○「全然」というような打ち消しを伴うべき副詞を強い肯定の意味を持つことばとして使用する。

○“すごく”などということばを乱発して、その時々の状態でも心情でも、細かく表現せず、すごくの一語で間に合わせているというような、ことばの貧しさを感じます。

ことばのみだれは世代によってちがうのであり、一般の人と若い人に分けてみると次のようになる。

〈一般の人のみだれ〉

- 1 敬語のあやまり。
- 2 語法、テニヲハなどの部分的な乱れ。
- 3 表現、語彙の貧困
- 4 外来語の乱用。
- 5 流行語、省略語の乱用。

〈若い人のみだれ〉

- 1 敬語、謙譲語のわきまえない。
- 2 流行語の乱用。
- 3 省略語の乱用。
- 4 表現力の未熟、語彙の貧困。
- 5 基礎的知識がない（文法など国語力低下）。
- 6 乱暴で品がない。
- 7 外来語の乱用。
- 8 ことばへの意識、愛着のなさ。

このように現代ではテレビを身近なものとして感じさせた影響が問題になっているが、太平洋戦争以前には、ラジオの放送用語が問題になっていた。

昭和 10 年 3 月に「放送用語の調査に関する一般方針」総則に次のようにある。

- (1) 放送用語の調査はラジオ聴取者の共通理解を基準として、美しい語感に富む「耳のことば」を建設し、放送効果の充実をはかることを目的する。
- (2) 放送用語は、全国中継アナウンス用語（以下共通語と称す）を主体とする。
- (3) 共通語は、現代の国語の大勢に順応して、大体帝都教養ある社会層において普通に用いられる語彙、文法、発音、アクセント（イントネーションを含む）を基本とする。
- (4) 共通語と方言との調和をはかる。

放送で特に注意して置きたい点は敬語についての表現である。これはまさに大きな問題点であり、「敬語の用法」に関連して、主査委員岡倉由三郎氏は、敬語については複雑な問題が多いので慎重に調査研究を進めるべきであるとして、次のように記している^{注 19}。

敬語の用法は普通に主人と召使の間のもなどがあり、また皇室関係の敬語があり、場合によって不敬に亘り、或は不遜に聞こえるおそれもあるので、これも気にしだすと際限がない。

「放送用語」における皇室関係の敬語は新聞の場合も同様である。戦前および戦時は皇室に関する報道のなかでの誤りは絶対におかしてはならないことになった。NHKでも委員会発足後ただちに皇室に関する敬語の調査を進め、昭和 10 年 4 月に「宮廷敬語」を作っている。個々のことばの決定基準は現代の宮中での用法、発音、アクセントを調査したうえで、「放送用語の調査に関する一般方針」に従って決めている。内容は次のとおりである^{注 20}。

- ① 神事に関する言葉……「剣璽（ケン シ）」「旬祭（シュンサイ）」などおよそ 13 項目。
- ② 尊称……「天皇を申し上げる言葉」「皇后を申し上げる言葉」など 16 項目。
- ③ 御所作に関する言葉……「御成り遊ばされる」「みそなわせられる」などおよそ 60 項目。
- ④ 御思召とその表示に関する言葉……「大御心にかけてされる」「篤き御言葉」などおよそ 20 項目。
- ⑤ 「御（きよ・ご・おん・お・み）の読み分け……「御諱（オンイミナ）」「御気色（ミケシキ）」「御物（ギョブツ）」「御列（オレッツ）」などおよそ 50 項目。
- ⑥ 御服装に関する言葉……「御礼装（オンレーソー）」「御短剣（オントンケン）」「黄丹の袍（コートンノホー）」などおよそ 30 項目。
- ⑦ 御所に関する言葉……「竹の園生（タケノソノー）」「畏きあたり」などおよそ 60 項目。

- ⑧ 職制に関する言葉……「内舎人（ウトネリ）」「読師（ドクジ）」などおよそ 30 項目。
- ⑨ 臣下の謙称……「天機奉伺（テンキホーシ）」「捧呈式（ホーテーシキ）」などおよそ 25 項目。
- ⑩ その他

続いて昭和 15 年には更に内容を豊富にし（内容 1600 項目）「皇室に関する敬語の用法語彙篇」を作り、皇室関係の報道に関する用語上の誤りを防ぐために全を期した。しかし、終戦を境として、皇室に関する敬語も大きく変わり、放送でも、基準によって内容を大幅に変えた「皇室関係放送用語集」を昭和 29 年に作り、その後数回にわたり改定を加えている。

- ① 天皇、皇族に対する敬語は、できるだけ普通の範囲内でお親しみのある最上級の表現を用い、意味の重複した形は避ける。
- ② 儀式、祭典、職名、建造物、場所などに関する伝統的な用語のほかは、つとめて漢語的表現を避け、文語調はなるべくとらない。

皇室に関する敬語が戦後大きく変わったように、一般社会で使われる日常会話の敬語にも、戦争を境に大きな変化が見られた。昭和 27 年 4 月に国語審議会が作成した「これからの敬語」は、当時の混乱している敬語に新しい方針を示したものである。

表 2 放送用語皇室敬語について戦前と前後の比較

戦 前	戦 後
天覧、叡覧、台覧	ご覧になる
玉座	お席
賜餐、賜	お食事を賜わる
聖旨、叡旨、勅旨、綸旨、聖慮、叡慮 宸慮、宸襟、大御心	おぼしめし お考え
勅許、允許、御聴許、	お許し
玉顔、天顔、龍顔	お顔
御不承、御不例、御違和、御違例	ご病気

表 2 の通り、放送用語皇室敬語について戦前と前後を比較してみると、放送における敬語は戦前と戦後が大きく変わっていくことが明らかになった。戦前は古い漢字がよく使われていた。しかし、戦後には、一般的な敬語を用いられていることが多くなった。皇室敬語については、戦後、簡素化することになった。

第6節 新聞がもたらす日本語への影響

本節では新聞がもたらす日本語への影響について述べよう。新聞の場合は、漢字を含む文字表記の仕方が問題にされてきた。

新聞記事によって、客観的情報を素早く伝達することを目的として、日常生活で目に触れる文章には、漢字・平仮名・カタカナ（外来語を含む）省略語、ときにはローマ字さえ使うことも許される。これは、新聞はメッセージの内容や意図を「伝達する」ために、日本語の基本的な特徴の1つに表記の多様性があると言われる。新聞の読者を増やすためには、まず、新聞で使う用語や文章をやさしくすることが第一であり、義務教育が十分普及してなかった時期には、新聞紙面で使う漢字を少なくすることが第一歩であった。

日本新聞協会発行の『新聞用語集』（日本新聞協会新聞用語懇談会編改定版 1976年）を見ると「当用漢字表」に含まれない漢字を含むことば、およそ 1700 語を示し、次のような、かな書き、言い換えの指示をしている。

以下は 1977 年 1 月岩波書店、岩波講座『日本語 3 国語国字問題』「新聞用語・放送用語」菅野謙によるものである^{注21}。

○かな書きにするもの 319 語

挨拶→あいさつ

生垣→生けがき

鵜飼→う飼い

○他の漢字に書き換えるもの 403 語

艶歌師→演歌師

臆説→憶説

皆既蝕→皆既食

○他の表現に言い換えるもの 746 語

危殆→危険、危機

寓話→たとえ話

経論→政策、抱負、方針

以上は、かな書き、書き換え、言い換えるのいずれか一つの方法によって、新聞での表記例を示したもので、三種類合わせて 1468 語あるが、このほか、以上三種類の方法を組み合わせた形で表記例を示し、この中から自由な選択を利用者にゆだねているものが、合わせて 241 語ある。

○かな書き、または、書き換え 1 語

緬羊→綿羊、めん羊

○かな書き、または、言い換え 185 語

勾配→傾斜、こう配

采配→指揮、指図、さい配

- 嗜好品→し好品（物）、愛好品
- 書き換え、または、言い換え
- 叢書→双書、シリーズ
- 籤引→抽選、くじ引き

このようなかな書き、書き換え、言い換えによって現在の新聞紙面で使われる漢字の種類は、戦前の新聞紙面に比べて大幅に少なくなり、多くの人々に容易に読みやすくなったと思われる。

しかし、その反面、これに伴って、いくつかの見のがせない問題点も生じている。

その第1は、一つのことばを書き表わすのに「暗きよ（暗渠）」、「位はい（位牌）」、「音さた（音沙汰）」、「軽べつ（軽蔑）」、などように、漢字とかなをまぜる“混ぜ書き”の傾向がふえることであり、この中でも、「あん馬（鞍馬）」、「かい書（楷書）」、「じん臓（腎臓）」などのように、一語の中で先に来る部分がかな書きになると、漢字かなまじりの文章の中では、直観的に一語としてとらえられる機能がはなはだしくさまたげられる。

さらに、「警ら（警邏）」、「し好品（嗜好品）」、「し体（肢体）」、「は握（把握）」、「や金（冶金）」、「ら針盤（羅針盤）」などのように、かなする部分が「し」、「は」、「や」、「ら」のように、漢字の直後につくと、ほかの意味にとられやすいことばはもっとも注意を要する。

新聞の文章の中でも、また、放送のテレビ画面に出る文字表現の文章の中でも、このようなまぜ書きのことばを使うときには、読み取りの効果を十分考慮して、前後の文脈の関係でふさわしくないと判断されれば、ほかのことばに言い換えなければならない、表記の面から表現上の制約を加えることになる。

漢字を制約するために生ずる問題点の第2は、言い換えなければならないことばをあまりたくさん作りすぎ、それを厳密に守ろうとすると、場合によっては日本語の表現の豊富さに圧迫を加える恐れがあることである。逆に、言い換えの方向を制限し、大部分の人には意識されない細かいニュアンスの違いのために必要性のないことばを温存することは、多くの人に容易に理解されることばをめざす新聞用語・放送用語にとっては、むしろ伝達のさまたげになる。新聞用語・放送用語にとっては一般の人にわかりにくいことばできるだけ言い換えるというのが基本原則となる。

このようにことばの言い換えについては、表現の豊富さの面と伝達効果の面の両面から慎重に考えていかなければならない。『新聞用語集』を例にとると、この中に言い換え例を示していることばが986語ある。その中の240語には、言い換え例のほかに、かな書き例また書き換え例が示されているので、場合に応じて選択する余地が残されている。残りの言い換え例のみを示している746語は、この『新聞用語集』の指示に厳密に従うかぎり、少数の例外を除いて、新聞紙面では、死語になりつつあることばと言ってよい。

なお、この漢字の制約はメディアで使う外来語の量にも影響を及ぼしている。新聞・放送とも、外来語については「適切な訳語のある場合は、外来語を使わず、言い換える」という方針を採っているが、この漢字の制約に伴う言い換えによって、メディアで使う外来語が増

えていることは否定できない。

共同通信社編『新・記者ハンドブック』には漢字の制約によって指示された例の中に、次のように、外来語を含む 38 項目ある^{注22}。

拳奮→ボクシング

叢書→双書、シリーズ

間諜→スパイ、回し者、間者

このようにつまり外来語について新聞用語から規制と制約など適切な訳語を言い換えるべきであることが指摘されている。むしろ、外来語の増加使用を控えていることも強調された。

そして、読者を大きく迷わせたのは、新聞の敬語使用についてでもある。新聞における日本語の乱れは放送と同様に敬語の乱れが指摘されている。現在、新聞で尊敬語、謙譲語などの敬語表現を使うのは、日本の皇室関係の記事に限られる。つまり、天皇、皇后をはじめ皇族の行動を表す表現には、敬語形式を使うけれども、それ以外の人物の場合は、どんなに地位が高かろうとも一切敬語形式を用いないという。

皇室関係の敬語については、大きく二つに分けることができる。まず、一つは「終戦前の皇室敬語」である。そして、もう一つは「戦後の皇室敬語」である。皇室関係の記事にだけ敬語表現を使うという原則は、もちろん戦前からのものである。当時、皇室敬語は、非常に煩雑なものであった。その一例をあげよう。

例 宝算、皇算、聖寿、宝寿、 天皇の年齢を言う。この場合、御何歳の「御」「歳」は不要で「宝算四十五と」と書く、皇后、皇太后の場合は、「御年何歳」と書く。玉体、聖体、天顔、竜顔→いずれも天皇だけに使うが、「玉顔、玉歩、玉音」は皇后、皇太后の場合にも使う。

聖慮、叡慮、大御心→天皇のお心。皇后、皇太后の場合は、「御心」、皇族は「台慮」と書く。

鳳輦、聖駕、車駕、竜駕、鳳駕→天皇の乗り物。皇后、皇太后の場合は「玉輦」、皇太子は「鶴駕」と書く。

戦後、新聞や放送で使う皇室敬語は、著しく民主化された。まず、昭和 22 年 8 月に当時の宮内省当局と報道関係者との間で、従来皇室に関して使われていた特別に難しい漢語をやめて、これからは、普通のことばの範囲内で最上級の敬語を使うという基本的な了解が成立した^{注23}。

例 玉体、聖体→「おからだ」

天顔、竜顔→「お顔」

宝算、聖寿→「御年、御年齢」に改めたというわけである。

さらに昭和 34 年 4 月 10 の皇太子ご結婚式を前にして、日本新聞協会の新聞用語懇談会は宮内庁の記者クラブと協力して、皇室用語の再検討を行った。この統一作業で特に注意さ

れたのは、

- ① 皇室だけに使われる特別な用語は、一般用語に言い換える。

例 宮廷列車→特別列車
 供奉長官→お供の責任者
 ご成婚式→ご結婚式
 参内→訪問

- ② 敬語は最小限の使用にとどめる。特に敬語の重複使用は避ける。

例 ご先導申しあげる→ご先導する
 ご食事のお相手にお招きになる→食事の相手にお招きになる

という二つ点で、かなり多くの用語例について一つ一つ規定され、やはり大衆的な新聞や雑誌による皇室敬語への影響が大きいと思われる。

表 3 新聞における皇室敬語について戦前と戦後の比較

戦 前	戦 後
玉体、聖体	おからだ
天顔、竜顔	お顔
宝算、聖寿	御年、御年齢
昭和 34 年 4 月 10 の皇太子ご結婚式とその後の敬語の変化	
皇室用語	一般用語
宮廷列車	特別列車
供奉長官	お供の責任者
ご成婚式	ご結婚式
参内	訪問

以上表 3 より皇室敬語について、新聞における戦前と戦後にも大きな違いがあることが明らかになった。放送用語と同様に皇室敬語表現は漢字を中心に用いたことが多い。しかし、戦後には、特に、昭和 34 年 4 月 10 の皇太子のご結婚を機会に、さらに、皇室敬語は一層簡素化へと進んでいる。用いたのは（お/ご「名詞」）のような敬語表現になっている。

第7節 本論文の研究理由・目的

近年、「日本語の乱れ」が各方面から指摘されるようになった。すでにのべたとおり、メディアの言語は公共的であるべきであるが、メディアそのものが日本語への影響を与えるという見方がある。

新聞の報じている内容は大衆の在り方を語っていると同時に、新聞の存在価値そのものを示していることになる。新聞の伝えるメッセージの中には現代における言語の多様な姿が溢れている。だからこそ、新聞の言語は公共的な日本語の研究資料となる。ひいては「現代の言語」の在り方を研究することを可能にする。新聞の言語とは、現代社会が持つテキストというべきものであろう。新聞に載せられた「内容・記事」について分析・検討すれば、その新聞の特徴や、情報をやり取りする「現代の言語」のありようが客観的に見えてくるのではないだろうか。

本研究では、メディア言語へ強い関心に向けさせ、研究する理由を概略以下のようにまとめている。

- (1) メディア言語の特徴を研究する際にデータの入手が容易であること。
- (2) メディアに提示される言語は日常的な言葉が数多く含まれている。研究者が研究したいと望んでいる言語特徴を含む資料が得やすいこと。
- (3) メディア言語は、一定の規範を満たしており、その規範は、それぞれの報道機関が独自に作成し、維持しているということ。
- (4) メディアにおける言語の使われ方について、公的討論の場においてよく批判が加えられること。
- (5) メディアの言語面に対する関心が高いこと。さらに、メディアによって使用される言語特徴、メディア言語が社会に及ぼす影響があること。

一方、公共性の名のもとにメディアの主観的な主張が入ってしまう可能性があることは否定できない。公共性を持っている新聞は「言葉の乱れ」をどのように見ているのか、どのような態度をとっているのか、どのように位置づけているのか、メディアの公共性と現実との関連を明らかにする。

本論文では、言葉の乱れについて、着目する。特に敬語、外来語、省略語を取り上げ、新聞の言語が実際にどのような傾向を有しているのか。敬語・外来語・省略語の多用「乱れ」の一環になっていないだろうか。多用する傾向があるのか？拒否する傾向があるのか？それとも、同じように乱れているのかどうか、さらに、言葉の乱れに拡大し、加速させているかは可能性があるか。様々な視点から検証・考察することを目的として考えている。これらを踏まえてメディア（新聞）の言語を研究する。

注

- 1 横井 俊夫 (1998) 『言語メディアを物語る』 3 頁 共立出版
- 2 波田 陽子・福間 良明 (2012) 『はじめてのメディア研究』 73 頁 世界思想社
- 3 浦島 郁夫・竹下 俊郎・芹川 洋一 (2007) 『メディアと政治』 18 頁 有斐閣
- 4 中橋 雄 (2014) 『メディア・リテラシー論』 41～42 頁 北樹出版
- 5 四方 由美 (2012) 『マス・メディアと社会生活』 1 頁 学文社
- 6 岡本 厚 (2009) 『マスコミ市民』 43 頁 編集者の立場「メディアの公共性」を問う
- 7 カラン+M・グレウイッチ編 児島和人・相田敏彦訳 (1995) 『マスメディアと社会』 108 頁 勁草書房
- 8 奥田 博子 (2009) 『言語とメディア・政治』 208 頁 朝倉書店
- 9 矢野 直明 (2009) 『総メディア社会とジャーナリズム』 25 頁 知泉書館
- 10 柳澤 伸司 (2004) 『メディア社会の歩き方』 76 頁 世界思想社
- 11 2016 年 3 月 16 日、朝日新聞
- 12 1992 年 11 月 30 日、朝日新聞
- 13 塩田雄大・滝島雅子 (2013) 10 月号「日本語は乱れている：9 割」時代の真相～
(NHK 放送文化研究所『放送研究と調査 (月報)』)
- 14 文化庁 平成 19 年度「国語に関する世論調査」調査時期 平成 20 年 3 月 1 日～3 月
20 日
- 15 毎日新聞 (2002) 9 月 16 日 東京朝刊 (NHK 放送文化研究所が調査)
- 16 菅野 謙 (1977) 『日本語 3』「新聞用語・放送用語」 236～237 頁 岩波講座
- 17 新聞通信調査会 2016 年 10 月 第 9 回メディアに対する信頼度などを調べる「メデ
ィアに関する全国世論調査」
- 18 南 博 (1977) 『日本語 2』「マスコミ日本語」 91～92 頁 岩波講座
- 19 「放送用語並発音改善調査事務の開始とその仕事」調査時報IV3(1934)昭和 9 年
- 20 菅野 謙 (1974) 『現代生活における敬語』「放送用語と敬語」 133 頁 岩波講座
- 21 菅野 謙 (1977) 『日本語 3 国語国字問題』「新聞用語・放送用語」 239～242 頁
岩波講座
- 22 共同通信社編 (1975) 『新・記者ハンドブック—用字用語の正しい知識』
- 23 斉賀 秀夫 (1966) 『現代生活における敬語』「新聞と敬語」 121～122 頁 國文學：解
釈と教材の研究 / 學燈社 [編]

第2章 マス・メディアにおける敬語表現

—昭和末期から平成にかけて天皇に関する新聞報道を中心に—

第1節 研究の意義・目的・方法

本章では、新聞における皇室敬語表現に焦点を当てて、調査・分析するものである。特に時代が移り変わった昭和末期から平成初期にかけて、日本の新聞における昭和天皇と今上天皇に関する言語表現にどのような特徴があるか、それが読者の意識とどのように関係しているか、実例を分析する。

マス・メディアには監視機能、相互関連機能、そして伝達機能という三つの主要な社会的機能がある^{注1}。マス・メディアの役割は資本主義・自由主義と社会主義とではおのずと相違があるが、報道を介して国民世論の形成に関与することができる。特に新聞は権力の乱用を社会に明らかにし、公衆に議論の場を提供し、人々の代弁者として機能する。人々を緊密に結びつける共通の価値を強調する。

新聞における言語表現と読者の意識との関係についても注目したい。新聞の言語表現と読者の意識の関係について、たとえば新聞の表現が読者の意識に何らかの影響を与えているか、それとも読者の意識が新聞の表現に影響を与えているか、もしくはその両方があるか、このような問題について従来のマス・メディア研究ではほとんど扱われていなかったようである。

皇室は日本の社会の中で特別な存在である。それゆえに、皇室に対するマス・メディアの表現法もさまざまである。皇室に対するマス・メディアの日本語表現は長い間いろいろな視点から研究されてきている。渡辺友左「皇室敬語の“ゆれ”を検証する（天皇報道を振り返る）」、斎賀秀夫「新聞と敬語—皇室敬語を中心に—」、石井勤「皇室敬語を考える」、杉本（秋本）典子「占領期の新聞の皇室敬語簡素化」—国語審議会、宮内省、CCD 検閲の方針とその実際（特集占領期の言説）」などである。

しかし、昭和の末期から平成にかけての皇室敬語表現については、詳細に研究されているとは言えない。新聞等で敬語表現（尊敬語、謙譲語などの表現）を使うのは皇室関係の記事に限られている。つまり、天皇、皇后をはじめ皇族の行動を現わす表現には敬語を使うが、それ以外の人物の場合は、どんなに地位が高かろうと一切敬語を用いないと言われている。ただし、従来の研究は昭和末期までの期間に限られていると言えよう。

本研究では、日本の新聞の中で読者数と発行量が多い全国紙「読売新聞」「毎日新聞」「朝日新聞」を対象にして昭和天皇崩御（1989年1月7日）夕刊、号外の縮刷版によって敬語

表現を調査した。

また、朝日新聞社が提供している朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」版、読売新聞記事検索データベース「ヨミダス歴史館」版、毎日新聞記事検索データベース「毎日News バック」版を利用した。さらに、各社の昭和天皇崩御に関する記事以外の宮内庁の発表文、参議院議長謹話全文、首相謹話全文なども調査対象とした。

さらに、今上天皇に関するものとして「パラオへ慰霊の旅」（2015年4月8日・9日・10日）についての報道記事内容も活用し、天皇に対する敬語表現を比較対照した。

第2節 昭和天皇崩御についての新聞報道

昭和の末期において、昭和天皇の闘病から死去にいたる出来事は新聞、テレビを始め、マス・メディアにとっての一大事件であった。昭和天皇の闘病が始まった前年（1988年）以降、病状が連日報道され、派手な行事やイベントが自粛されるようになった。

そして、1989年1月7日に昭和天皇が死去すると、「朝日新聞」を含む全国の新聞、テレビ・ラジオほかのマス・メディアは、一斉に「崩御」という言葉で表現した。「崩御」とは、言うまでもなく天皇が亡くなったことを表す敬語表現である。尚、1989年1月7日「朝日新聞」夕刊コラムは「崩御」を以下のように説明している。

崩御(ほうぎょ)とは

「崩」とは「みまかる」「かくれる」の意味で「御」はその敬語。

八世紀の「日本書紀」にも「天皇崩(ず)」と記述されて、室町時代の用語辞典『下学集(かがくしゅう)』には「崩御とは天子の世を辞すを指す」と解説されている。

戦前の「皇室喪儀令」(大正50年制定、戦後は失効)には天皇、皇后、皇太后、太皇太后までを「崩御」とすることが成文化されていた。戦後の「皇室典範」(昭和22年制定)では「天皇が崩じたときは大喪の礼を行う」(25条)と記されている。

このように戦前の皇室敬語ほどではないにしてもマス・メディアは一定の敬語表現を天皇・皇室に用いている。

皇室に対する敬称について

記者ハンドブック『新聞用字用語集』第9版の皇室用語について、第1条によると敬称については「皇室典範が天皇、皇后、太皇太后、皇太后には「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めておる」と書かれている。しかし、第11版の皇室用語について、第2条によると「皇室に対する敬称として皇室典範は天皇、皇后、皇太后、太皇太后は「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めているが、記事上「陛下」は天皇だけに使う。天皇、皇后と併記する際は「両陛下」とする。「殿下」は原則として使用せず、皇后や皇太子など皇族は「さま」を使う。夫婦や家族単位で主語になる際は敬称を省いて「ご夫妻」「ご一家」などとする。「皇太子さまご夫妻」とはしない」と書かれている。

そして、第12版は皇室用語について、第1条によると敬称については「皇室に対する敬称として皇室典範は天皇、皇后、皇太后、太皇太后は「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めているが、記事上「陛下」は天皇だけに使う。天皇、皇后と併記する際は「両陛下」とする。「殿下」はできるだけ使用せず、皇后や皇太子など皇族は「さま」を使う。夫婦や家族単位で主語になる際は敬称を省いて「ご夫妻」「ご一家」などとする。「皇太子さまご夫妻」とはしない」と書かれている。

2-1 読売新聞

(以下文において下線は敬語を示すものであり、網掛けは常体を示すものである。)

読売新聞(1989年1月7日 東京夕刊)昭和天皇の崩御についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

新聞記事タイトル「新元号は『平成』あす施行」

敬語使用の実例：

- 皇居・吹上御所で崩御された。
- 八十七歳八か月のご生涯だった。
- 病理検査で十二指腸にがん細胞が発見された。
- 体内出血が続くご容体だった。
- 直ちに第百二十五代の皇位につかれた。
- 東京の新宿御苑で行われる。
- 新年号を『平成』と決定、八日から施行される。

新聞記事タイトル「明仁殿下ご即位」

敬語使用の実例：

- 病変部に腺がんも認められた。
- ご苦痛がなく「慢性膵炎」と発表された。
- 昏睡状態に陥られた
- ご危篤を発表したが
- 陛下は息をひきとられていた。
- ほとんど眠られたままで
- 国民統合の象徴に変わられた。
- 国際親善に努められた。
- 国民の触れ合いを求められた。
- 国民の前にお元気な姿を見せられた最後となった。

新聞記事タイトル「社説」

敬語使用の実例：

- 八十七歳のご生涯を静かに閉じられた。
- 大きな時代のうねりに飲まれていった。
- ご公務では、皇室外交にも大きな足跡を残された。
- 「国民と共に」をだれよりも深く心に刻まれた天皇でもあった。
- 常に控え目に黙々と責務を果たされた。

- ご気力
- ご冥福
- ご平穩
- ご闘病

「読売新聞」（1989年1月7日 号外 ）昭和天皇の崩御についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

新聞記事タイトル「天皇陛下ご危篤」「血圧異常低下、昏睡状態に」

敬語使用の実例：

- ご病状
- 吹上御所で危篤状態に陥られた。
- 腸のバイパス手術を受けられた。
- ご容体
- 御所には皇太子一家はじめ各皇族方が駆けつけられている。
- ご危篤の状態になりました。
- 大量の吐血をされた。
- 緊急輸血が行われた。
- 表面的には小康状態を保たれた。
- 根治手術は見送られた。

以下の表1において、読売新聞（1989年1月7日 東京夕刊）の皇室敬語表現を「お/ご+名詞」、「れる・られる」、「サ変動詞+れる」「お/ごーになる」の形式に分類して示す。

表1

新聞社 記事見出し	「読売新聞」(1989年1月7日 東京夕刊)				
	敬称	敬語			
新元号は『平成』明日 施行		お/ご「名詞」	ーれる・られる	サ変動詞+れる	お/ごーになる
		天皇陛下	ご生涯	皇位につかれた	崩御された
	親王殿下	ご容体	新宿御苑で行われる	発見された 施行される	
明仁殿下ご即位	明仁殿下	ご即位 ご苦痛	認められた	発表された	おきめになる
		ご危篤 お元気	昏睡状態に陥られ 息をひきとられて 眠られた 象徴に変わられた 努められた 求められた 見せられた		お呼びになる
社説	親王天皇	ご生涯 ご公務	閉じられた	ナシ	ナシ
	陛下	ご気力 ご平穩	飲まれて		
	皇后陛下	ご冥福 ご闘病	残された		

	皇太子		刻まれた 果たされたた		
号外 天皇陛下ご危篤	天皇陛下	ご病状 ご危篤 ご容体	陥られた 受けられた 駆けつけられて 保たれた 見送られた	体験された 吐血をされた	お伝えになり

2-2 毎日新聞

毎日新聞（1989年1月7日 東京夕刊）昭和天皇の崩御についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

新聞記事タイトル「**激動の昭和終わる**」「**新元号は『平成』**（へいせい）

敬語使用の実例：

- 皇居・吹上御所で崩御された。
- 八十七歳八か月のご生涯だった。
- 危篤状態となられた。
- 十二指腸乳頭周囲しゅよう腺がんにより 崩御あらせられた。
- ご長寿
- ご闘病
- 昏睡状態になられた。
- ご遺体

新聞記事タイトル「**明仁親王ご即位**」

敬語使用の実例：

- 明仁親王殿下は天皇陛下が ご逝去されたと同時に即位されたことにな
る。
- ご出席
- 国璽が台上に置かれ新天皇陛下が受け継がれた。
- 天皇として 初の執務された。

新聞記事タイトル「**宮内庁の発表文**」

敬語使用の実例：

- 天皇陛下におかせられましたは、本日午前6時33分、
- 吹上御所において 崩御あらせられました。

新聞記事タイトル「**参院議長謹話全文**」

敬語使用の実例：

- 御様子
- 御快癒
- 御長寿
- この度 御容体あらたまり、崩御あらせられました。
- 御誕生

- 御在位あらせられました。
- 日本国民の精神的支柱であらせられました。
- 御精励

新聞記事タイトル「首相謹話の全文」

敬語使用の実例：

- ご逝去
- 御快癒
- 御近親
- 大行天皇におかせられましては、御年二十歳で摂政に御就任、御年二十五歳で皇位を御継承になり、
- 御年
- 御在位
- 御祈念
- 御決意
- 御一身
- 御英断
- 御巡幸
- 今なお国民の心に深く刻み込まれております。
- 御存在
- 大行天皇の仁慈の御心
- 御聖徳
- 新陛下におかせられましては、この清き明かき御心を継承しつつ、

以下の表2において、毎日新聞（1989年1月7日 東京夕刊）の皇室敬語表現を「お/ご+名詞」、「れる・られる」、「サ変動詞+れる」「お/ごーになる」の形式、また、「宮内庁の発表文」「参院議長謹話全文」「首相謹話全文」などもここで同じように分類し取り上げる。

表2

新聞社 記事見出し	「毎日新聞」(1989年1月7日 東京夕刊)				
	敬称	敬語			
新元号は「平成」		お/ご「名詞」	ーれる・られる	サ変動詞+ れる	お/ごーになる
	天皇陛下	ご生涯 ご遺体	なられた	崩御された 即位された	ナシ
明仁殿下ご即位	天皇陛下	ご逝去 ご出席	置かれ、	即位された 執務された	おきめになる お呼びになる
	明仁親王殿下		受け継がれた		
宮内庁の発表文	天皇陛下	ご即位 ご身分 お年	おかせられました 崩御あらせられま した	ナシ	ナシ
参院議長謹話全文	大行天皇	お若く お祈り 御不快 御様子 御快癒 御長寿 御容体 御誕生 御在位 御精励	崩御あらせられた 御在位あらせられ ました 精神的支柱であら せられました	ナシ	ナシ

首相謹話の全文	大行天皇	<p>ご逝去、 御快癒</p> <p>御近親 お悲しみ</p> <p>お察しして 御年</p> <p>御就任 御在位</p> <p>お心 御決意</p> <p>御一身 御英断</p> <p>御巡幸 お姿</p> <p>御存在 御心</p> <p>御聖徳</p>	<p>おかせられました</p> <p>深く刻み込まれて</p> <p>長きにわたらせら れました</p> <p>実践躬行してこら れました</p>	御祈念され	ナシ
---------	------	--	---	-------	----

2-3 朝日新聞

朝日新聞 1989年1月7日 (東京 夕刊) 昭和天皇の崩御についての新聞記事である。
その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

新聞記事タイトル「天皇陛下 崩御」「新元号『平成』^{へいせい}」「激動の昭和終わる」

敬語使用の実例：

- 皇居・吹上御所で崩御された。
- 皇太子明仁親王が直ちに皇位を継承し、ご即位された。
- 四日、国葬として行われることになった。

新聞記事タイトル「**激動の昭和終わる**」

敬語使用の実例：

- 天皇陛下におかせられましては
- 皇居・吹上御所において崩御あらせられました。
- 閉塞性黄だんが認められた。
- 十二指腸乳頭周囲しゅよう腺がんでなくなられた。
- 腹部の張りを訴えられた。
- ご危篤になられた。
- 「慢性膵炎」と発表された。
- 回復された。
- ご静養中
- 発熱された。
- 点滴中に吐血され、
- 重体に陥られた。
- 危機に見舞われた。
- ご養生でつちかわれた体力などで、
- 亡くなられた陛下ご追号
- 新天皇がおきめになるが、大行天皇とお呼びすることになる。

新聞記事タイトル「明仁親王ご即位」

敬語使用の実例：

- ご即位
- 新天皇となられた。
- それぞれご身分が変わられた。
- 新しい天皇陛下のお年五十五、

- 「皇霊殿奉告の儀」が行われた。
- 皇太子お言葉を述べられる。
- 新天皇お住まいは当面これまで通り元赤坂の御所

新聞記事タイトル「社説」

敬語使用の実例：

- 故陛下ほどの波乱を体験されたかたはほとんど例をみないのではないか。
- 国民統合の象徴として、過ぎされた、
- 激動のご生涯だった。
- お言葉
- 語っておられたにもかかわらずお伝えになり、
- かなり具体的示唆もなされたが、
- 冷静に合理的ものを考える力を持っておられた。
- お言葉がそえられているといえる。
- ご足跡
- 新年をお迎えられる。

新聞記事タイトル（1989年1月7日 号外 「天皇陛下ご危篤」

敬語使用の実例：

- ご病床
- 危機を迎えられる。
- 皇太子ご夫婦らが皇居吹上御所に駆けつけられた。
- 輸血を受けられた。
- 一時は公務にも復帰されたが、
- 波乱に満ちた生涯を歩まれた。
- 国際親善にも努められた。

以下の表3において、朝日新聞（1989年1月7日 東京夕刊）の皇室敬語表現を「お/ご+名詞」、「れる・られる」、「サ変動詞+れる」「お/ごーになる」の形式に分類して示す。

表3

新聞社 記事見出し	「朝日新聞」(1989年1月7日 東京夕刊)				
	敬称	敬語			
新元号『平成』		お/ご「名詞」	ーれる・られる	サ変動詞+ れる	お/ごーになる
	天皇陛下	ナシ	国葬として行われる	崩御された 即位された	ナシ
激動の昭和終わる	天皇陛下 皇太子明仁親王	ご静養中 ご養生 ご病状	おかせられましたは 崩御あらせられました 腺がんでなくなられた 認められた 訴えられた 亡くなられた 重体に陥られた	発表された 回復された 発熱された 吐血され	おきめになる お呼びするに なる
ご即位明仁親王	親王天皇陛下 皇后陛下 皇太子	ご即位 ご身分 お年	なられた 変わられた 行われた 述べられる	ナシ	ナシ

社説	天皇陛下 故陛下	お言葉 ご生涯 ご足跡	語っておられた 持っておられた 新年を迎えられる 過ごされた	体験された	お伝えになり
号外 天皇陛下ご危篤	天皇陛下 皇太子	ご病床 ご夫婦 ご危篤	危機をお迎えられる 駆けつけられた 歩まれた 努められた	復帰された	ご訪問になる

2-4 三紙における昭和天皇崩御についての報道特徴

三紙における皇室敬語の特徴をまとめると、次のとおりである。

三紙は天皇敬称として「天皇陛下」、新たに即位することになる皇太子は「明仁親王殿下」を用いている。また、「参院議長謹話全文」「首相謹話全文」は、逝去した昭和天皇を「大行天皇」と称している。

敬語「お/ごーになる」は三紙とも使われていた。毎日新聞に掲載された「宮内庁の発表文」「参院議長謹話全文」「首相謹話全文」では「お/ご+名詞」により高い敬意を表す「お/ご」に漢字の「御」が使われている。

さらに、動詞「ある」に尊敬の助動詞「せる」と「られる」が付いた「あらせられる」と動詞「おく」の未然形に尊敬の助動詞「せる」の未然形と尊敬の助動詞「られる」の付いた「おかせられる」を用いたこともしばしば見受けられる。

以上の記述のように、当時、昭和天皇崩御についての新聞報道は三紙とも敬意が高い表現を用いたことが明らかになった。

第3節 今上天皇パラオへの慰霊の旅についての新聞報道

時代が昭和から平成へと変わり、皇太子明仁親王が天皇に、皇太子妃美智子殿下が皇后に、浩宮徳仁親王が皇太子になり、日本の新しい時代が始まった。新天皇の即位に伴って新元号『平成』となった。「昭和64年」に代わって1月8日より『平成元年』が用いられることとなった。戦後70年にあたり、太平洋戦争の犠牲者を慰霊するため、天皇皇后両陛下は2015年4月8日（平成27年）戦後70年にあたり、太平洋戦争の犠牲者を慰霊するためにパラオ共和国に向かった。以下は読売新聞、毎日新聞、朝日新聞などの新聞記事に書かれた皇室敬語を分析したものである。

3-1 読売新聞

読売新聞（2015年4月8日 東京夕刊）今上天皇のパラオへの慰霊の旅についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

記事タイトル「両陛下パラオへ出発 戦後70年激戦地で慰霊」

敬語使用の実例：

- 東京・羽田出発された。
- パラオに入られる。
- 両陛下、夜はコロール島沖合に停泊する海上保安庁の大型巡視船に宿泊される。
- 平和を祈願される。
- 同日夜、空路で帰国される。

「天皇の言葉の引用」

- 「太平洋に浮かぶ美しい島々でこのような悲しい歴史があったことを、わたしどもは決して忘れてはならないと思います」と述べられた。
- 「祖国をまもるべく戦地に赴き、帰らぬ身となった人々のことが深くしのばれます。戦陣に倒れた幾多の人々の上を思いつつ訪問いたします」と語られた。
- 「心から謝意を表したい」と述べられた。

読売新聞（2015年4月9日 東京夕刊）今上天皇のパラオへの慰霊の旅についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

記事タイトル「**両陛下パラオ初訪問**」**「きょうペリリュー島で慰霊」**

敬語使用の実例：

- 天皇皇后両陛下は8日午後、戦後70年の「慰霊の旅」で初めて西太平洋のパラオに入られた。
- 9日には日米合わせて約1万2000人が戦死した激戦地ペリリュー島で慰霊される。
- 天皇陛下が「先の戦争でなくなったすべての人々を追悼し、遺族の歩んできた苦難の道をしのびたいと思います」と語られた。
- レメンゲサウ大統領夫妻の出迎えや地元小学生の歓迎を受けられた。
- 両陛下はその後、パラオ国際サンゴ礁センターでハゼを鑑賞された。
- 午後7時50分から中心地コロールで開かれた晩餐会には、両陛下とレメンゲサウ大統領夫妻のほか、同じく日本の委任統治領だったミクロネシア連邦とマーシャル諸島の両国大統領夫妻も出席。
- 9日朝、ヘリでペリリュー島に入られる。

「読売新聞」（2015年4月10日 東京夕刊）今上天皇のパラオへの慰霊の旅についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

記事タイトル「**両陛下平和へ祈り**」**「ペリリュー島慰霊から帰国」**

敬語使用の実例：

- 天皇皇后両陛下、同日夜に帰国された。
- 天皇陛下、日米それぞれの慰霊碑に献花された。
- 皇后さま、両陛下が「大変でしたね」「お元気で」とねぎらいの言葉をかけられた。
- 9日朝、ペリリュー島に入られる。
- 続いて両陛下は米陸軍第81歩兵師団の慰霊碑を訪ね、花輪を供えられた。

以下の表4において、読売新聞（2015年4月8日、9日、10日 東京夕刊）の皇室敬語表現を「お/ご+名詞」、「れる・られる」、「サ変動詞+れる」、「お/ごーになる」の形式に分類して示す。

表4

新聞社 記事見出し	「読売新聞」(2015年4月8日 東京夕刊)				
	敬称	敬語			
両陛下パラオへ出発 戦後70年激戦地で慰霊	お/ご「名詞」	ーれる・られる	サ変動詞+れる	お/ごーになる	
	天皇皇后両陛下 皇太子さま 秋篠宮さま	ナシ	入られる 述べられた 語られた	出発された 宿泊される 祈願される 帰国される	ナシ
両陛下パラオ初訪問 きょうペリリュー島で慰霊	「読売新聞」(2015年4月9日 東京夕刊)				
	敬称	敬語			
天皇皇后両陛下	お/ご「名詞」	ーれる・られる	サ変動詞+れる	お/ごーになる	
	ナシ	入られた 語られた 述べられた	ナシ	ナシ	ナシ
両陛下平和へ祈り ペリリュー島慰霊から帰国	「読売新聞」(2015年4月10日 東京夕刊)				
	敬称	敬語			
天皇皇后両陛下	お/ご「名詞」	ーれる・られる	サ変動詞+れる	お/ごーになる	
	ナシ	ささげられた かけられた 入られる 供えられた	帰国された 献花された	ナシ	

3-2 毎日新聞

毎日新聞（2015年4月8日 東京夕刊）今上天皇のパラオへの慰霊の旅についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

記事タイトル「**両陛下、慰霊の旅 戦後70年 パラオへ出発**」

敬語使用の実例：

- 天皇、皇后両陛下は8日午前、羽田空港から民間のチャーター機でパラオ共和国に向けて出発された。
- 午前11時から空港の貴賓室で行われた出発行事には、皇太子さま、安倍晋三首相らが参加。
- これらの地域で激しい戦闘が行われ、幾つの島で日本軍が玉砕しました。

「天皇の言葉の引用」

- 天皇陛下「終戦の前年には、これらの地域で激しい戦闘が行われ、幾つもの島で日本軍が玉砕しました。この度訪れるペリリュー島もその一つで、この戦いにおいて日本軍は約1万人、米軍は約1700人の戦死者を出しています。太平洋に浮かぶ美しい島々で、このような悲しい歴史があったことを私どもは決して忘れてはならないと思います」と述べた。

毎日新聞（2015年4月9日 東京朝刊）今上天皇のパラオへの慰霊の旅についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

記事タイトル「**両陛下パラオ訪問 すべての人々追悼**」

敬語使用の実例：

- 天皇、皇后両陛下は8日午後（日本時間同）、太平洋戦争の激戦地だったパラオ共和国に到着された。

「天皇の言葉の引用」

- 天皇陛下は「先の戦争でなくなったすべての人々を追悼し、遺族の歩んでき苦難の道をしのびたいと思います」とあいさつした。
- その後の晩餐会でレメンゲサウ大統領は「私たちはともに、この地及び太平洋地域全体において命を落とした勇敢な魂に敬意を表し、哀悼

の意をささげます」と述べた。

- 両陛下はパラオの正装である「アイランドフォーマル」に倣い、それぞれ白いシャツとグレーのスラックス、ワンピースのようなグレーのチュニックに着替えて出席された。
- 天皇陛下は晩餐会冒頭のあいさつでそう述べられ、パラオとミクロネシア連邦、マーシャル諸島などからなるミクロネシア地域に対する特別な思いを隠さなかった。
- 陛下もあいさつで「空襲や食糧難、疫病による犠牲者が生じたのは痛ましいことでした」と語った。

以下の表5において、毎日新聞（2015年4月8日、9日 東京夕刊）の皇室敬語表現を「お/ご+名詞」、「れる・られる」、「サ変動詞+れる」、「お/ごーになる」の形式に分類して示す。

表5

新聞社 記事見出し		「毎日新聞」(2015年4月8日 東京夕刊)			
両陛下、慰霊の旅 戦後70年、パラオへ出発	敬 称	敬 語			
		お/ご「名詞」	－れる・られる	サ変動詞+れる	お/ごーになる
	天皇皇后両陛下	ナシ	行われた	出発された	ナシ
	皇太子さま 秋篠宮さま				
悲しい歴史 決して忘れてはならない	毎日新聞社解説				
	敬 称	敬 語			
		お/ご「名詞」	－れる・られる	サ変動詞+れる	お/ごーになる
天皇陛下	ナシ	述べられた	ナシ	ナシ	
両陛下、慰霊の供花 ペリリュー島、持参の白菊	「毎日新聞」(2015年4月9日 東京夕刊)				
	敬 称	敬 語			
		お/ご「名詞」	－れる・られる	サ変動詞+れる	お/ごーになる
天皇皇后両陛下 皇后さま	ナシ	訪ねられた	ナシ	ナシ	
両陛下、ペリリュー島で 供花 父の無念癒され 20年ぶり現地で祈り	敬 称	敬 語			
		お/ご「名詞」	－れる・られる	サ変動詞+れる	お/ごーになる
天皇皇后両陛下	ナシ	ささげられた	ナシ	ナシ	

			刻まれた		
			埋もれた		
			来られた		
			呼ばれた		

3-3 朝日新聞

朝日新聞（2015年4月8日 東京夕刊）今上天皇のパラオ慰霊の旅についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

記事タイトル「パラオへ願い続けた慰霊」

敬語不使用の実例：

- 両陛下は8日夕にパラオ国際空港に到着。
- 両陛下の戦没者慰霊への強い思いがあった。

「天皇の言葉の引用」

- 「私も決して忘れてはならないと思います」と述べた。
- 「心から謝意を表したいと思っております」と語った。

「天皇の言葉の引用」

- 「太平洋に浮かぶ美しい島々でこのような悲しい歴史があったことを、わたしどもは決して忘れてはならないと思います」と述べた。
- 「私どもは先の戦争で亡くなったすべての人々を追悼し、その遺族の歩んできた苦難の道をしのびたいと思います」と述べ、杯をあげた。
- 「遺族の方々は大変感謝すると思ひ」と答えたという。

朝日新聞（2015年4月10日 東京夕刊）今上天皇のパラオへ慰霊の旅についての新聞記事である。その記事で用いられている皇室敬語表現の実例を挙げてみよう。

記事タイトル「平和なペリリュウはきれいですね パラオ慰霊の両陛下戦後70年」

敬語不使用の実例：

「天皇の言葉の引用」

- 「戦争の時は大変だったでしょうね」とそれぞれ声をかけていた。

以下の表6において、朝日新聞（2015年4月8日、9日、10日 東京夕刊）の皇室敬語表現を「お/ご+名詞」、「れる・られる」、「サ変動詞+れる」、「お/ごーになる」の形式に分類して示す。

表6

新聞社 記事見出し	「朝日新聞」(2015年4月8日 東京夕刊)				
パラオへ願い続けた慰霊	敬 称	敬 語			
		お/ご「名 詞」	ーれる・られる	サ変動詞+ れる	お/ごーになる
	天皇后両陛下 皇太子さま 秋篠宮さま	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
両陛下、パラオ訪問戦後70年	「朝日新聞」(2015年4月9日 東京夕刊)				
	敬 称	敬 語			
		お/ご「名 詞」	ーれる・られる	サ変動詞+ れる	お/ごーになる
天皇后両陛下	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	
パラオ慰霊の両陛下戦後70年	「朝日新聞」(2015年4月10日 東京夕刊)				
	敬 称	敬 語			
		お/ご「名 詞」	ーれる・られる	サ変動詞+ れる	お/ごーになる
天皇后両陛下	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	

第4節 三大紙における「昭和天皇崩御」と「今上天皇パラオへの慰霊の旅」 報道の比較

昭和天皇崩御の記事とは異なり、天皇皇后の敬称として三紙は「天皇皇后両陛下」を用いている。

また「皇太子さま」「秋篠宮さま」など皇族の敬称は「さま」を用いている。より敬意が高い「お/ごーになる」の表現が無くなった代わりに読売新聞と毎日新聞は「れる、られる」の表現を用いている。また「朝日新聞」は一切敬語を用いていなかった。

以下の表7で昭和時代の天皇の崩御についての新聞報道と今上天皇のパラオ訪問に関する新聞報道の敬語表現の数を比較対照してみよう。

表7

新聞発行の日付	1989年1月7日「崩御」記事			2015年4月8・9・10日「パラオ」記事		
新聞社	読売新聞	毎日新聞	朝日新聞	読売新聞	毎日新聞	朝日新聞
敬語の分析						
敬称	天皇陛下 親王殿下	天皇陛下 皇太子明仁親王	天皇陛下 皇太子明仁親王	天皇皇后両陛下 皇太子さま 秋篠宮さま	天皇皇后両陛下 皇太子さま 秋篠宮さま	天皇皇后両陛下 皇太子さま 秋篠宮さま
お/ご「名詞」	お 1 ご 14	お 7 ご 7	お 2 ご 8	ナシ	ナシ	ナシ
御	ナシ	20	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
れる・られる	19	12	21	9	5	ナシ
サ変動詞+れる	8	5	8	6	1	ナシ
お/ごーになる	3	2	4	ナシ	ナシ	ナシ
あらせられる	ナシ	5	1	ナシ	ナシ	ナシ
おかせられる	ナシ	1	1	ナシ	ナシ	ナシ

以上、昭和時代の天皇の崩御についての新聞報道と今上天皇のパラオ訪問についての新聞報道の敬語表現の数を比較対照してみると、以下の相違がある。

昭和天皇崩御の際には三紙とも天皇の敬称に相違がない。三紙はいずれにおいても「天皇陛下」「親王殿下」「皇太子」と称している。毎日新聞に掲載された「参院議長謹話全文」「首相謹話全文」の中では、逝去した昭和天皇を「大行天皇」と称しているが、これは毎日新聞の記者が書いた文章ではない。

敬語としては「お/ご+名詞」、「れる・られる」、「サ変動詞+れる」、「お/ごーになる」を三紙とも用いていた。また、「宮内庁の発表文」「参院議長謹話全文」「首相謹話全文」では「お」「ご」と仮名表記される場合より敬意の高いといわれる「御」の表記があった。さらに、最も敬意が高い敬語「あらせられる」「おかせられる」を用いることもあった。

今上天皇のパラオ訪問に関しての新聞報道は、天皇敬称として三紙は「天皇皇后両陛下」を用いている。皇室皇族に「皇太子さま」「秋篠宮さま」など皇族の敬称は「さま」を用いている。より敬意が高い「お/ごーになる」の表現は三紙とも用いていなかった。

読売新聞は「れる、られる」を用いていた。天皇の言葉の引用については、「〇〇と述べられた」、「〇〇と語られた」などの敬語表現を用いていた。

毎日新聞は「れる、られる」を用いていた。天皇の言葉の引用については、「〇〇と述べられた」、「〇〇と語られた」と敬語表現を用いていたが、しかし所々「〇〇とあいさつした」「〇〇と述べた」「〇〇と語った」などのような表現を用いていた。敬語表現を用いないこともあった。

朝日新聞は本文、「〇〇に到着」、「〇〇があった」などの常体の表現を用いていた。「れる、られる」のような敬語表現は使っていなかった。また、天皇の言葉の引用については、「〇〇と述べた」、「〇〇と語った」、「〇〇と述べ、杯をあげた」、「〇〇と答えたという」、「〇〇とそれぞれ声をかけていた」のような常体の表現を用いていた。

皇室敬語表現は一切敬語を用いていないことが明らかになった。これは、時代の変化に伴い皇室敬語表現の変化と考えられる。

第5節 三大紙報道における皇室敬語表現の特徴

5-1 調査結果の〈まとめ〉

以上の調査結果に基づいて、全体的な傾向を考察・検証・分析を試みた。筆者は、読売新聞・毎日新聞・朝日新聞の三大紙の昭和時代の天皇の崩御についての新聞報道と今上天皇のパラオ訪問についての新聞報道の皇室敬語表現の特徴を明らかにしてみたい。

まず、敬称については、三大紙とも天皇の敬称には時代を問わず、「天皇陛下」が用いられていたことが明らかになった。これは、近年出版された、一般社団法人共同通信社(編集)記者ハンドブック「新聞用字用語集」に沿って、原則として皇室に対する敬称として『皇室典範』に基づいて定めている。

戦前は「天皇陛下」「聖上陛下」にほぼ二分されていた天皇の呼称は、戦後は「天皇陛下」に統一された。その理由は「プレスコード」^{注2}により終戦直後の出版物はすべて検閲が行われ、必要以上に天皇を讃えていると思われる「聖上陛下」という表現は用いられなくなったからである。

敬称である「陛下」を引き続き用いているのは、『皇室典範』に依拠しているからであろう。

昭和末期から平成にかけては天皇の呼称について大きな変化は見られず、新聞報道では「天皇陛下」を用いることが一般的である。

皇族に対する敬称について現在の『皇室典範』では、「天皇、皇后、太皇太后及び皇太后以外の皇族の敬称は殿下とする」と規定されている。ただし、現在の報道では「殿下」はあまり用いられず、「さま」が主に用いられている。

敬語表現については、まず、読売新聞は昭和天皇「崩御」の際には、皇室敬語表現としては「お/ご+名詞、れる・られる、される、お+になる」が使用されている。

次に、毎日新聞に載せられた参院議長謹話の全文、首相謹話の全文の中で尊敬・敬意が高い「御+名詞」の使用が多く見られた。さらに、最も敬意が高い敬語である動詞「ある」に尊敬の助動詞「せる」と「られる」が付いた「あらせられる」と動詞「おく」の未然形に尊敬の助動詞「せる」の未然形と尊敬の助動詞「られる」の付いた「おかせられる」が用いられることもあった。

最後に、朝日新聞には「お/ご+名詞、れる・られる、される、お+になる」などが用いられていることが明らかになった。例えば、「〇〇で崩御された」「〇〇において崩御あらせられました」「〇〇が認められた」しかし、最も注目したのは「社説」の中で用いられた敬語表現である。例えば、「〇〇過ぎされた」、「〇〇ご生涯だった」、「〇〇語っておられたにもかかわらずお伝えになり」敬意が高い敬語表現「お+になる」などが用いられていることが明らかになった。

今上天皇のパラオ訪問についての新聞報道の皇室敬語表現について、以下のように考えている。

まず、読売新聞は「れる、られる」を用いていた。天皇の言葉の引用について、「〇〇と述べられた」「〇〇と語られた」などの敬語表現を用いていた。しかし、昭和末期のような「お+になる」という敬語表現は使用していなかった。

次に、毎日新聞も「れる、られる」を使っていたが、読売新聞と同様、昭和末期のような「お+になる」という敬語表現は使用していなかった。天皇の言葉を引用する際には、「〇〇と述べられた」「〇〇と語られる」という敬語表現は用いられていたが、所々「〇〇と述べた」「〇〇と語った」のように敬語表現を用いていないこともあった。

最後に、朝日新聞の皇室敬語表現についてであるが、朝日新聞は記事の中では敬語表現が一切見当たらなかった。天皇の言葉を引用する際にも「〇〇と述べた」「〇〇と語った」を用いていた。

以上の調査結果に基づいて背景を検証・分析してみよう。

5-2 調査結果の背景分析

調査結果から見ると新聞における敬語表現の変遷については様々な視点から分析・検証が必要である。

1、歴史的な背景からの天皇に対する尊敬と敬意

渡辺友左は次のように解説している^{注3}。

日本国の立憲民主制を支えている二つの柱、即ち、民主主義と世襲天皇制はもともと本質的には相容れないものである。現行憲法は、天皇制に根本的な変革を加えたが、天皇制そのものの廃止はなかった。天皇の世襲制そのものの廃止もしなかった。

日本国憲法

第1条 天皇は日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は主権の存在する日本国民の総意に基づく。

第2条 皇位は世襲のものであつて、国会の議決した皇室典範の定めるところにより、これを継承する。

皇室典範

第1条 皇位は皇統に属する男系の男子がこれを継承する。

つまり日本国民統合の象徴である天皇の地位につくのは、その個人の才能や人格・徳性によってではなく、もっぱらその人の生まれによるとされたのである。これは、法の下での平等を規定した憲法14条の精神とは相容れない。国民はすべてその能力にしたがい、かつ徳性および才能以外にもとづいて差別されることなしに平等にあらゆる公の榮譽・地位および職業につくことができる。

これが民主主義下の平等である。この民主主義的平等を保障したのが憲法14条である。ところが天皇は例外である。

天皇は天皇個人の能力や人格・徳性によって天皇の地位につくのではなくひとえにその〈生まれ〉によって天皇の地位につくとされたのである。

昭和天皇は、昭和21年の年頭詔書によって神からわたしたち一般国民と同じ人間に変わったばかりでなく、わたしたち一般国民と相互の信頼と敬愛とによって結ばれることになったのである。天皇とわたしたち国民が相互の信頼と敬愛、とりわけ敬愛によって結ばれるという社会関係は、旧憲法時代における両者の身分的な上下関係からは生まれるはずがない。そこから生まれてくるものは、天皇に対する〈臣民〉(〈国民〉ではない)の一方的な畏敬の念だけである。天皇と国民の相互の敬愛の念は、国民が天皇と自由平等の関係に立って、初めて生まれてくるものである。

しかし、新聞が旧憲法時代の伝統を引き継いで、依然として天皇・皇室(それに、それとのバランスをはかるために、国賓として来日した外国の国王など)だけに敬語表現を残している状況の下では、このような天皇と国民の自由平等の関係は決して成り立ち得ないであろう。それを成立させるためにも、新聞は、天皇や皇室に対するこれまで

の敬語表現の慣行を廃止すべきであろう。

2、新聞報道の姿勢及び読者の意識

杉本（秋本）は次のように述べている^{注4}。今日の新聞のニュース記事では、皇室に限って敬語表現を使うという原則が記されている。新聞が戦前の近代社会からずっと守り続けてきた原則なのである（テレビやラジオでも、皇室のニュース記事には必ず敬語表現を使っている）。

しかし、この原則は、近代社会の最初、つまり明治初期からあったものではない、近代社会発展に伴って、明治後期に確立された原則なのである。明治初期の新聞は商人などの平民は別として、公卿、将軍、大名などの後身である華族、それに官員（役人）や軍人などにも敬語表現を使っていた。それが原則であったのである。

ところがこの原則は明治中期に崩れ、後期には今日の原則へ、華族にも、そして官員や軍人にも、平民と同じように敬語表現が使われなくなり、使われるのは皇室だけになった。現在の原則ができたのである。

しかし、占領期の新聞の皇室敬語簡素化については昭和22年（1947年）8月4日付の『新聞協会報』の一面のトップ記事がその宮内当局と報道関係の話し合いの結果を詳しく報じていた。「宮廷用語の一新 宮内府・各社申し合わせ」と題されたトップ記事には次に示す6項目の敬語簡略化用法要領が示されている。

- 1、皇室だからといってこれまでのような特殊な封建的な言葉を使用しない。
- 2、敬語は現代一般に使用されている最上の言葉にとどめる。
- 3、二重の敬語はやめて単純な敬語を用いる。
- 4、内容の伴わない敬語は一切用いない。
- 5、制限漢字は使用しない、ただし宮廷内だけで使用する特殊用語、いいかえの出来ない役職名、儀式の固有名詞などは当分そのままとする。
- 6、国民の一人となった陛下ではあるがそのために好奇心をそそるような用語はなるべくさける。（例えば天皇のプロマイドというような表現）

以上のような杉本（秋本）による新聞報道の姿勢及び読者の意識の観点から述べていた。

平成時代になってからの大きな変化は注目に値する。これは、近年、一般社団法人共同通信社が編集した記者ハンドブック『新聞用字用語集』の影響と思われる。過去何回か年に出版された記者ハンドブック『新聞用字用語集』から、皇室用語についての具体的な内容を取り上げ、比較してみるとその相違点が明らかになってくる。

以下の表8は、記者ハンドブック『新聞用字用語集』[第9版]による皇室用語について第1条、第2条に書かれたものである。

表8

記者ハンドブック[第9版] 『新聞用字用語集』	出版日	ページ
	2001/3	p556 p558
皇室用語について		
皇室用語の扱い	使う用語例	使わない用語例
<p>1 皇室に対しては、原則として敬称、敬語を使う。敬称については『皇室典範』が天皇、皇后、太皇太后、皇太后には「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めており、敬称、敬語の使用について国民感情も共同通信の世論調査では「今のままでよい」が多数を占めている。</p> <p>2 ただし、敬語が過剰にならないようにし、特に二重敬語を使わないよう注意する。</p> <p>敬語が多いと読みにくいので、できるだけ敬語を減らすよう工夫する。</p> <p>〔例〕 ご出席される→出席される ご一緒に乗車される→一緒に乗車される 一緒に乗られる また文章の末尾が「された」「される」「…とお忙しい」などと、敬語で受ける場合は、前段の敬語は原則として省略する。</p> <p>動詞の敬語法は次の型がある。①れる られる〔例〕書かれる 出席される 贈られる ②お〇〇になる〔例〕お書きになる お着きになる ③ご出席になる ご覧になる 「注」②③の型はできるだけ使わない。</p>	<p>天皇陛下、皇后陛下、皇后さま、太皇太后、皇太子殿下、皇太子さま、皇太子妃雅子さま、雅子さま、秋篠宮さま、秋篠宮殿下、秋篠宮妃紀子さま、秋篠宮妃紀子妃殿下、紀子さま、真紀子さま、佳子さま</p>	<p>天皇さま、皇后宮 皇太后陛下、東宮殿下、秋篠宮文仁殿下、秋篠宮妃殿下</p>

以下の表9は、記者ハンドブック『新聞用字用語集』[第10版]による皇室用語について第1条、第2条に書かれたものである。

表9

記者ハンドブック[第10版]『新聞用字用語集』	出版日	ページ
	2005/3/10	P585 p587
皇室用語について		
皇室用語の扱い	使う用語例	使わない用語例
<p>1 皇室に対しては、原則として敬称、敬語を使う。敬称については『皇室典範』が天皇、皇后、太皇太后、皇太后には「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めており、敬称、敬語の使用について国民感情も共同通信の世論調査では「今のままでよい」が多数を占めている。</p> <p>2 ただし、敬語が過剰にならないようにし、特に二重敬語を使わないよう注意する。</p> <p style="padding-left: 2em;">敬語が多いと読みにくいので、できるだけ敬語を減らすよう工夫する。</p> <p>〔例〕 ご出席される→出席される ご一緒に乗車される→一緒に乗車される 一緒に乗られる また文章の末尾が「された」「される」「…とお忙しい」などと、敬語で受ける場合は、前段の敬語は原則として省略する。</p> <p>動詞の敬語法は次の型がある。①れる られる〔例〕書かれる 出席される 贈られる ②お○○になる〔例〕お書きになる お着きになる ③ご出席になる ご覧になる 「注」②③の型はできるだけ使わない。</p>	<p>天皇陛下、皇后陛下、皇后さま、太皇太后、皇太子殿下、皇太子さま、皇太子妃雅子さま、雅子さま、愛子さま、敬宮さま</p> <p>秋篠宮さま、秋篠宮殿下、秋篠宮妃紀子さま、秋篠宮妃紀子妃殿下、紀子さま、真紀子さま、佳子さま</p>	<p>天皇さま、皇后宮</p> <p>皇太后陛下、東宮殿下、秋篠宮文仁殿下、秋篠宮妃殿下</p> <p>下</p>

以下の表 10 は、記者ハンドブック『新聞用字用語集』[第 11 版] による皇室用語について第 1 条、第 2 条に書かれたものである。

表 10

記者ハンドブック[第 11 版] 『新聞用字用語集』	出版日	ページ
	2008/3/14	p593 p595
皇室用語について		
皇室用語の扱い	使う用語例	使わない用語例
<p>1 皇室に対しては原則として敬語を使う。ただし、過剰にならないよう注意し、特に二重敬語は使わない。敬語が多いと読みにくいので、第一文の最後の述語一か所だけに使用することを基本とし、複数個所には使わない（長文の場合や、文中に複数の皇族が登場する場合はケースによって判断）必ずしも敬語を使う必要はない。</p> <p>「お着きになる」「ご覧になる」などお〇〇になる、ご〇〇になる—という敬語表現はできるだけ使わない。</p> <p>2 皇室に対する敬称として皇室典範は天皇、皇后、皇太后、太皇太后は「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めているが、記事上「陛下」は天皇だけに使う。天皇、皇后と併記する際は「両陛下」とする。「殿下」は原則として使用せず、皇后や皇太子など皇族は「さま」を使う。夫婦や家族単位で主語になる際は敬称を省いて「ご夫妻」「ご一家」などとする。「皇太子さまご夫妻」とはしない。</p>	<p>天皇陛下、皇后さま、太皇太后、皇太子さま、皇太子妃雅子さま、雅子さま、愛子さま、敬宮さま、秋篠宮さま、秋篠宮妃紀子さま、紀子さま、真紀子さま、佳子さま、悠仁さま</p>	<p>天皇さま、皇后宮東宮殿下、秋篠宮文仁殿下、秋篠宮妃殿下</p>

以下の表 11 は、記者ハンドブック『新聞用字用語集』[第 12 版] による皇室用語について第 1 条、第 2 条に書かれたものである。

表 11

記者ハンドブック[第 12 版] 『新聞用字用語集』	出版日	ページ
	2010/10	P602 p604
皇室用語について		
皇室用語の扱い	使う用語例	使わない用語例
<p>1 皇室に対しては原則として敬語を使う。ただし、過剰にならないよう注意し、特に二重敬語は使わない。敬語が多いと読みにくいので、第 1 文の最後の述語 1 か所だけに使用する。長文の場合や、文中に複数の皇族が登場する場合はケースによって判断する。主語が未成年皇族の場合、敬語を使う必要はない。</p> <p>「お着きになる」「ご覧になる」などお〇〇になる、ご〇〇になる—という敬語表現は使わない。</p> <p>2 皇室に対する敬称として皇室典範は天皇、皇后、皇太后、太皇太后は「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めているが、記事上「陛下」は天皇だけに使う。天皇、皇后と併記する際は「両陛下」とする。「殿下」はできるだけ使用せず、皇后や皇太子など皇族は「さま」を使う。夫婦や家族単位で主語になる際は敬称を省いて「ご夫妻」「ご一家」などとする。「皇太子さまご夫妻」とはしない。</p>	<p>天皇陛下、皇后さま、皇太子さま、皇太子妃雅子さま、雅子さま、愛子さま秋篠宮さま、秋篠宮妃紀子さま、真子さま、佳子さま、悠仁さま</p>	<p>天皇さま、皇后宮皇太后陛下、東宮殿下、愛子内親王殿下、秋篠宮文仁殿下、秋篠宮妃殿下、真子内親王殿下、佳子内親王殿下、悠仁親王殿下、</p>

以下の表 12 は、記者ハンドブック『新聞用字用語集』[第 13 版] による皇室用語について第 1 条、第 2 条に書かれたものである。

表 12

記者ハンドブック[第 13 版] 『新聞用字用語集』	出版日	ページ
	2016/3/22	P562 p564
皇室用語について		
皇室用語の扱い	使う用語例	使わない用語例
<p>1 皇室に対しては原則として敬語を使う。ただし、過剰にならないよう注意し、特に二重敬語は使わない。敬語が多いと読みにくいので、第 1 文の最後の述語 1 カ所だけに使用する。長文の場合はケース・バイ・ケースで判断する。主語が未成年皇族の場合、敬語を使う必要はない。</p> <p>「お着きになる」「ご覧になる」などお〇〇になる、ご〇〇になる—という敬語表現は使わない。</p> <p>2 皇室に対する敬称として皇室典範は天皇、皇后、皇太后、太皇太后は「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めているが、記事上「陛下」は天皇だけに使う。天皇、皇后と併記する際は「両陛下」とする。「殿下」はできるだけ使用せず、皇后や皇太子など皇族は「さま」を使う。夫婦や家族単位で主語になる際は敬称を省いて「ご夫妻」「ご一家」などとする。「皇太子さまご夫妻」とはしない。</p>	<p>天皇陛下、皇后さま、皇太子さま、皇太子妃雅子さま、雅子さま、愛子さま秋篠宮さま、秋篠宮妃紀子さま、真子さま、佳子さま、悠仁さま</p>	<p>天皇さま、皇后宮東宮殿下、愛子内親王殿下、秋篠宮文仁殿下、秋篠宮妃殿下、真子内親王殿下、佳子内親王殿下、悠仁親王殿下、</p>

ここに、記者ハンドブック『新聞用字用語集』(9 版～13 版) を要約し、比較してみよう。

9 版は、皇室に対しては原則として敬称・敬語を使う。

敬称については皇室典範が天皇、皇后、太皇太后、皇太后には「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めており、敬称・敬語の使用について共同通信の世論調査では国民感情も「今のままでよい」が多数を占めている。

ただし、敬語が過剰にならないようにし、特に二重敬語を使わないよう注意する。

敬語が多いと読みにくいので、できるだけ敬語を減らすよう工夫する。

〔例〕 ご出席される→出席される ご一緒に乗車される→一緒に乗車される 一緒に乗られる。また、文章の末尾が「された」「される」「…とお忙しい」など、敬語で受ける場合は、

前段の敬語は原則として省略する。

動詞の敬語法は次の型がある。①れる られる〔例〕書かれる 出席される 贈られる
②お〇〇になる〔例〕お書きになる お着きになる ③ご出席になる ご覧になる
「注」②③の型はできるだけ使わない。

10版は9版の定めている内容に変わりはない。できるだけ使わないのは、「お〇〇になる」
「ご〇〇になる」〔例〕「お書きになる お着きになる」「ご出席になる ご覧になる」

11版は皇室に対しては原則として敬語を使う。ただし、過剰にならないように注意する。特に二重敬語は使わない。敬語が多いと読みにくいので、第一文の最後の述語一か所だけに使用することを基本とし、複数個所には使わない（長文の場合や、文中に複数の皇族が登場する場合にはケースによって判断）。必ずしも敬語を使う必要はない。

「お着きになる」「ご覧になる」など「お〇〇になる」、「ご〇〇になる」という敬語表現は、できるだけ使わない。ここは9版、10版と同様に、「できるだけ使わない」。

皇室に対する敬称として皇室典範は、天皇、皇后、皇太后、太皇太后は「陛下」、それ以外の皇族には「殿下」とすることを定めているが、記事の上では、「陛下」は天皇だけに用いる。天皇、皇后と併記する際は、「両陛下」とする。「殿下」は原則として使用しない。

12版は、主語が未成年皇族の場合、敬語を使う必要はない。

「お着きになる」「ご覧になる」など「お〇〇になる」、「ご〇〇になる」という敬語表現は使わない。この点が大きく変わっている。今まで「できるだけ使わない」と書いていたのに、12版では以上のような「敬語表現は使わない」と書かれている。

皇后や皇太子などの皇族は「さま」を使う。夫婦や家族単位で主語になる際は敬称を省いて「ご夫妻」「ご一家」などとする。「皇太子さまご夫妻」とはしない。

13版は長文の場合はケース・バイ・ケースで判断する。主語が未成年皇族の場合は、前述の通り敬語を使う必要はない。

以上記述された表の内容を比較すると、記者ハンドブック『新聞用字用語集』各版とも皇室敬語についての新聞報道が大きく変わりつつことが判明した。その特徴が平明で簡素な傾向に、さらには、簡潔な表現へと進んでいる。

一方、天皇は日本国民統合の象徴である。だから皇室報道の在り方としては、敬語を使うのは妥当であるし、当然である。このような考えをもっている日本の国民の中にも多数いる。

朝日新聞は1993年4月に「皇室敬語」に関する世論調査を実施したことがある^{注5}。この調査は全国約9300万人の有権者の中から3000人を抽出し、調査員が個別に面接する形で実施したとのことである。有効回答者は2312人。有効回答率の内訳は男47%、女53%であった。

- 「新聞では、天皇皇族には「陛下」「殿下」「さま」などの特別な敬称を使っています。

あなたは、こうした特別な敬称についてどう思いますか」と質問にしたところ

使った方がよいと思いますか。 使う必要はないと思いますか。
と質問にしたところ

使った方がよい 76%という結果であった。
使う必要はない 15%という結果であった。
その他・答えない 9%という結果であった。

- 新聞では、皇室について報道する時だけ「おでかけになる」「あいさつされる」など、敬語を使っています。

あなたは、皇室に関する新聞報道では敬語を使った方がよいと思いますか。

使う必要はないと思いますか。と質問にしたところ

使った方がよい 74%という結果であった。
使う必要はない 18%という結果であった。
その他・答えない8%という結果であった。

朝日新聞社は上記で紹介した全国世論調査の実施から7か月後の1993年11月に、同社社長の諮問機関である「紙面審議会」を開催した。朝日新聞社の社長が「朝日新聞」の紙面の在り方について、社長自らじきじきに外部の有識者に意見を聴く諮問機関の会議である。皇后さまが10月20日に体調を崩された時の記事をめぐる敬語問題、報道の自由と節度など、皇室報道について議論した。渡辺友左^{注6}によると次のようにまとめられている。

各委員の活発な発言によると「日本の皇室の場合、法的対抗措置を取ることがむずかしいため孤立してしまう。節度を保たないとむしろ皇室報道を困難にしかねない」。一方、皇室報道に当たっては「象徴天皇制」の意味をじっくり考えて見る必要があるとの意見も出ている。「天皇は国民統合の象徴であらせられるという見解と、象徴にすぎないという解釈がある。前者は、昭和天皇のような行動様式が望ましいという考え方。後者は、開かれた皇室でなければならないとする立場につながる。開かれた皇室の立場に立つとしても皇室のプライバシーの範囲は狭く、それに過度に踏み込むことは、法律的にも報道機関のルールとしても好ましくない」「国民統合の象徴という意味があいまいなところに報道のむずかしさがある」など、天皇の微妙な立場についての指摘があった。「人

間天皇としての機能をもっと明確にすべきだ」などの指摘もあり、マスコミの役割の重要性が改めて問われた。

また、敬語については、出来るだけすっきりしたいとする社の考えに対し、「あまりにもそっけなくはないか。敬語は日本文化であり、日本語の美点でもある」「昔のように敬語を連ねる必要はないが、さりげなく入れる配慮がほしい」という意見や、これとは逆に「敬語をどう使うかより、人間宣言以後の天皇制の意味をいかに伝えるかの方が大切」「敬語さえ使えばいいとするのは、国際社会では通用しない」などの意見もあったと述べている。

社としてはこれらの意見を参考に、基本的には、「開かれた皇室」を目指しつつ、事実面に即した報道に努めたいと考えている。敬語の取り扱いについても、新聞用語の社会的な責任を十分考慮し、真剣に考えていく方針などを説明した。

具体的には、動詞の部分では敬語をできるだけ避けつつ、皇室典範の規定に沿った敬称の取り扱いを原則とし、記事の種類によって皇后や殿下を「さま」とするなど、読者に親しみを感じてもらうような表現を使うよう努めている。

さらに、「客観報道」の原則である。皇室についての事柄が、一般の出来事と同じ言葉で報道されることによってこの社会の健全さが担保される部分がある。新聞について言えば、特定の署名記事やコラムを除いて、紙面の大部分を占める一般記事は客観的な取材、報道を前提としている。少なくとも戦後は「権力」に対して距離を置き、意識的に対象化しようとすることで、チェック機能を果たす意思を示してきた。それは、報道機関が引き受けた社会的使命でもあった。

ところが、こと皇室になると例外扱いされた。敬語の使用を皇室記事の基本としたことで、客観的な報道は棚上げにされた。日本新聞協会の『新聞用語集』やマスコミ各社が社内向けに出している用語用例集などを見ると、いずれも皇室に対しては敬語を使うこととしながら、「なぜ使うか」の理由は明示していない。

朝日新聞の場合も『皇室用語用例集』（1990年3月発行）で「皇室に対しては国民感情などに照らして相当と思われる敬語を使う。ただし、過剰な敬語を使わないことを基本とする」と敬語使用の原則を示した。そして、敬語を使った記事を読者が読む時、読者は必然的に記事の中の「敬意」を体験することになる。天皇制や皇室について特別の思いを持っていない読者が一般の記事を読むと同じに特別警戒感を持たずに読めば、自然に親近感の枠内に誘導されることになる。

これは、信頼感を基本に新聞を読んでいる読者に対してある意味で失礼であり、また、フェアでないように思われる。

1993年12月に「皇室記事に関する取り決め集」が作られ、述語には敬語を使わないことが決められたという。つまり、朝日新聞社は皇室記事の無敬語表現が新方針である。

石田直敏は次のように述べられている。

全国世論調査結果によると敬語を使った方が良いと意見が出たにもかかわらず、朝日新聞社は無敬語へ大きく方針転換をしたのである。

天皇自らが人間宣言をした。民主主義・国民主権の現代社会における天皇制。そしてまた、著しく国際化が進んだ現代社会における天皇制。そのような現代社会における新聞用語の社会的責任。朝日新聞社は、これらのことを十分に考慮し、真剣に考えた。その結果としての無敬語への方針転換であろうと思われる。

以上のような『朝日新聞』の皇室記事の無敬語表現に対する様々な意見と観点があつた。

5-3 本章研究の結論

本章では、三大新聞の皇室報道、即ち、昭和の天皇の崩御に関する報道、及び今上天皇のパラオ訪問に関する報道についての敬語表現の調査を行い、それぞれ、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞との間で、皇室敬語表現に相違があることを明らかにした。

先ず、読売新聞は従来、皇室敬語表現を使用し続けていたことの主たる理由としては、様々な歴史的背景が影響したことが考えられる。

例えば、「日本国憲法」、『皇室典範』、記者ハンドブック『新聞用字用語集』に基づいて皇室敬語について定められた皇室敬語表現の規則である。しかし、時代の変化と共に皇室敬語表現も変わっていく。昭和天皇の崩御の際の新聞報道では敬語表現「お+になる」を使っていたが、今上天皇のパラオ訪問の際には「お+になる」が見当たらなかった。これは、上記の通りである。記者ハンドブック第11版『新聞用字用語集』一般社団法人共同通信社が編集された第1条に従って、変化したと考えられる。

即ち、第11版には『「お着きになる」「ご覧になる」などお〇〇になる、ご〇〇になる—という敬語表現はできるだけ使わない』と定められている。

現代社会の中で、著しく変化した新聞報道の皇室に対する敬語表現であると言えよう。天皇は日本国民統合の象徴である。だから皇室報道の在り方としては、敬語を使うのは妥当だと考える日本の国民も多数いるのであろう。

次に、毎日新聞も同じように昭和天皇の崩御の際に敬語表現「お+になる」を使っていたが、今上天皇のパラオ訪問の際の新聞報道には「お+になる」が見当たらなかった。毎日新聞もまた前述した通り、読売新聞と同様の理由で変化したと考えられる。さらに、天皇の言葉の引用の際には、所々「〇〇と述べた」「〇〇と語った」のような敬語表現を使っていないことも現れていた。その簡素化の理由として、国語審議会は、1952年（昭和27年）4月14日第14回総会において、別冊「これからの敬語」について議決していた。国語審議会は1952年に「従来の複雑な敬語を廃し、民主主義社会にふさわしい平明で簡素な敬語にすべきだ」と建議していたことによって、簡素化が一層進んだと言えよう。また、平成19年2月に、文化審議会が答申として「敬語の指針」を発表した。それが背景になって、一般の敬語表現が変化したことが影響されたかもしれないと思われる。しかし、平成時代になってから名詞に接頭辞「お/ご」がつく例は見られず、見出されたのは動詞の「れる・られる、される」だけである。その変化が明らかになった。

最後に、朝日新聞は他2紙と同じように昭和天皇の崩御の際の天皇の敬称については、その時の三大紙には大きな変化はなく、天皇陛下が用いられていた。敬語表現については、「お+になる」を用いていた。その時三大紙には大きな変わりがなく、敬語表現を用いていた。

しかし、今回の調査の中での、朝日新聞は、今上天皇のパラオ訪問についての報道には敬語表現が見当たらなかった。

本章の調査結果に当たっては、昭和末期までは三大紙ともに天皇・皇族に対して敬語・敬称を用いていたのであり、戦前における皇室敬語表現の名残りがあったと考えられる。

ところが、昭和から平成へと時が推移すると共に三大紙における皇室敬語にも変化が現れている。朝日新聞は敬語を使用せず、敬称のみとなっている。他二紙は名詞に接頭辞「お/ご〇〇になる」の例は見られず、動詞の「れる・られる、される」だけの敬語表現を簡素化しつつも依然として用いていた。このことは、読者の意識への傾向に従ったものであろう。

かくして、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞の相違は、報道の姿勢に違いがあると考えられる。各社が自社の理念を貫くか、読者の意識の傾向に従うかという姿勢の相違でもあるかもしれない。

注

- 1 ジェームズ・カラン (2007) 『メディアと権力』 381 頁 監訳 渡辺武達 発行者 森下 紀夫 発行所 論創所
- 2 「プレスコード」とは「GHQ が新聞・出版活動を規制するために発した規制」『大辞泉 増補・新装版』のこと
- 3 渡辺友左 (1986) 「戦後日本の民主化と天皇に対する敬語行動の標準」— 国語問題としての皇室敬語— 教育科学研究会国語部会の機関誌『教育国語』第 85 号 442～443 頁むぎ書房
- 4 杉本 (秋本) 典子 (2008) 「占領期の新聞の皇室敬語簡素化」社会言語科学 123 頁
- 5 「朝日新聞」1993 年 5 月 9 日 (日) 付 朝刊
- 6 渡辺友左 (1999) 「現代社会と敬語の言語社会的な一考察」『中京大学社会紀要』272～273 頁

第3章 新聞における「外来語言い換え提案」に関する調査分析

—大学生を対象として

第1節 研究の意義・目的・方法

1-1 意義・目的・方法

新聞は公共媒体として社会の中で重要なものと位置付けられている。本章では、新聞において外来語はどのように扱われているか調査する。1981年発行の『朝日新聞の用語の手引き』では、外来語は「文語調、漢語脈の熟語、直訳体や翻訳体、官庁用語、専門用語」などと並んで、乱用を避けるべきものとして挙げられている。新聞においては、常に外来語に対して「乱用しないように注意する」という規制意識が働いているが、それは具体的な禁止ではなく、強制力を持つものでもない。近年、特に公共性の高い言語使用で、外来語が氾濫しコミュニケーションの阻害をきたしているということが指摘される。国立国語研究所「外来語」委員会は平成2002年8月、「外来語言い換え」を提案した。これまで2003～2006年の間に176語の外来語について言い換えのための手引きが提示された。そして、「公共媒体の外来語「外来語」言い換え提案を支える調査研究」を公開した（2007年6月13日）。これは議論を呼んだ。

外来語は借用語の一種である。国立国語研究所が調査したところによると、雑誌の常用外来語は3000語、新聞はやや多くて4500語であったという。また、日本のテレビ、新聞、ラジオをよく理解するために必要な外来語は5000語前後、少なくとも2000語だということから容易ではない。外来語が増加したことによって日本語学習者に対して大きな影響される。外来語がコミュニケーションを阻害する情報バリアとなっていることが示唆されてきた。コミュニケーション問題における外来語の問題としては、量の多さ、多様さ、専門性などが指摘されている。読売新聞社による調査（2003）によれば、「あなたは普段の生活でカタカナ語がわからなくて困ることがありますか。ありませんか」という質問に対し、2003年時点で88%が困難を感じているという結果が報告されている^{注1}。

また、国立国語研究所「外来語」委員会（2006）では、1965年刊行の雑誌90種と1994年刊行雑誌70種の語種の比率を比較し、約40年の間に外来語の比率が3.5倍に増加したことを明らかにしている。日本社会の国際化に伴って急速に増えたカタカナ外来語においてその意味が「分かりにくい」と一般に認識される傾向があることを示している。国立国語研究所が2005年に公表した「外来語に関する意識調査」においてたとえば「ハザードマップ」については、全体の91.1%が「災害予測地図」などに言い換えて良いと答えた。その理

由は「わかりやすいから」が7割以上を占めた。その批判的な意見も見られ、日本語母語話者にとって外来語は「日本語の乱れ」として否定的に捉えられる傾向もある。日本語教育の現場においても、特に海外日本語学習者にとって大変な難関であり、「苦手な」ことばとして扱われている実態も報告されている^{注2}。

以上の問題を踏まえて、言葉遣いを工夫し提案することを目的におこなわれたのが国立国語研究所による「外来語」言い換え提案である。2003年～2006年の間に176語の外来語について言い換えのための手引きが提示された。外来語の言い換え案を全国の自治体はどう受け止めているか調べた、回答した自治体は1808である。外来語の言い換え案は「非常に参考になる」が44.6%、「ある程度参考になる」が53.2%を占めていた。「今後も継続した方が良い」80.0%「これから行う」も7.2%だった。「必要とは思いますが、今のところ予定はない」が76.8%にのぼり、「必要とは思わない」が6.7%だった。

一方、1995年の文化庁の国語に関する世論調査で、外来語の増加に対しては、それほど抵抗を感じていない人が多く、特に若い世代には増加を容認する割合が高いという結果が出ている。

本稿では、新聞における「外来語」言い換え提案に関する調査に基づいて、日本の現代社会において大学生を対象にして、外来語への関心度、理解度、適切性、使用意識などを探りたいと考えている。具体的には、国立国語研究所「外来語」言い換え提案のうちから「朝日新聞」に現れる頻度の高い上位10の外来語を中心に調査した。または、それ以外の10の外来語を取り上げ、調査の結果を分析し、日本語表現の多様な姿を捉え、現状の外来語の氾濫に問題提起をしたいと思う。

調査に当たっては、朝日新聞社が提供している朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」、読売新聞社が提供している読売新聞記事データベース「ヨミダス歴史館」、毎日新聞社が提供している毎日新聞記事検索を活用した。

東京（朝刊・夕刊版）1991年から2015年までのすべて記事を対象にして国立国語研究所「外来語」言い換え提案に挙げられた外来語を検索し、抽出したものを対象にする。

1-2 外来語の概念

「外来語」^{注3}とは、もとは外国語であるが、取り入れられて日本語の一部として用いられるようになった語をさし、狭義には、漢語を除いて考えるのが一般である。日本語の語彙の中でも外国語を語源とするものであり、カタカナで表記される語彙を指すこととする。一方、「借用語」と「外来語」は日本においては使い分けをされることがある。特に「漢語」は「借用語」であって「外来語」ではないという意見を述べる人もいる。『日本語大辞典』(小学館)では

- a) 外来語：ある国に、外国語から取り入れられて、本来の語と大差なく用いられるようになった語。日本語では、普通は漢語を含めない。主として室町時代以後、欧米諸国から入った語をいう。和製英語も外来語である。
- b) 借用語：ある言語が他の言語から取り入れて、日常に用いている語。日本語における鮭(さけ=アイヌ語)・旦那(だんな=サンスクリット語)・更紗(サラサ=ポルトガル語)などの類。狭義には、テレビ、ファンなど、外来の意識のあるものについていう。漢語の多くは中国からの借用であるが、普通は他の借用語とは別に扱われる。

このように解説している。さらに『広辞苑』の定義をみると

- a) 外来語：外国語で、国語に用いるようになった語。狭義では、漢語を除く。
- b) 借用語：ある体系・位相に取り入れられ、まったく同化されて日常的に使われる外国語・古語・方言など異なる体系・位相の語。外来語と同じ意に使うこともある。

また、『大辞泉』によると

- a) 外来語：他の言語から借用し、自国語と同様に使用するようになった語。借用語。日本語では広義には漢語も含まれるが、狭義には、主として欧米諸国から入ってきた語をいう。現在では一般に片仮名で表記される。
- b) 借用語：もともとは他の言語から取り入れられた語であっても、その言語に同化し全く日常化してしまっているような語。日本語における「さけ(鮭)」(アイヌ語)「だんな(旦那)」(サンスクリット語)「きせる(煙管)」(カンボジア語)などのように説明されている。どの辞書の定義を見ても、「外来語」も「借用語」も他言語から借用され、本来語(自国語)と同様に使われている語であり、狭義には「漢語」は「外来語」に含まれていないという定義では一致している。

現代日本語の語彙構成は国立国語研究所の語彙調査では 1956 年に刊行された一般人向けの雑誌 90 種を調べた調査がある。和語 36.7%、漢語 47.5%、外来語 9.8%、混種語 6.0% によって 1994 年刊 70 種雑誌の中で和語 25.4%、漢語 33.5%、外来語 34.8%、混種語 6.3% を占めている^{注4}。

また、1966 年に新聞を対象とした調査を行った。朝日新聞、毎日新聞、読売新聞についてこの年の朝夕刊一年分を対象とした大調査であった。この結果では、異なり語数でみると、本来語である和語が 38.8%、漢語系外来語が 44.3%、その他の外来語が 12.0%、混種語

4.8%となっていた。外来語が日本語全体の60%以上を占めていた^{注5}。

以上のそれぞれ調査によると外来語使用について、増加したことが明らかになった。

第2節 「朝日新聞」における外来語の言い換え語の使用調査

新聞や雑誌の記事、あるいは、公的機関からの通知など、日常生活で目に触れる文章には、外来語が高い比率を占めている。特に「朝日新聞」は3大全国紙の一つで、比較的政府を批判する論調が多い。今回の国立国語研究所の言い換え語提案に関して、「朝日新聞」はどのような使用状況があるのか。実際、国立国語研究所の外来語の言い換え語の中でどのぐらい使用されたか。調査する。

国立国語研究所の言い換え語提案に基づいて、1991年から2015年までに発行され「朝日新聞」東京（朝刊・夕刊版）を中心に調査を行う。5年間に区切りとして176語の外来語言い換え語を調べたその結果、上位40語の中で、さらに、抽出した使用頻度の高い上位10語の外来語を調査分析する。

以下の表1～表2において「朝日新聞」1991年から2015年の25年間に、5年間に区切りでそれぞれの外来語の言い換え語の中で抽出した使用頻度の高い上位40語を示す。

表1

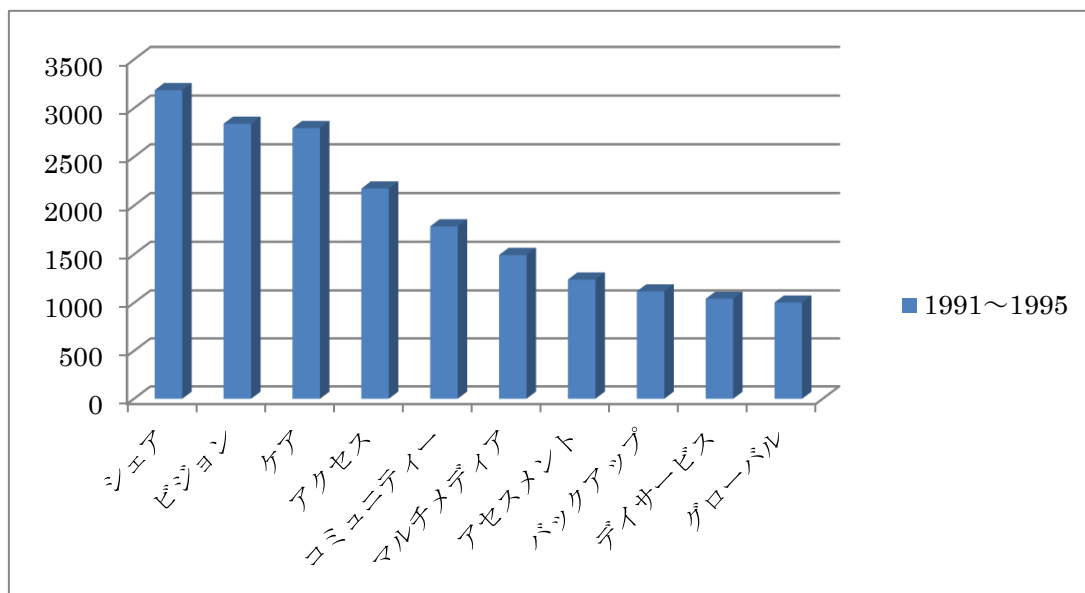
外来語	91～95	96～00	01～05	06～10	11～15	合計
アクセス	2424	5295	6641	7068	7129	28557
アセスメント	1480	2725	921	662	760	6548
アナリスト	384	1051	1457	1531	1175	5598
イノベーション	706	836	851	1232	2135	5760
インパクト	834	1460	1654	2120	2203	8271
インフラ	734	1889	2313	3346	5785	14067
ガイドライン	1211	7495	2059	2057	2386	15208
グローバル	1228	2602	3970	4159	5295	17254
ケア	2795	9258	10106	9923	10627	42709
コミュニティ	1787	4488	4887	4689	5634	21485
コラボレーション	36	221	852	1297	1065	3471
コンセプト	515	1063	1855	2372	2665	8470
コンテンツ	17	378	1048	1374	2037	4854
コンプライアンス	6	45	488	1196	954	2689
シェア	3185	4343	5235	4940	4861	22564
シフト	937	984	1472	1747	1949	7089
シミュレーション	933	1488	1860	1354	1892	7527
シンクタンク	1010	1614	1803	1776	1691	7894
スキル	51	241	580	1115	1449	3436
スタンス	740	1243	1663	1758	1745	7149

表 2

外来語	91～95	96～00	01～05	06～10	11～15	合計
セキュリティ	125	434	1357	1045	1227	4188
ツール	305	772	1020	1474	2055	5626
デイサービス	1300	3314	1863	1720	1811	10008
トレンド	332	676	1054	962	1059	4083
パートナーシップ	570	1203	1164	1175	1313	5425
ハザードマップ	23	113	602	415	1149	2302
バックアップ	1343	1542	1497	1413	1352	7147
バリアフリー	64	2266	3929	2205	1673	10137
ビジョン	2840	3590	4387	4380	4070	19267
プレゼンテーション	63	287	700	992	1211	3253
フロンティア	753	688	1104	1073	1001	4619
マーケティング	742	1506	2102	2356	2246	8952
マネジメント	492	1475	2359	2757	2723	9806
マルチメディア	1493	2672	635	340	203	5343
ミッション	710	1110	1294	1513	2052	6679
モチベーション	10	104	601	1171	1636	3522
ライフライン	563	763	788	663	1195	3972
リアルタイム	343	857	1001	850	1112	4163
リニューアル	136	938	2158	3063	3675	9970
ワークショップ	766	2632	4326	4748	5660	18132

以下のグラフ 1 は「朝日新聞」東京版 1991～1995 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

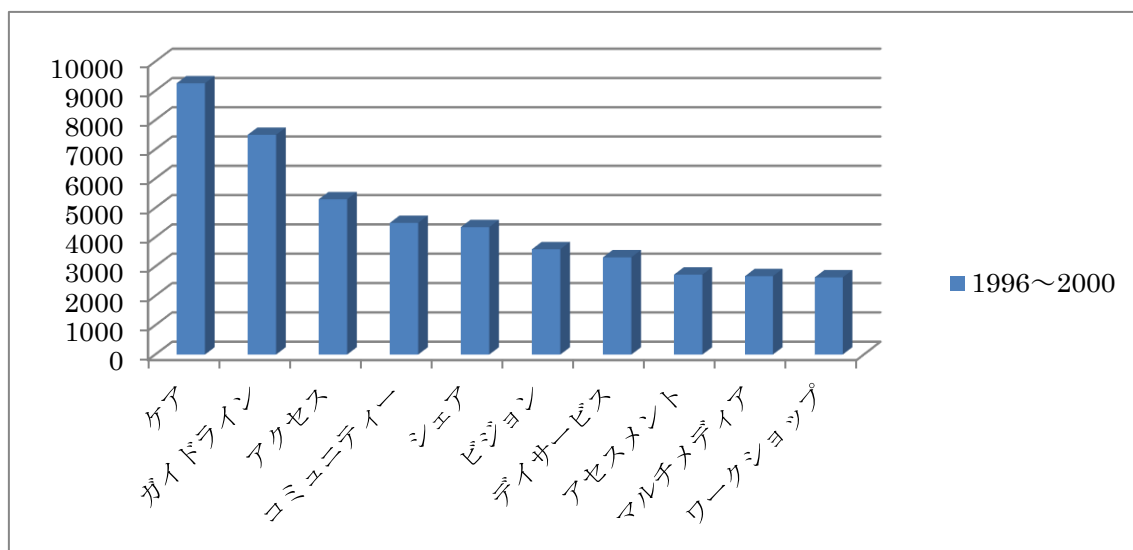
グラフ 1



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「シェア(①占有率 ②分かち合う 分け合う)」3185 件であり、次は「ビジョン (展望)」2840 件で、第 3 位は「ケア (手当て 介護)」2795 件を示す。第 4 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」、2424 件で、第 5 位は「コミュニティー (地域社会 共同体)」1787 件である。

以下のグラフ 2 は「朝日新聞」東京版 1996～2000 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

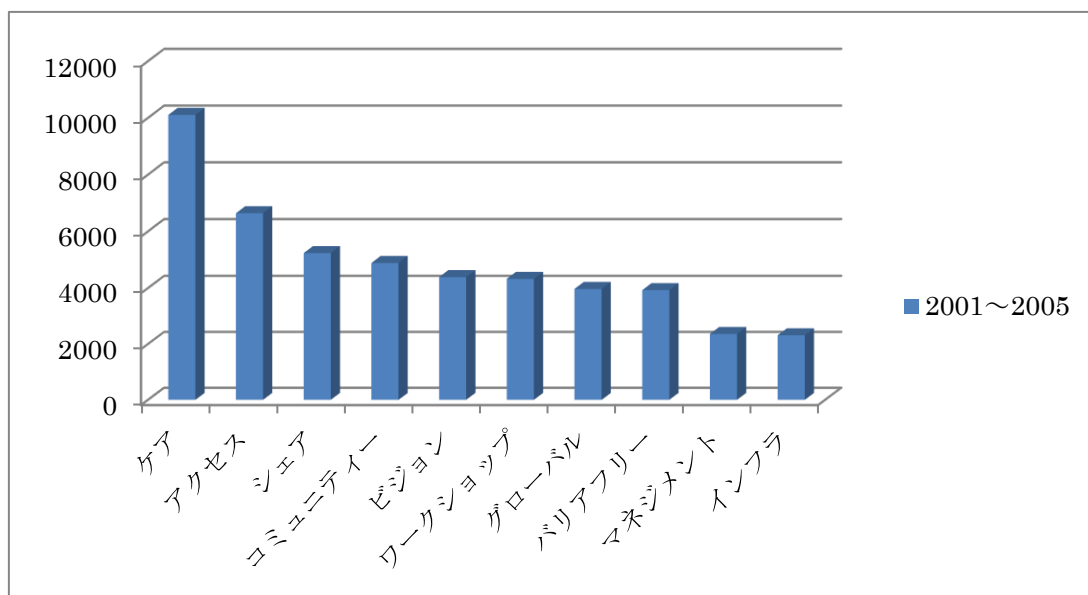
グラフ 2



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「ケア (手当て 介護)」9258 件であり、続いては「ガイドライン (指針)」7495 件で、第 3 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」、5295 件第 4 位は「コミュニティー (地域社会 共同体)」4488 件、第 5 位は「シェア」4343 件である。

以下のグラフ 3 は「朝日新聞」東京版 2001～2005 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

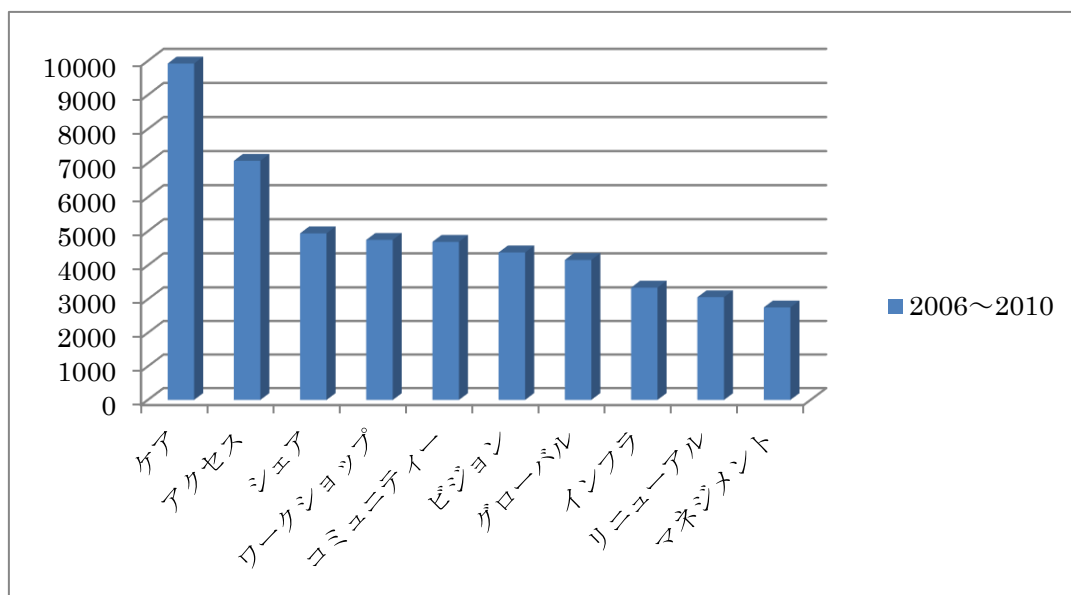
グラフ 3



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「ケア (手当て 介護)」10106 件であり、続いては「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」6641 件で、第 3 位は「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」5235 件、第 4 位は「コミュニティー (地域社会 共同体)」4887 件であり、第 5 位は「ビジョン (展望)」4387 件である。

以下のグラフ 4 は「朝日新聞」東京版 2006～2010 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

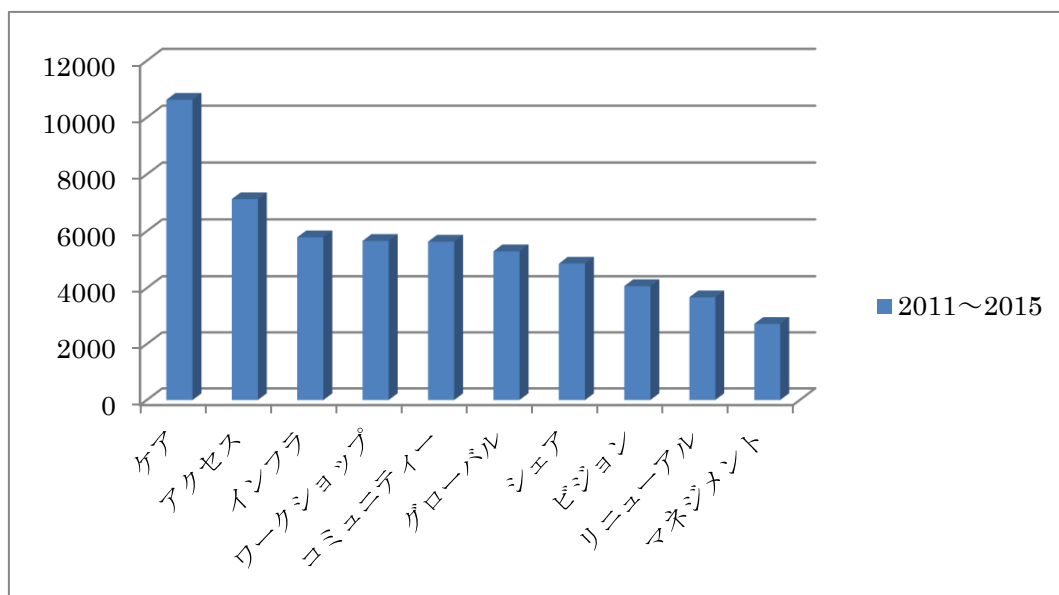
グラフ 4



このグラフを比較して見るとこの 5 年間に一番よく使われた外来語は「ケア (手当て 介護)」9923 件であり、続いては「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」7068 件で、第 3 位は「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」4940 件、第 4 位は「ワークショップ (研究集会)」4748 件、第 5 位は「コミュニティー (地域社会 共同体)」4689 件である。

以下グラフ 5 は「朝日新聞」東京版 2011～2015 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

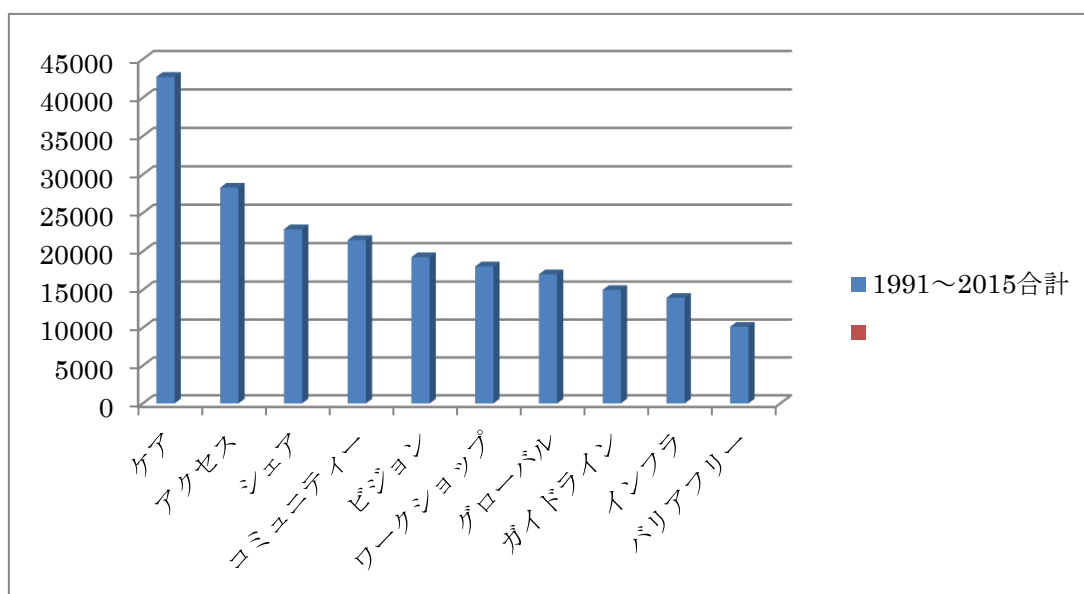
グラフ 5



このグラフと 2011～2015 年を示したグラフ比較して見るとこの 5 年間一番よく使われた外来語は殆ど変わりなくて相変わらず「ケア (手当て 介護)」が一番よく使われている、10627 件であり、続いては「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」7129 件で、第 3 位は「インフラ (社会基盤)」5785 件、第 4 位は「ワークショップ (研究集会)」5660 件、第 5 位は「コミュニティー (地域社会 共同体)」5634 件である。

以下グラフ 6 は「朝日新聞」東京版 1991 年から 2015 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

グラフ 6



「朝日新聞」東京版 1991 年から 2015 年まで 25 年間に於いて頻度の高い外来語第 1 位は「ケア (手当て 介護)」42709 件であり、第 2 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」28557 件、第 3 位は「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」22564 件、第 4 位は「コミュニティー (地域社会 共同体)」21484 件、第 5 位は「ビジョン (展望)」19267 件、第 6 位は「ワークショップ (研究集会)」18132 件、第 7 位は「グローバル (地球規模)」17254 件、第 8 位は「ガイドライン (指針)」15208 件、第 9 位は「インフラ (社会基盤)」14067 件、第 10 位は「バリアフリー (障壁なし)」10137 件である。

以下の表 3 は「朝日新聞」1991 から 2015 年において 5 年間の区切り外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

表 3

年間順位	1991～1995	1996～2000	2001～2005	2006～2010	2011～2015
1	シェア	ケア	ケア	ケア	ケア
2	ビジョン	ガイドライン	アクセス	アクセス	アクセス
3	ケア	アクセス	シェア	シェア	インフラ
4	アクセス	コミュニティー	コミュニティー	ワークショップ	ワークショップ
5	コミュニティー	シェア	ビジョン	コミュニティー	コミュニティー
6	マルチメディア	ビジョン	ワークショップ	ビジョン	グローバル
7	アセスメント	デイサービス	グローバル	グローバル	シェア
8	バックアップ	アセスメント	バリアフリー	インフラ	ビジョン
9	デイサービス	マルチメディア	マネジメント	リニューアル	リニューアル
10	グローバル	ワークショップ	インフラ	マネジメント	マネジメント

第3節 「読売新聞」における外来語の言い換え語の使用調査

以下の表4～表5は「朝日新聞」に基づいて抽出した外来語の言い換え40語について「読売新聞」1991年から2015年の25年間に、5年間に区切りでそれぞれ、外来語の使用頻度の語を示した調査の状況である。

表4

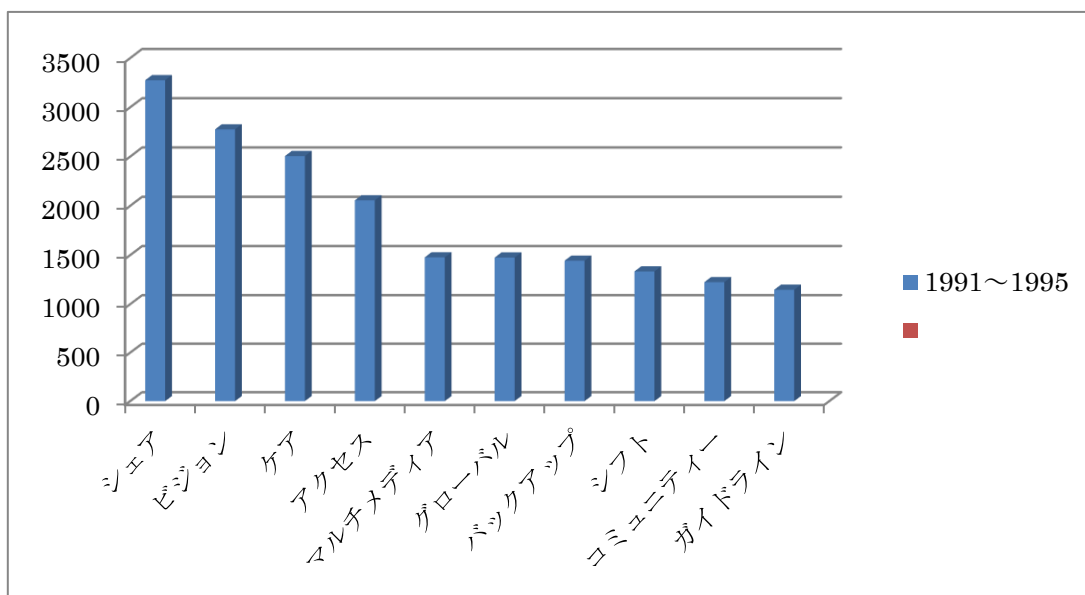
外来語	91～95	96～00	01～05	06～10	11～15	合計
アクセス	2056	4381	6288	3529	3703	19957
アセスメント	452	1063	747	366	360	2988
アナリスト	1059	780	1290	1149	1128	5406
イノベーション	48	92	228	567	1234	2169
インパクト	916	1201	1483	1269	1109	5978
インフラ	1006	1953	2140	1808	3729	28236
ガイドライン	1148	4488	1833	1159	1368	9996
グローバル	1475	2897	4118	3099	4020	15609
ケア	2505	7138	9832	8982	9160	37617
コミュニティー	1225	3001	7306	6510	7229	25271
コラボレーション	27	95	385	470	368	1345
コンセプト	485	834	1314	668	653	3954
コンテンツ	19	490	1049	904	883	3345
コンプライアンス	5	57	467	1214	944	2687
シェア	3275	3871	4403	3302	3094	17945
シフト	1334	1340	1350	604	640	5268
シミュレーション	729	1243	1823	630	708	5133
シンクタンク	759	1362	1086	323	200	3730
スキル	55	136	482	799	865	2337
スタンス	980	1320	1640	1322	1063	6325

表 5

外来語	91～95	96～00	01～05	06～10	11～15	合計
セキュリティ	168	447	1021	593	950	3179
ツール	454	664	928	1039	1426	4511
デイサービス	269	2053	2238	1738	2061	8359
トレンド	730	575	774	602	954	3635
パートナーシップ	846	1105	1171	687	468	4277
ハザードマップ	14	69	670	433	1196	2382
バックアップ	1443	1704	2096	1680	1465	8388
バリアフリー	28	1446	3605	1571	1153	7803
ビジョン	2776	3204	5323	3741	2704	17748
プレゼンテーション	74	276	521	372	450	1693
フロンティア	553	603	1147	779	944	4026
マーケティング	703	1015	2041	1949	1449	7157
マネジメント	520	1497	2737	1999	1759	8512
マルチメディア	1477	2147	759	362	189	4934
ミッション	840	935	1440	1417	1389	6021
モチベーション	13	143	302	313	312	1083
ライフライン	415	592	776	517	744	3044
リアルタイム	410	964	1135	469	305	3283
リニューアル	121	805	1657	613	539	3735
ワークショップ	380	1044	2685	1459	1539	7107

以下のグラフ7は「読売新聞」東京版 1991～1995 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

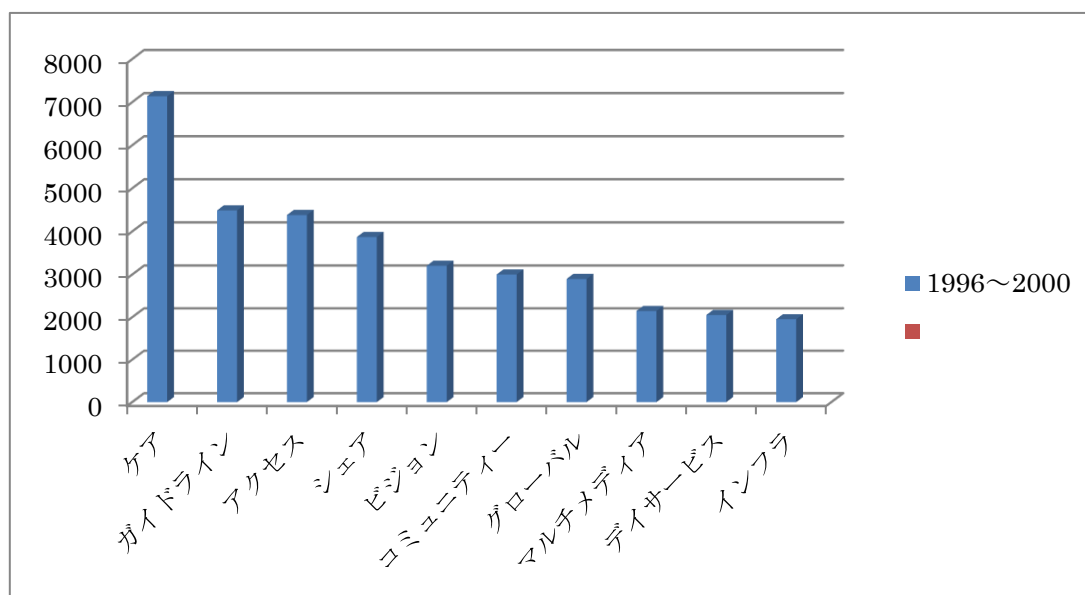
グラフ 7



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「シェア(①占有率 ②分かち合う 分け合う)」3275 件であり、次は「ビジョン (展望)」2776 件で、第 3 位は「ケア (手当て 介護)」2505 件を示す。第 4 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」、2056 件で、第 5 位は「マルチメディア (複合媒体) 1477 件である。

以下のグラフ 8 は「読売新聞」東京版 1996～2000 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

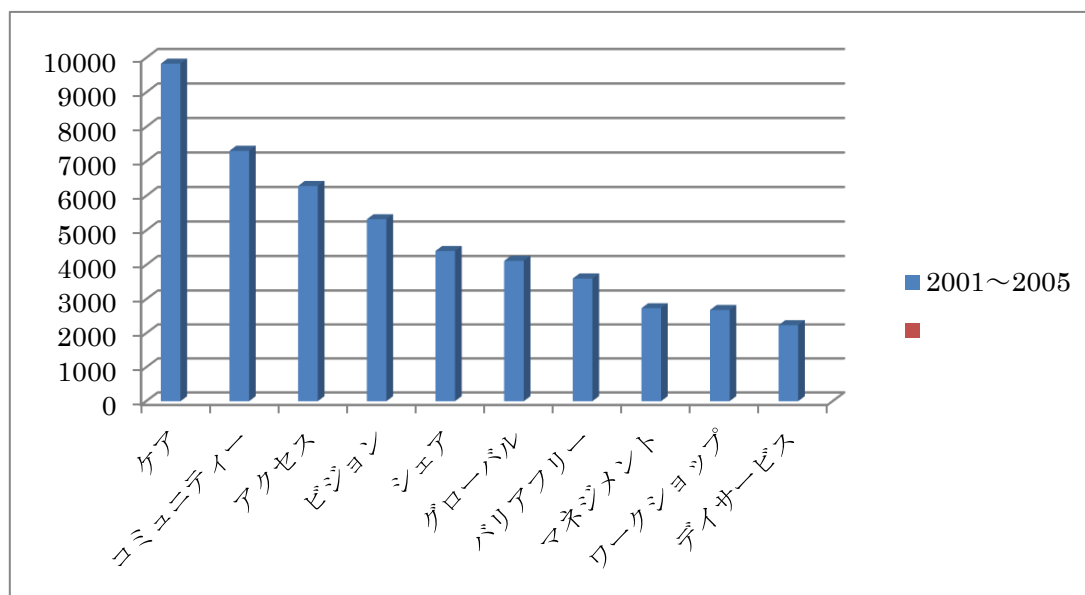
グラフ 8



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「ケア (手当て 介護)」7138 件であり、続いては「ガイドライン (指針)」4488 件で、第 3 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」4381 件、第 4 位は「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」3871 件、第 5 位は「ビジョン (展望)」3204 件である。

以下のグラフ 9 は「読売新聞」東京版 2001～2005 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

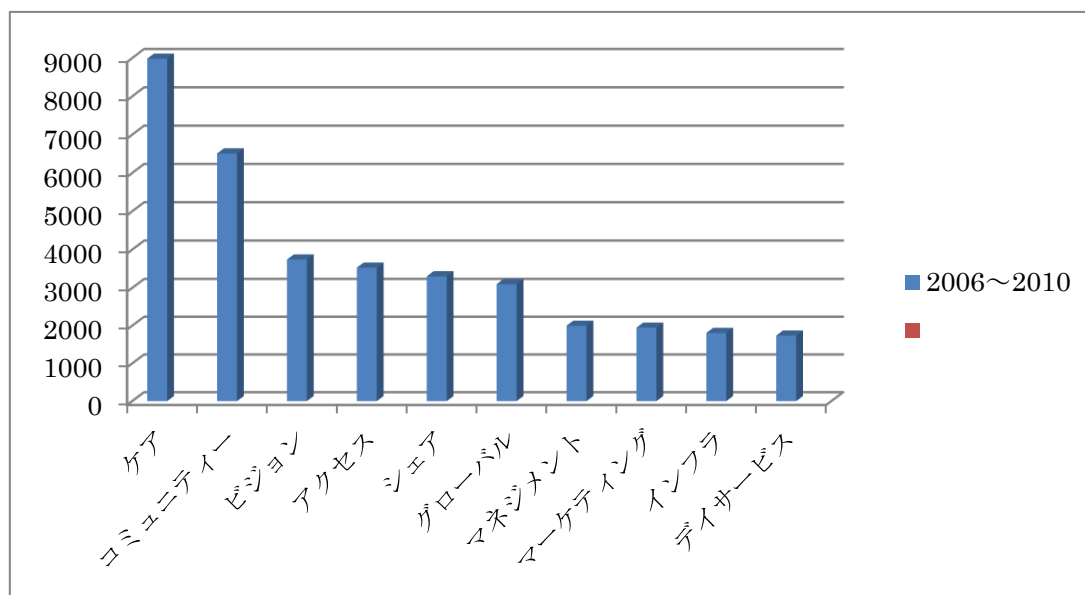
グラフ 9



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「ケア (手当て 介護)」9832 件であり、続いては「コミュニティー (地域社会、共同体) 7306 件で、第 3 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」6288 件、第 4 位は「ビジョン (展望)」5323 件であり、第 5 位は「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」4403 件である。

以下のグラフ 10 は「読売新聞」東京版 2006～2010 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

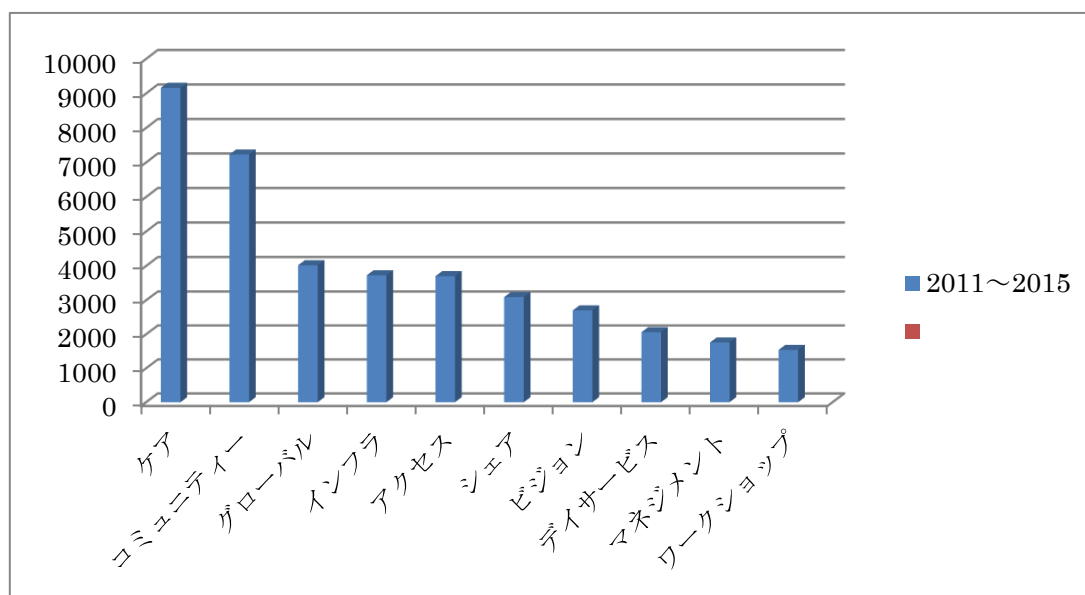
グラフ 10



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「ケア (手当て 介護)」8982 件であり、続いては「コミュニティー (地域社会、共同体)」6510 件で、第 3 位は「ビジョン (展望)」3741 件、第 4 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」3529 件、第 5 位は 「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」3302 件である。

以下のグラフ 11 は「読売新聞」東京版 2011～2015 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

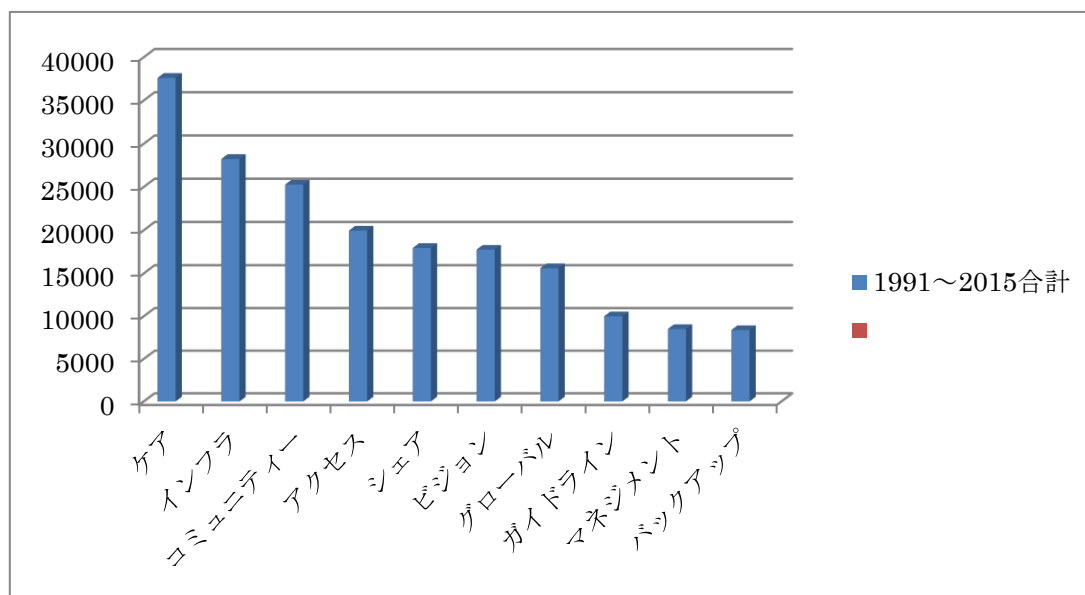
グラフ 11



このグラフと 2011～2015 年を示したグラフ比較して見ると、この 5 年間一番よく使われた外来語は殆ど変わりなくて相変わらず「ケア（手当て 介護）」が一番よく使われている、9160 件であり、続いては「コミュニティー（地域社会、共同体）」7229 件で、第 3 位は「グローバル（地球規模）」4020 件、第 4 位は「インフラ（社会基盤）」3729 件、第 5 位は「アクセス（①接続 ②交通手段 ③参入）」3703 件である。

以下グラフ 12 は「読売新聞」東京版 1991 年から 2015 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

グラフ 12



「読売新聞」東京版 1991 年から 2015 年まで 25 年間に於いて使用頻度の高い外来語第 1 位は「ケア (手当て 介護)」37617 件であり、第 2 位は「インフラ (社会基盤)」28236 件、第 3 位は「コミュニティー (地域社会 共同体)」25271 件、第 4 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」19957 件、第 5 位は「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」17945 件、第 6 位は「ビジョン (展望)」17748 件、第 7 位は「グローバル (地球規模)」15609 件、第 8 位は「ガイドライン (指針)」9996 件、第 9 位は「マネジメント (経営管理) え 8512 件、第 10 位は「バックアップ (①支援 ②控え) 8388 件である。

以下の表 6 は「読売新聞」1991 から 2015 年において五年間の区切りごとにそれぞれ、外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

表 6

年間順位	1991～1995	1996～2000	2001～2005	2006～2010	2011～2015
1	シェア	ケア	ケア	ケア	ケア
2	ビジョン	ガイドライン	コミュニティー	コミュニティー	コミュニティー
3	ケア	アクセス	アクセス	ビジョン	グローバル
4	アクセス	シェア	ビジョン	アクセス	インフラ
5	マルチメディア	ビジョン	シェア	シェア	アクセス
6	グローバル	コミュニティー	グローバル	グローバル	シェア
7	バックアップ	グローバル	バリアフリー	マネジメント	ビジョン
8	シフト	マルチメディア	マネジメント	マーケティング	デイサービス
9	コミュニティー	デイサービス	ワークショップ	インフラ	マネジメント
10	ガイドライン	インフラ	デイサービス	デイサービス	ワークショップ

第4節 「毎日新聞」における外来語の言い換え語の使用調査

以下の表7～表8は「朝日新聞」に基づいて抽出した外来語の言い換え40語について「毎日新聞」1991年から2015年の25年間に、5年間に区切りでそれぞれ、外来語の使用頻度の語を示した調査の状況である。

表7

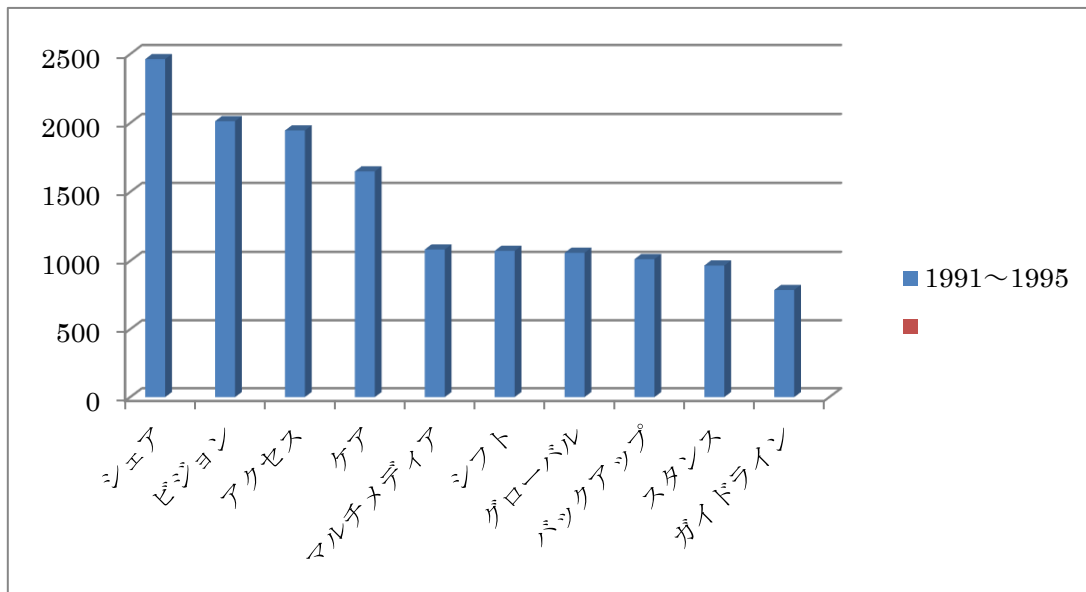
外来語	91～95	96～00	01～05	06～10	11～15	合計
アクセス	1946	2867	2544	2173	2348	11878
アセスメント	289	681	250	319	458	1997
アナリスト	230	767	882	1088	1218	4185
イノベーション	35	77	123	370	548	1153
インパクト	584	871	719	1041	1067	4282
インフラ	704	1381	1189	1416	3125	7815
ガイドライン	789	3858	1280	1067	1264	8258
グローバル	1059	2128	2262	2361	2368	10178
ケア	1649	3258	3470	3339	3387	15103
コミュニティー	487	1024	1005	915	1263	4694
コラボレーション	29	118	275	431	357	1210
コンセプト	531	1000	894	1026	937	4388
コンテンツ	14	560	830	886	633	2923
コンプライアンス	5	48	310	608	400	1371
シェア	2463	3490	2844	2837	2505	14139
シフト	1073	1262	1118	996	1075	5524
シミュレーション	548	804	591	496	662	3101
シンクタンク	504	1271	1003	835	1076	4689
スキル	22	113	196	356	360	1047
スタンス	967	1024	822	724	733	4270

表 8

外来語	91～95	96～00	01～05	06～10	11～15	合計
セキュリティー	130	432	937	625	788	2912
ツール	226	416	374	614	708	2338
ディサービス	124	502	324	373	403	1726
トレンド	568	776	2146	1123	532	5145
パートナーシップ	778	850	571	603	4176	6978
ハザードマップ	4	30	119	100	251	504
バックアップ	1013	942	682	636	600	3873
バリアフリー	31	654	1012	471	405	2573
ビジョン	2013	1999	2279	2230	1567	10088
プレゼンテーション	61	200	216	361	439	1277
フロンティア	306	304	309	275	334	1528
マーケティング	457	841	820	931	785	3834
マネジメント	328	820	944	1132	1001	4225
マルチメディア	1083	1728	303	216	114	3444
ミッション	600	654	481	757	767	3259
モチベーション	5	33	106	506	543	1193
ライフライン	272	229	368	252	581	1702
リアルタイム	343	574	468	349	450	2184
リニューアル	229	641	759	930	854	3413
ワークショップ	278	572	601	509	658	2618

以下のグラフ 13 は「毎日新聞」東京版 1991～1995 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

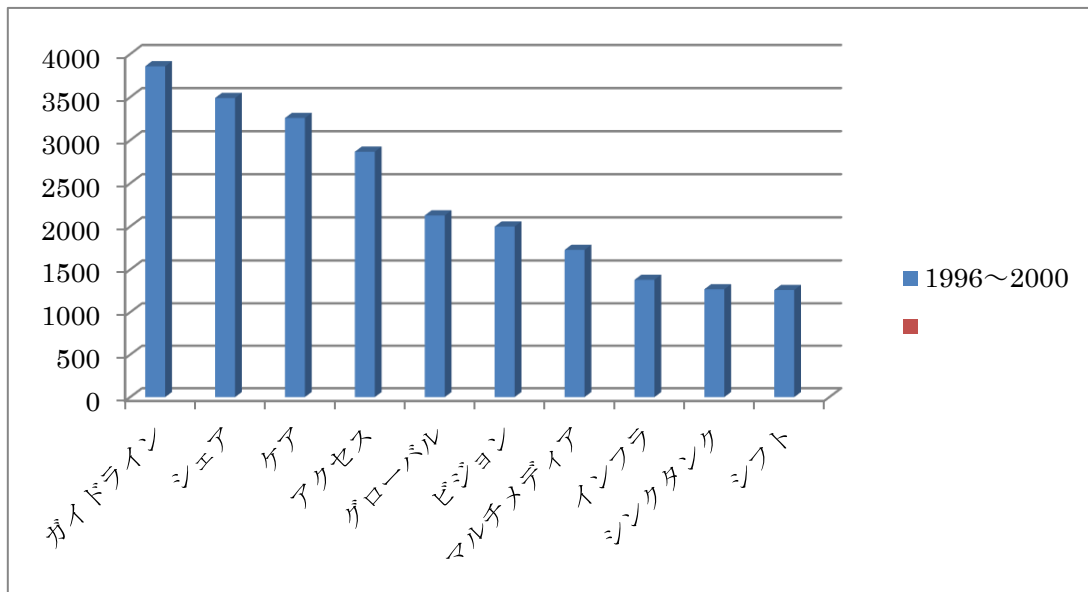
グラフ 13



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「シェア(①占有率 ②分かち合う 分け合う)」2463 件であり、次は「ビジョン(展望)」2013 件で、第 3 位は「ケア(手当て 介護)」1649 件を示す。第 4 位は「アクセス(①接続 ②交通手段 ③参入)」1446 件で、第 5 位は「マルチメディア(複合媒体)」1083 件である。

以下のグラフ 14 は「毎日新聞」東京版 1996～2000 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

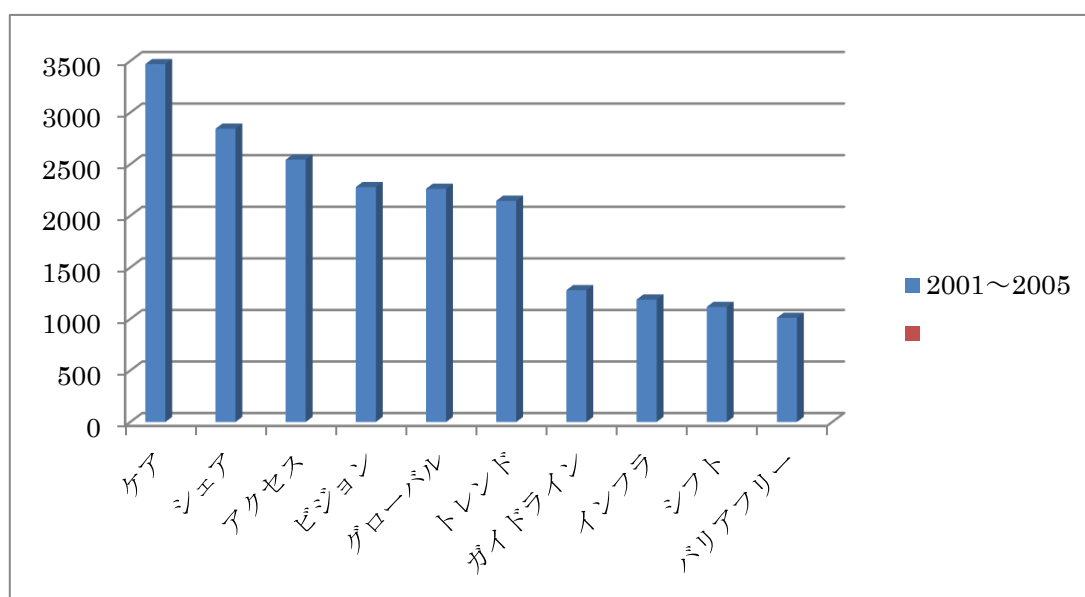
グラフ 14



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「ガイドライン (指針)」3858 件、次は「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」3490 件であり、第 3 位は「ケア (手当て 介護)」3258 件を示す。第 4 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」2867 件で、第 5 位は「グローバル (地球規模)」2128 件である。

以下のグラフ 15 は「毎日新聞」東京版 2001～2005 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

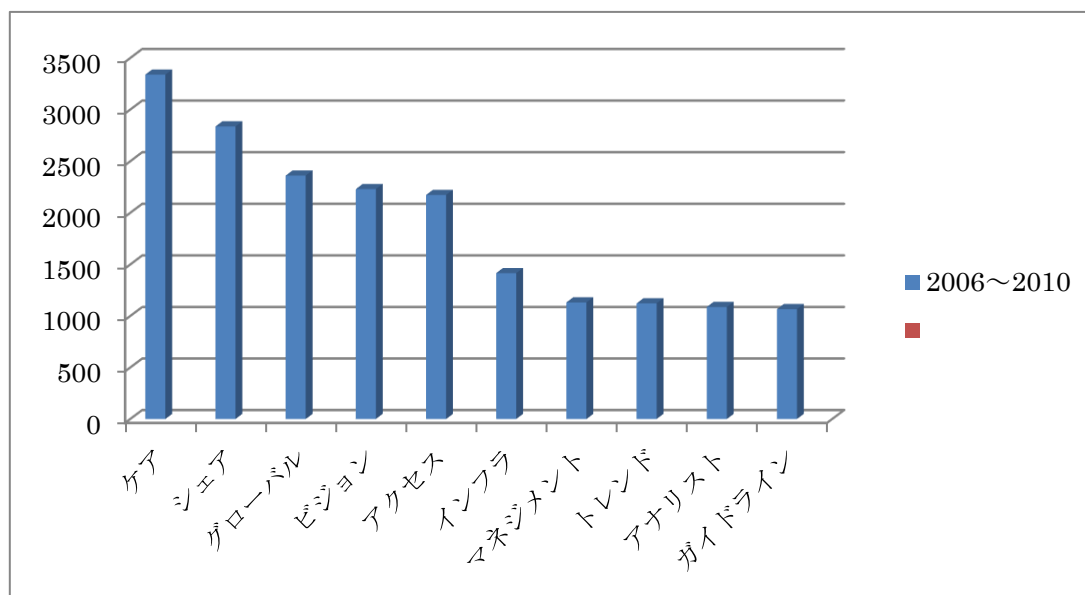
グラフ 15



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「ケア (手当て 介護)」3470 件であり、続いては「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」2844 件、第 3 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」2544 件で、第 4 位は「ビジョン (展望)」2279 件であり、第 5 位は「グローバル (地球規模)」2262 件である。

以下のグラフ 16 は「毎日新聞」東京版 2006～2010 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

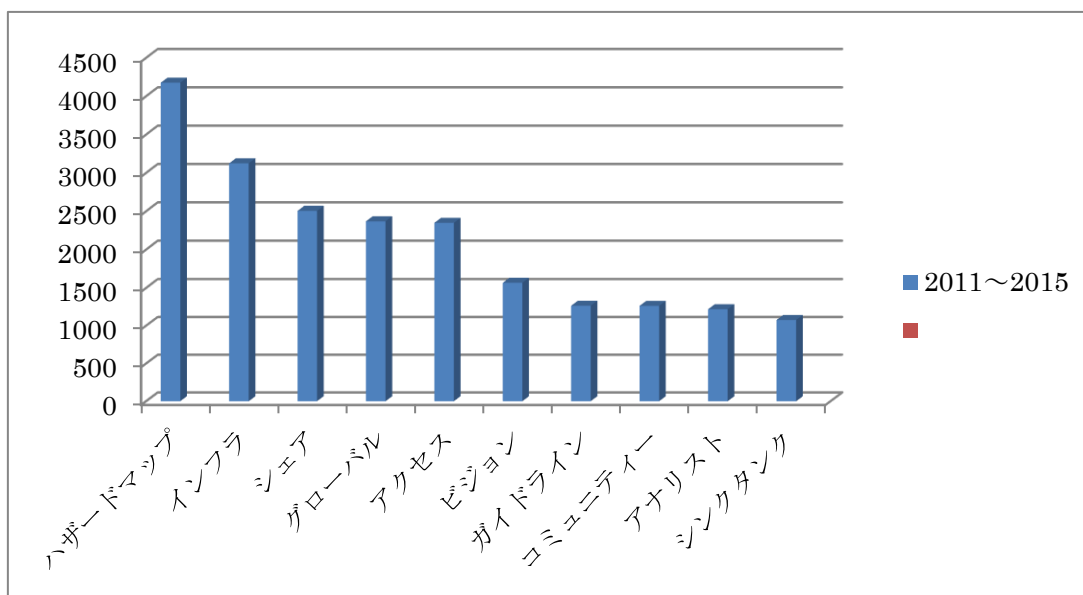
グラフ 16



この 5 年間に一番よく使われた外来語は「ケア (手当て 介護)」3339 件であり、続いては「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」2837 件、第 3 位は「グローバル (地球規模)」2361 件、第 4 位は「ビジョン (展望)」2230 件、第 5 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」2173 件である。

以下のグラフ 17 は「毎日新聞」東京版 2011～2015 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

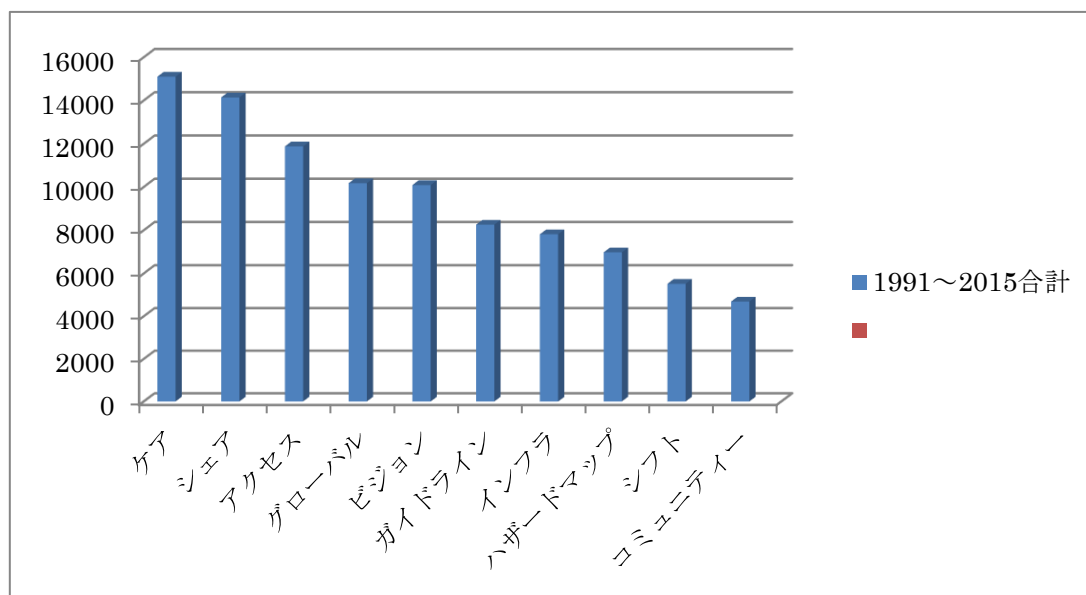
グラフ 17



このグラフと 2011～2015 年を示したグラフ比較して見るとこの 5 年間一番よく使われた外来語は「ハザードマップ (①災害予測地図 ②防災地図)」4176 件で、次は「インフラ (社会基盤)」3125 件、第 3 位は「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」2505 件、第 4 位は「グローバル (地球規模)」2368 件、第 5 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」2348 件である。

以下グラフ 18 は「毎日新聞」東京版 1991 年から 2015 年における外来語の使用頻度の高い上位 10 語を示したものである。

グラフ 18



「毎日新聞」東京版 1991 年から 2015 年まで 25 年間に於いて使用頻度の高い外来語第 1 位は「ケア (手当て 介護)」15103 件であり、第 2 位は「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」14139 件、第 3 位は「アクセス (①接続 ②交通手段 ③参入)」11878 件、第 4 位は「グローバル (地球規模)」10178 件、第 5 位は「ビジョン (展望)」10088 件、第 6 位は「ガイドライン (指針)」14998 件、第 7 位は「インフラ (社会基盤)」7815 件、第 8 位は「ハザードマップ (①災害予測地図 ②防災地図)」6978 件、第 9 位は「シフト (移行)」5524 件、第 10 位は「コミュニティー (地域社会 共同体)」4694 件である。

以下の表 9 は「毎日新聞」1991 から 2015 年において 5 年間の区切りごとにそれぞれ、使用頻度の高い外来語上位 10 位を示す。

表 9

年間順位	1991～1995	1996～2000	2001～2005	2006～2010	2011～2015
1	シェア	ガイドライン	ケア	ケア	ハザードマップ
2	ビジョン	シェア	シェア	シェア	インフラ
3	アクセス	ケア	アクセス	グローバル	シェア
4	ケア	アクセス	ビジョン	ビジョン	グローバル
5	マルチメディア	グローバル	グローバル	アクセス	アクセス
6	シフト	ビジョン	トレンド	インフラ	ビジョン
7	グローバル	マルチメディア	ガイドライン	マネジメント	ガイドライン
8	バックアップ	インフラ	インフラ	トレンド	コミュニティー
9	スタンス	シンクタンク	シフト	アナリスト	アナリスト
10	ガイドライン	シフト	バリアフリー	ガイドライン	シンクタンク

第5節 三大紙における外来語の使用調査の比較

以下の表10は「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」（1991年～2015年）合計において、朝日新聞に基づいて抽出した外来語の言い換え40語の中で、5年間の区切りごとにそれぞれ、使用頻度の高い外来語上位10位の調査結果比較を示す。

表10

1991～2015 合計	朝日新聞		読売新聞		毎日新聞	
1	ケア	42710	ケア	37617	ケア	15103
2	アクセス	28306	インフラ	28236	シェア	14139
3	シェア	22886	コミュニティー	25271	アクセス	11878
4	コミュニティー	21484	アクセス	19957	グローバル	10178
5	ビジョン	19267	シェア	17945	ビジョン	10088
6	ワークショップ	18055	ビジョン	17748	ガイドライン	8258
7	グローバル	17029	グローバル	15609	インフラ	7815
8	ガイドライン	14998	ガイドライン	9996	ハザードマップ	6978
9	インフラ	13962	マネジメント	8512	シフト	5524
10	バリアフリー	10137	バックアップ	8388	コミュニティー	4694

以上の表10における「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」（1991年～2015年）合計において、朝日新聞に基づいて抽出した外来語の言い換え40語の中で、5年間の区切りごとにそれぞれ、使用頻度の高い外来語上位10位の調査結果比較を見ると、

三大紙それぞれ、すべて第1位は「ケア（手当て 介護）」であることが明らかになった。次に、「朝日新聞」の第2位は「アクセス（①接続 ②交通手段 ③参入）」で、そして「読売新聞」は第4位で、「毎日新聞」第3位となっている。

「朝日新聞」の第3位は「「シェア（①占有率 ②分かち合う 分け合う）」で、「読売新聞」は第5位になり、「毎日新聞」は第2位となっている。「朝日新聞」の第4位は「コミュニティー（地域社会 共同体）」で、「読売新聞」は第3位となり、そして、「毎日新聞」は第10位となっている。「朝日新聞」の第5位は「ビジョン（展望）」で、「読売新聞」は第6位となり、そして、「毎日新聞」も第5位となっている。「朝日新聞」の第7位は「グローバル（地球規模）」で、「読売新聞」も第7位となり、そして、「毎日新聞」も第4位となっている。「朝日新聞」の第8位は「ガイドライン（指針）」で、「読売新聞」

も第 8 位となり、そして、「毎日新聞」も第 6 位となっている。「朝日新聞」の第 9 位は「インフラ（社会基盤）」で、「読売新聞」も第 2 位となり、そして、「毎日新聞」も第 7 位となっている。このように、「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」（1991 年～2015 年）合計において、高使用頻度の言い換え語の上位 10 語の中で、それぞれ、以上の 8 語が同時に現れたことが明らかになった。これは、外来語の使用については、三大紙は同様に多使用したことが明らかになった。

第6節 外来語の言い換え語に関するアンケート調査

外国語・外来語を使う傾向は特に若い世代に多く見られる、こうした語の多用が世代間のコミュニケーションにとって障害になる可能性があると思われる。「朝日新聞」から言い換え語を調査における高使用度がある10語である。さらに、調査にあたっては「読売新聞」、「毎日新聞」にも、それぞれ、高使用頻度10語の中で8語「ケア（手当て 介護）」「アクセス（①接続 ②交通手段 ③参入）」「シェア（①占有率 ②分かち合う 分け合う）」「コミュニティー（地域社会 共同体）」「ビジョン（展望）」「グローバル（地球規模）」「ガイドライン（指針）」「インフラ（社会基盤）」が「朝日新聞」と同様に、ランキング10位の中で示している。

また、高使用頻度以外のある10語を取り上げ、例をとって大学生に調査して試みる。国立国語研究所の言い換え語提案に関して、外来語への関心度、理解度、使用意識、妥当性などを考察する。

今回の調査では武蔵大学（人文学部と社会学部）の学生を中心に合わせて72名に調査を行った。「実施日2016年7月22日」

以下はアンケート調査の質問である。

Q1「新聞を読むとしたらどんな新聞を読みますか。」

- ① 朝日新聞 ② 読売新聞 ③ 毎日新聞 ④ 日本経済新聞 ⑤ 産経新聞
⑥ その他（ ）

Q2「現代の日本社会における外来語についてどう思いますか。」

- ① もっと減った方がよい ② もっと増えた方がよい ③今のままでよい
④分からない ⑤関心がない

Q3「外来語の言い換え」提案についてどう思いますか。

- ① とても必要である ② いくらか必要である ③このままでよい ④必要ではない
⑤分からない ⑥無関心

Q4「外来語の言い換え」提案において示されている外来語について

朝日新聞（1991～2015）において使用語数の多いものを40語抽出しました。これらについての理解度と使用意識についてお聞きします。

- A 意味の理解度 : ① 分かる ② 分からない
B 聞くことがあるか : ① 聞いたことがある ② 聞いたことがない
C 使うことがあるか : ① 使ったことがある ② 使ったことがない
D 言い換え語について : ① 良い ② 普通 ③ 良くない ④ 分からない

表 11

朝日新聞において高頻度使用の言い換え外来語 10 語、「読売新聞」「毎日新聞」、高使用頻度 10 語の中で 8 語を示す					
外来語	理解度	聞いたこと	使うこと	言い換え語	評価
ケア				手当て 介護	
アクセス				(1) 接続 (2) 交通手段 (3) 参入	
シェア				(1) 占有率 (2) 分かち合う 分け合う	
コミュニティ				地域社会 共同体	
ビジョン				展望	
ワークショップ				研究集会	
グローバル				地球規模	
ガイドライン				指針	
インフラ				社会基盤	
バリアフリー				障壁なし	
朝日新聞において中頻度使用の言い換え外来語 10 語					
外来語	理解度	聞いたこと	使うこと	言い換え語	評価
アセスメント				影響評価	
クライアント				顧客	
コミュニケ				共同声明	
シーズ				種	
セクター				部門	
ディサービス				日帰り介護	
バイオテクノロジー				生命工学	
ベンチャー				新興企業	
フロンティア				新分野	
モニタリング				継続監視	

第7節 アンケート調査の総合分析

7-1 アンケート調査の分析 (1)

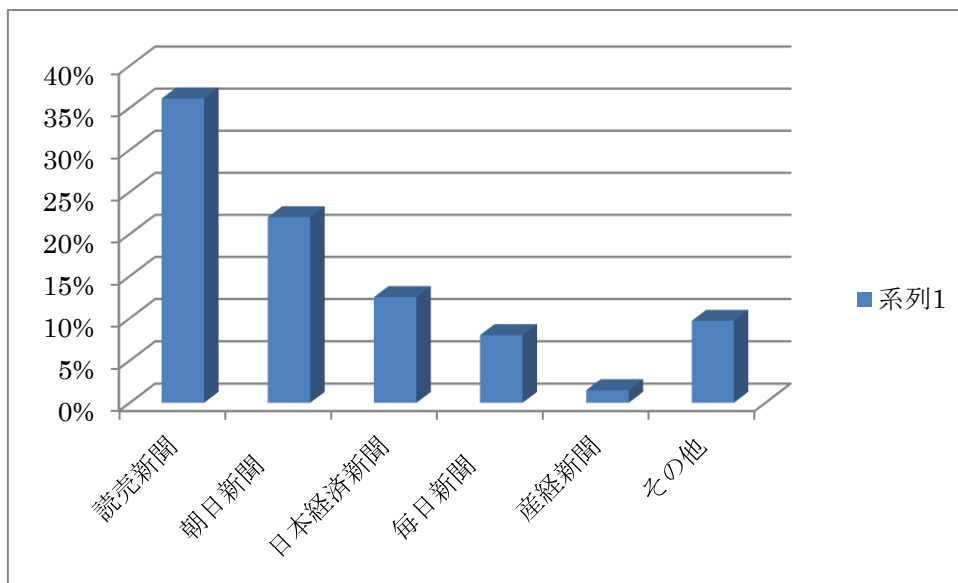
以下はアンケートの分析である。

Q1「新聞を読むとしたらどんな新聞を読みますか。」

前述のように現在の全国紙の中で読売新聞は朝刊約 1022 万部、夕刊約 433 万部が発行されていて、日本の新聞の中で最も発行部数が多い。産経新聞は朝刊約 162 万部である。毎日新聞は朝刊約 340 万部、夕刊約 290 万部である。日本経済新聞は 273 万部である。そして、朝日新聞は朝刊約 754 万部、夕刊約 273 万部である。

以下のグラフ 19 に示される通りは「読売新聞」を読む大学生が一番多くて 36.1%を占めている。続いては「朝日新聞」を読む学生は 22.2%であり、「日本経済新聞」を読む学生は 12.5%で第三位を示している。

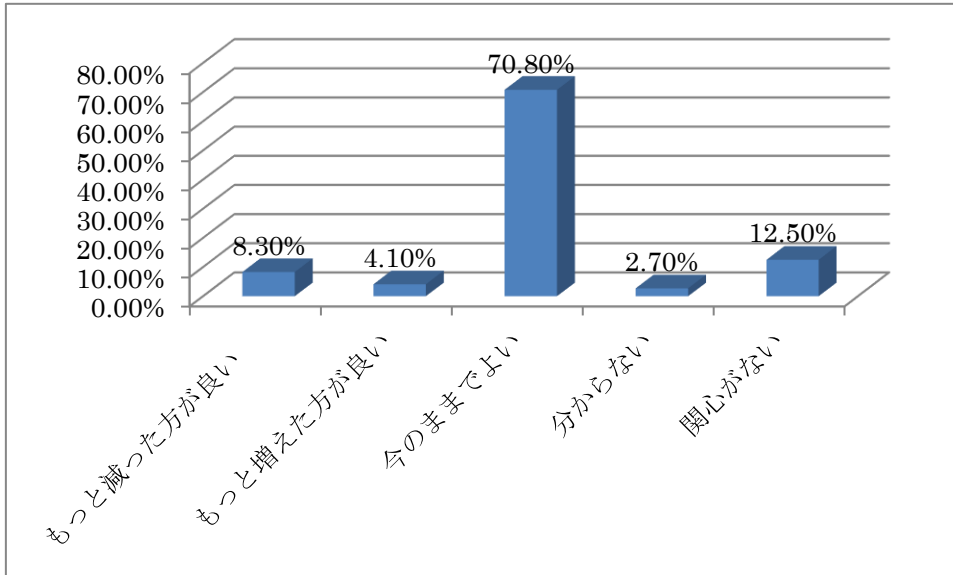
グラフ 19



Q2「現代の日本社会における外来語についてどう思いますか。」

これ以上外来語は増えない。このままで良いとする回答は 70.8%であり最も多かった。無関心と答えた学生も 12.5%を占めている。もっと減った方がよいと答えた学生は 8.3%を占めている。

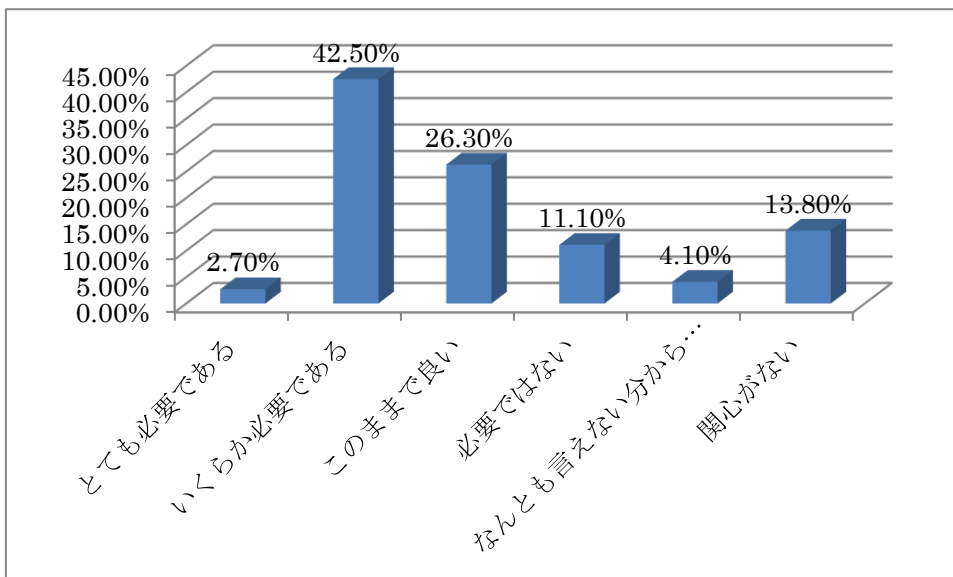
グラフ 20



Q3 「外来語の言い換え語提案についてどう思いますか。」

いくらか必要であると答えた学生は 42.5%であり、このままで良いと答えた学生が 26.3%を占めている。必要ではないが 11.1%を占めている。

グラフ 21



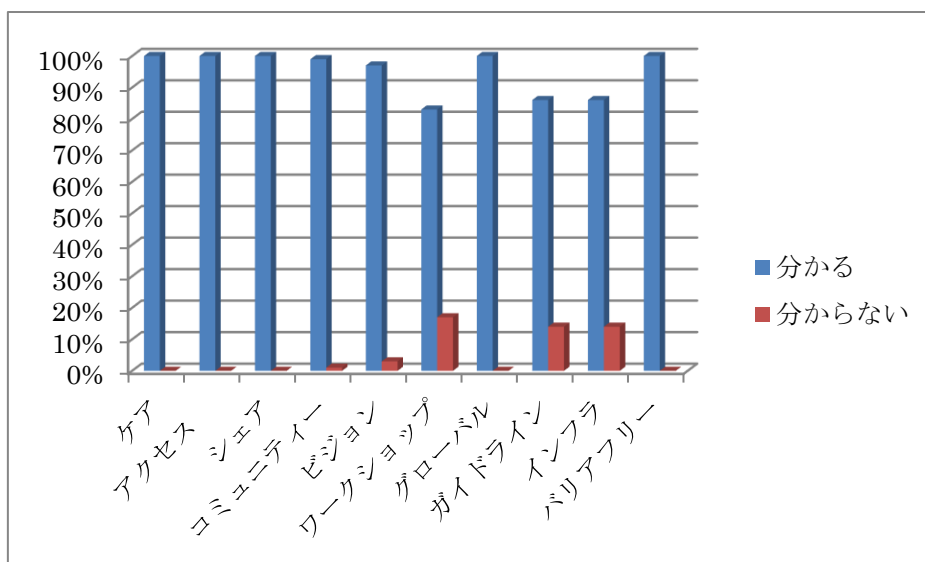
7-2 アンケート調査の分析 (2)

Q4「外来語の言い換え提案」において示されている外来語について

朝日新聞（1991～2015）において高頻度使用の外来語「ケア（手当て 介護）」、「アクセス（①接続 ②交通手段 ③参入）」、「シェア（①占有率 ②分かち合う 分け合う）」、「コミュニティー（地域社会 共同体）」、「ビジョン（展望）」、「ワークショップ（研究集会）」、「グローバル（地球規模）」、「ガイドライン（指針）」、「インフラ（社会基盤）」、「バリアフリー（障壁なし）」、10語の外来語を抽出した。これらについての理解度、妥当性、使用意識について調査する。

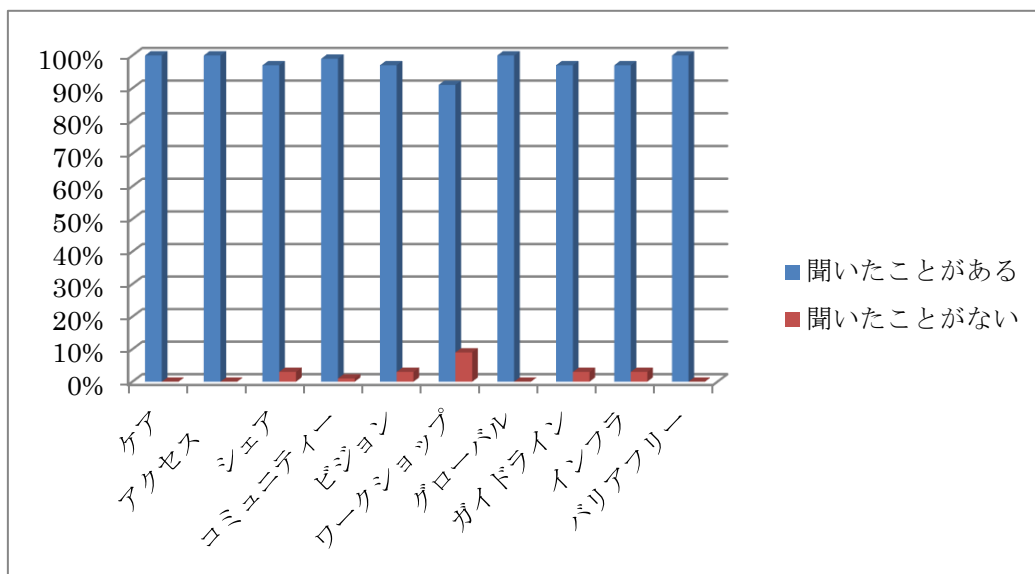
「意味の理解度」についての調査の結果以下のようにになっている。

グラフ 22



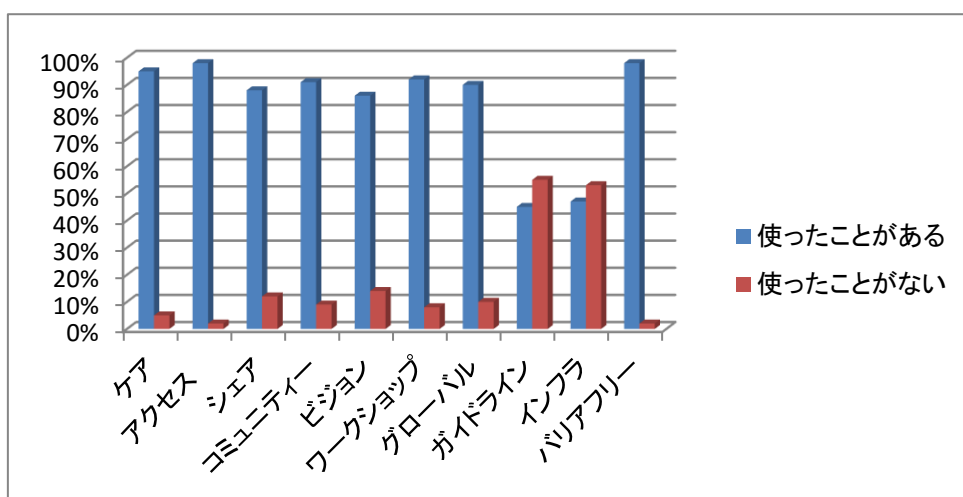
「聞くことがあるか」について調査の結果以下のようにになっている。

グラフ 23



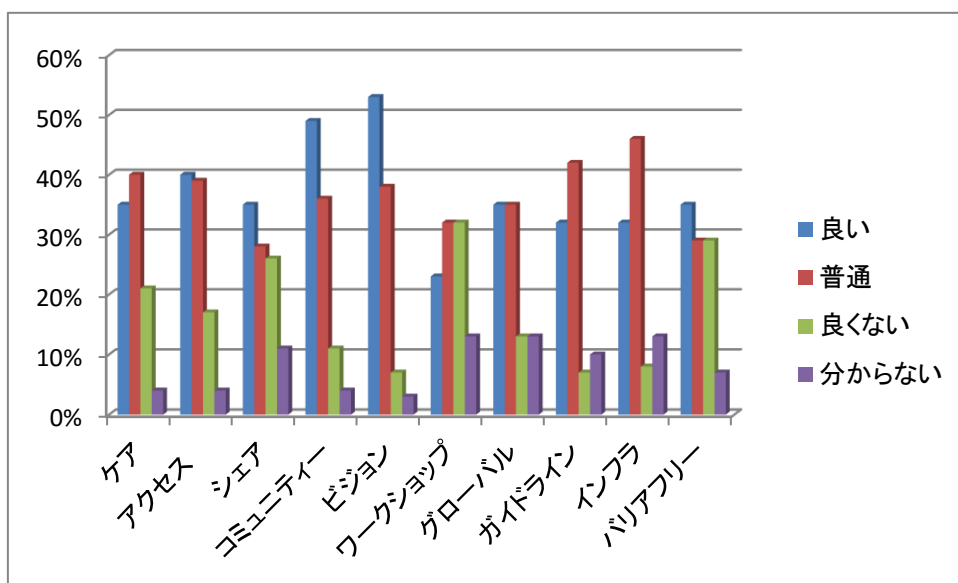
「使うことがあるか」についての調査の結果以下のようにになっている。

グラフ 24



「言い換え語」の妥当性と必要性については調査の結果以下のようにになっている。

グラフ 25



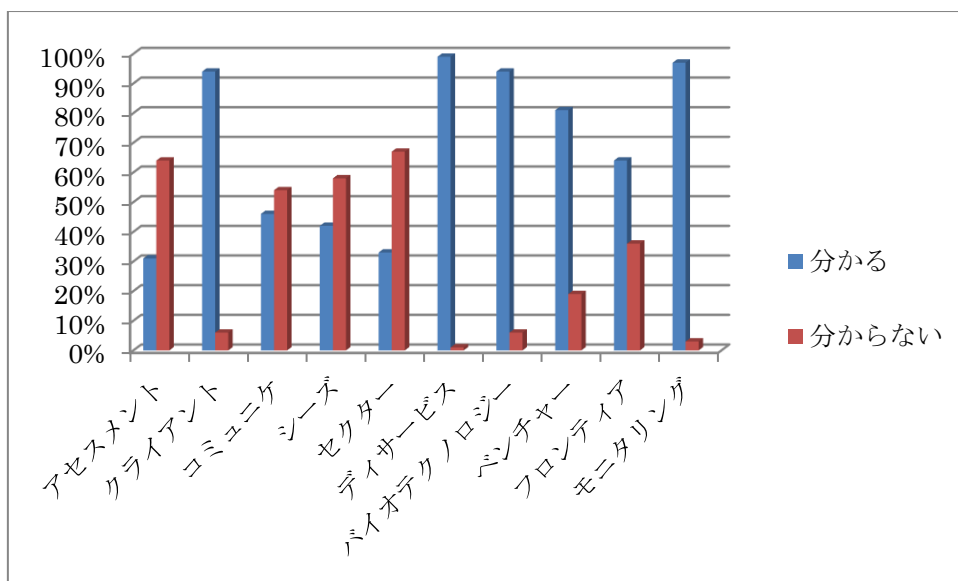
以上の調査結果によると「ビジョン（展望）」、「コミュニティー（地域社会 共同体）」、「アクセス（①接続 ②交通手段 ③参入）」について外来語言い換え提案に沿って妥当性が強く傾向がある。「インフラ（社会基盤）」、「ガイドライン（指針）」、「グローバル（地球規模）」、「ケア（手当て 介護）」について外来語言い換え提案に沿って妥当性は変化を鈍い。

7-3 アンケート調査の分析 (3)

朝日新聞(1991~2015)において、国立国語研究所の外来語の言い換え語提案に関して、中頻度使用の外来語である。「アセスメント(影響評価)」、「クライアント(顧客)」、「コミュニケ(共同声明)」、「シーズ(種)」、「セクター(部門)」、「ディサービス(日帰り介護)」、「バイオテクノロジー(生命工学)」、「ベンチャー(新興企業)」、「フロンティア(新分野)」、「モニタリング(継続監視)」、10語の外来語を抽出した。これらについての理解度、妥当性、使用意識について調査する。

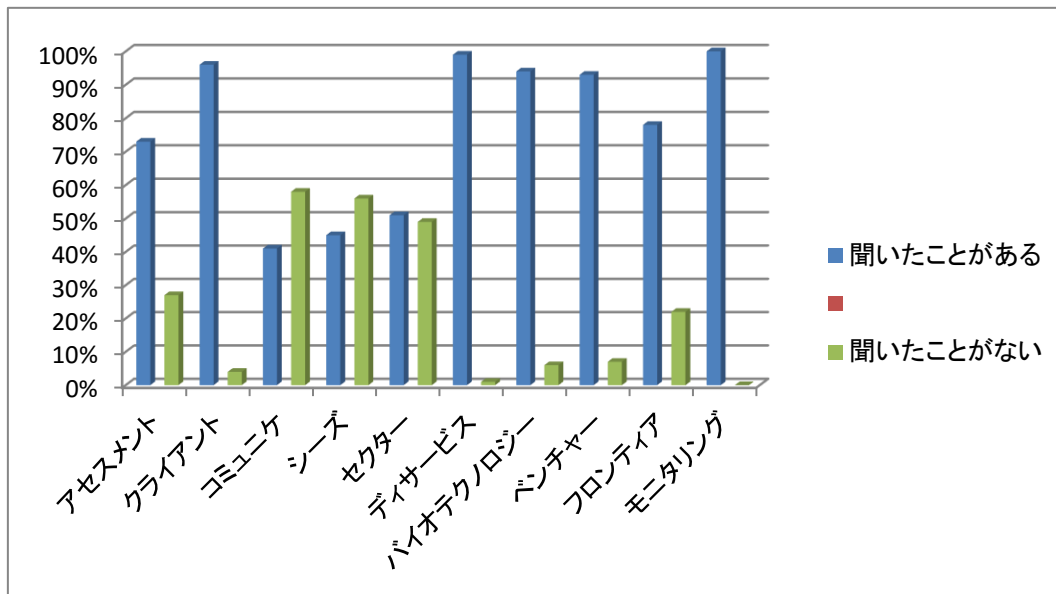
「意味の理解度」についての調査の結果以下のようにになっている。

グラフ 26



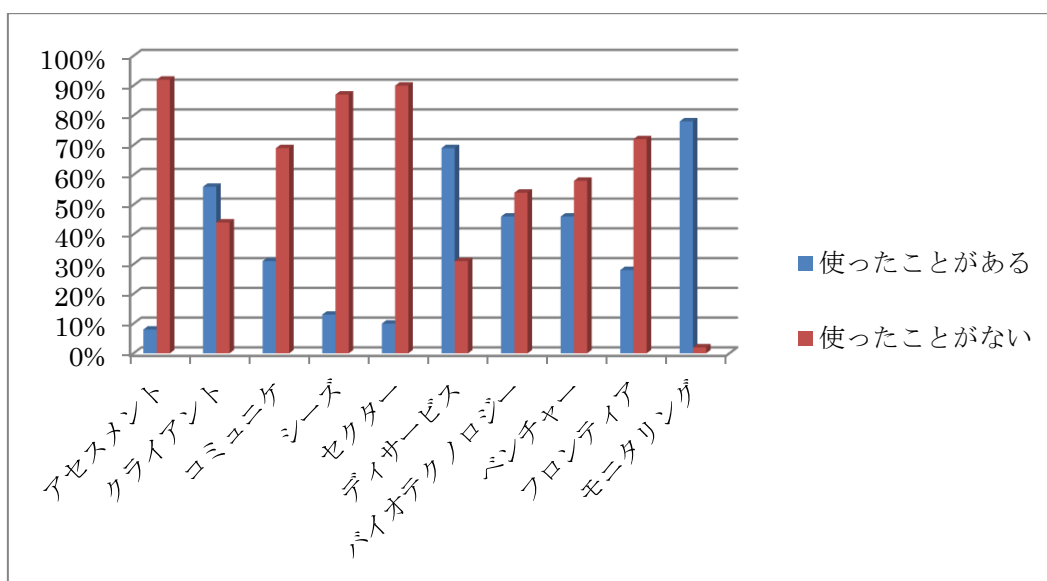
「聞くことがあるか」について調査の結果以下のようにになっている。

グラフ 27



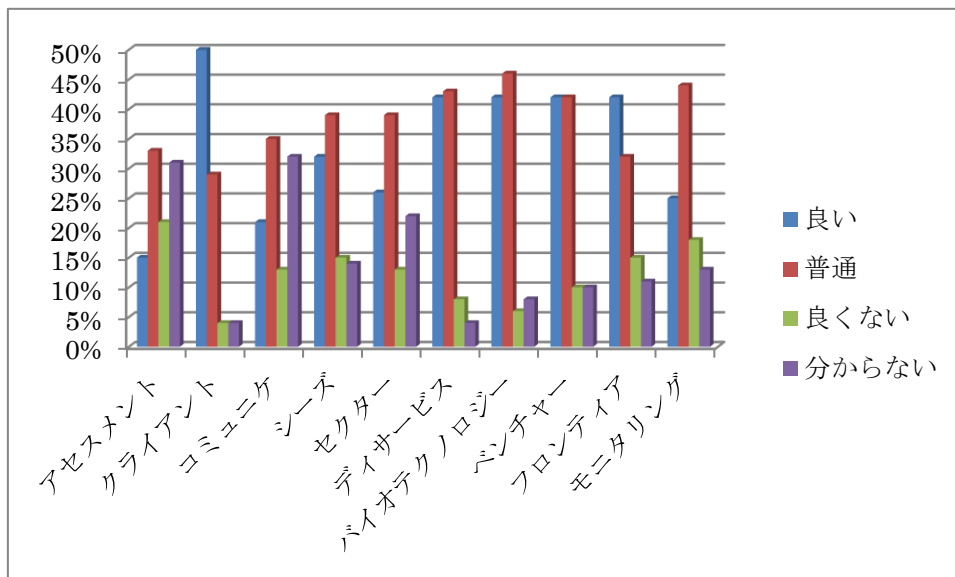
C 「使うことがあるか」についての調査の結果以下のようにになっている。

グラフ 28



D 「言い換え語」の妥当性と必要性についての調査の結果以下のようにになっている。

グラフ 29



以上のグラフ 17 によると「クライアント（顧客）」においては、国立国語研究所の外来語の言い換え提案」に基づいて妥当性と必要性は良いが 50%を示している。妥当性と必要性は良くない「アセスメント（影響評価）」が 21%を示している。また、分からないは「コミュニケ（共同声明）」が 32%を示す。

第8節 調査結果の分析

- 1、以下表12は「朝日新聞」(1991～2015 合計)において高使用頻度10語である。また、「読売新聞」「毎日新聞」(1991～2015 合計)、高使用頻度10語の中で8語を示した高使用度の外来語について理解度の高いものから順に並べる。

表12

外来語	言い換え語	分かる	分からない
アクセス	① 接続 ②交通手段 ③参入	100%	0%
グローバル	地球規模	100%	0%
ケア	手当て 介護	100%	0%
シェア	① 占有率 ②分かち 合う 分け合う	100%	0%
バリアフリー	障壁なし	100%	0%
コミュニティー	地域社会 共同体	99%	1%
ビジョン	展望	97%	3%
インフラ	社会基盤	86%	14%
ガイドライン	指針	86%	14%
ワークショップ	研究集会	83%	17%

2、以下表 13 は「朝日新聞」(1991～2015 合計) においては中頻度使用の外来語について理解度の高いものから順に並べる。

表 13

外来語	言い換え語	分かる	分からない
ディサービス	日帰り介護	99%	1%
モニタリング	継続監視	97%	3%
クライアント	顧客	94%	6%
バイオテクノロジー	生命工学	94%	6%
ベンチャー	新興企業	81%	19%
フロンティア	新分野	64%	36%
コミュニケ	共同声明	46%	54%
シーズ	種	42%	58%
セクター	部門	33%	67%
アセスメント	影響評価	31%	64%

本章の「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」外来語言い換え語及び現代大学生の使用意識、理解度、使用度、妥当性に関する調査分析では、国立国語研究所の外来語の言い換え語提案に関しては、いくつかの問題点を明らかにした。

使用意識において、現代の日本社会において外来語について、「今のままでよい」の意識があるとする回答は7割以上があり、最も多かった。つまり、これ以上に外来語が増加しないと良い。それに対して、「もっと減った方がよい」と答えた学生は8.3%を占めている。

特に「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」から抽出した頻度の高い外来語10語の中では「ビジョン（展望）」、「コミュニティー（地域社会 共同体）」、「アクセス（①接続 ②交通手段 ③参入）」について外来語言い換え提案に基づいて妥当性が強く示している。

また、「インフラ（社会基盤）」、「ガイドライン（指針）」、「グローバル（地球規模）」、「ケア（手当て 介護）」においては使用度が強く表れている。大学生の中では定着度も高いと推測される。

前述のように、三大紙とも高使用頻度、第1位は「ケア（手当て 介護）」であることが明らかになった。次に、「朝日新聞」の第2位は「アクセス（①接続 ②交通手段 ③参入）」で、そして「読売新聞」は第4位で、「毎日新聞」第3位となっている。

「朝日新聞」の第3位は「シェア（①占有率 ②分かち合う 分け合う）」で、「読売新聞」は第5位になり、「毎日新聞」は第2位となっている。「朝日新聞」の第4位は「コミュニティー（地域社会 共同体）」で、「読売新聞」は第3位となり、そして、「毎日新聞」は第10位となっている。「朝日新聞」の第5位は「ビジョン（展望）」で、「読売新聞」は第6位となり、そして、「毎日新聞」も第5位となっている。「朝日新聞」の第7位は「グローバル（地球規模）」で、「読売新聞」も第7位となり、そして、「毎日新聞」も第4位となっている。「朝日新聞」の第8位は「ガイドライン（指針）」で、「読売新聞」も第8位となり、そして、「毎日新聞」も第6位となっている。「朝日新聞」の第9位は「インフラ（社会基盤）」で、「読売新聞」も第2位となり、そして、「毎日新聞」も第7位となっている。このように、「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」（1991年～2015年）合計において、高使用頻度の言い換え語の上位10語の中で、それぞれ、以上の8語が同時に現れたことが明らかになった。

一方、「朝日新聞」から抽出した中頻度使用の外来語10語の中では「意味の理解度」については「分からない」項目は「セクター（部門）」67%で、「アセスメント（影響評価）」64%で、「シーズ（種）」58%を占めている。「聞くことがあるか」においては「聞いたことがない」項目は「コミュニケ（共同声明）」が58%を占めている。また、「シーズ（種）」は56%を示す。「使うことがあるか」については「使ったことがない」項目は「アセスメント（影響評価）」92%で、「セクター（部門）」90%で、「シーズ（種）」87%を示している。外来語言い換え語の妥当性と必要性について「よい」項目は「クライアント（顧客）」50%であり、「良くない」項目は「アセスメント（影響評価）」を占めている。

調査結果について、筆者は次のように考えている。

「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」三大紙は外来語を多用していることが明らかになった。過剰に外来語を取り込めば、読者に大きな影響を与えるであろう。読者への関心度、理解度、使用度、そして、認知度も大きく影響されると考えられている。新聞は外来語を多用すればするほど、読者に対して外来語の過剰使用に誘導する恐れがあると思われる。

ところが、例えば、新聞は国立国語研究所が発表した外来語の言い換え語に基づいて、意味が分かりにくい外来語を避けて、言い換え語を使えば、読者は行き過ぎた外来語の使用に迎合するような社会を心配することは必要ないだろう。

今後の研究課題として外来語「言い換え語の提案」に関して他の新聞の使用状況も調べていく必要がある。また、外来語「言い換え語の提案」について日本社会だけではなく国際社会の中で、特に海外日本語教育の現場で学習者どう受け止めるかを考察する必要がある。つまり、他言語話者の視点から「外来語の頻用」の意識を研究していきたいと考えている。

注

- 1 金田 拓 (2012) 『コーパスに基づく言語教育研究報告』 N08 コーパスに基づく『外来語言い換え提案』の評価
- 2 堀切 友紀子 (2013) 「外来語に関する研究動向 ー使用意識と言語接触の視点から」お茶の水女子大学『人文科学研究』 N099
- 3 田中 建彦 (2002) 『外来語とは何か』 33 頁 鳥影社
- 4 1956 年「国立国語研究所の語彙調査」 田中 建彦 (2002) 『外来語とは何か』 37 頁 鳥影社
- 5 橋本 和佳 (2010) 『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』 7 頁 ひつじ書房

第4章 新聞における省略語

「～活」の使用とその社会的背景

第1節 研究の意義・目的・方法

厳密な形での論証は難しいが、言語は一般的に言って時代の推移や社会の動向と共に変化して行くものといって過言ではなかろう。高度な情報化や急速な国際化が進む日本社会では、日本語も絶えず変化をし続けている。日本語が刻々と変化するのは、日本社会における情報伝達の媒体としての機能を発揮し続けることができるように、日本語の体系が社会環境の変化に連動して自ら更新しつづけるからである。言語の中でも社会の動向を最も敏感に反映するのは語彙であろう。毎年多くの語彙（新語）が生まれていることがその証である。本章では、社会の変化と関係した語彙の問題について、メディアの中でも特に大きな影響力を持つ新聞の情報（言語）を研究したいと思う。

新聞は私たちの生活と密接に結びついている代表的なマス・メディアである。同時に、新聞は公的な性格を持つ書き言葉の代表でもあろう。故に、新聞の記事を分析することによって今日の日本及び日本語の在り方を研究することも可能である。ところが、新聞に限らず、メディアの言語をそのまま受けとめて良いかどうかは大きな問題があると思われる。

何故なら、前述した通り、あらゆるメディアの情報（言語）は、編集されており、構成されたものであるという認識がメディア・リテラシーの出発点であるからである。本稿では、この点を十分に考慮しながら研究する必要がある。

言語というものはその時期の社会情勢や、文化、流行などによってさまざまな変容を見せてきた。たとえば、社会現象の変化によって新しい物事が導入されれば、それを指す名称が必要になることがその一例である。さて、近年、省略語が新聞紙上にも頻繁に使われている傾向が見られる。例えば、就職活動が「就活」、結婚活動が「婚活」、保育活動が「保活」となる例である。このような「〇活」略語はなぜ生じたのか。改まった場面における書き言葉では依然として元の言い方が優先されるにも関わらず、新聞においても略語が多いことは着目に値する。略語は便利な半面、分かりづらさをも同時に備えている。新しい略語が次から次へと出現すると、読者にとっては意味が理解し難い状況が頻繁に起きるのではないかと。略語が発生したその原因と社会背景を明らかにすることは、略語の研究にとって重要な課題になるとと思われる。

調査に当たっては、朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」、「ヨミダス歴史館」、「毎日新聞記事」検索を活用する。

第2節 略語の定義

略語とは何か、その定義について考えよう。

言語には、種々のレベルで省略が生ずる。「略語」も言語の省略の一種と言われるが、それはどのレベルのどのような性質なのであろうか。『日本文法大辞典』（明治書院）によると、略語は「ある語の一部を何らかの方法で省略または簡略した形で、なおもとの意味を保っているもの」とあり、『国語学研究辞典』（明治書院）でもほぼ同様の説明をしている。その他も大同小異である。従って「略語」とは、語のレベルにおける省略で、元の語の意味を保つということが条件になっているようである^{注1}。

また、略語^{注2}はもとの語形の一部、場合によっては相当な部分を失っているが、意味はもとのままであるのが通常である。同じ内容をより短い語形で言い表すことができるので、てきばきと高率的に情報伝達を行うには、まことに好都合である。

略語はなぜ生まれるのか。

永瀬治郎^{注3}によれば、ことば遊びのつもりで、「キャンパス語」と呼んで、やはり長期にわたって収集を続けている。高校から大学までアメリカで過ごした永瀬氏はキャンパス語への印象は、「仲間うちの帰属性やことば遊びの意識で使っている。若者なりに相手や場面で使い分けている。その点では大人だって同じ。社員仲間の呼び方とか、社内食堂などでは、省略語を使うでしょう」とかなり同情的だと述べている。

また、米川明彦『若者語を科学する』^{注4}によると、若者の造語の方法を15通りに分類している。そのうちのいくつかを例として挙げてみよう。

- ① 借用→おトイレ（音入れ）「カセット」
- ② 省略
- ③ 倒置→そっくり「くりそつ」
- ④ 読み替え→うみそと「海外旅行」
- ⑤ 言い替え→チキン肌「鳥肌」
- ⑥ 頭文字化→大東文化・東洋・亜細亜・帝京・国士館の各大学「大東亜帝国」
- ⑦ もじり 例：わずかな幸せ→「蟻ごとき幸せ」
コネを持っている人→「おコネ持ち」
午後六時（18時）になると別人のように元気に退社するOL
→「別人18号」…
- ⑧ 語呂合わせ→冗談はよし子さん「そんなことアルマジロ」
- ⑨ 混交→脂ぎった+エネルギー「脂ギッシュ」
- ⑩ 動詞の派生→コピーる「コピーをとる」
- ⑪ 名詞の派生→こまリング「困ること」
- ⑫ 形容詞・形容動詞の派生→元気レス「元気がないさま」
- ⑬ 動詞の複合→お茶する「喫茶店に行く」

⑭ 名詞の複合→髪が乱れている「与謝野晶子^{よきのあきこ}状態」

⑮ 音の転化→うれピー「うれしい」

このような分類の中で一番多いのは「省略」である。省略は主として次のようなパターンがある。

① 上略「(その) まんま」

② 中略「けば (けばし) い」

③ 下略「ぶき (っちょ)

④ 複合語の各要素の下部を省略「留守 (番) 電 (話)」

⑤ 文や句を省略「キョブタ」

さらに、米川明彦は、省略語が使われる要因として、次の三つが考えられると述べている。

第一の要因は、現代社会のスピード化であろうと思われる。日本人全体の話すスピードが速くなった。昔の邦画を見ているとのんびりしていると感じる程スピードである。それに対し、現代はあらゆる面でスピードを求めている。効率よく限られた時間内に大量ものをこなすことが求められている社会では、話し方も早くなるのは当然である。そのような中で、若者は話し方自体を速くする（早口）だけでなく、言葉を縮めて、会話のスピード、テンポを速めた。すなわち会話促進のために言葉の省略が進んだ。これと比べて戦前の学生語は省略が少ないのは時代の違いによる。

第二の要因は、ことばの浮遊化であろう。現代社会は自由を求めてきた。その結果、個人の自由が拡大した一方で、自己を含めてあらゆる事柄の意味があいまいになり、あるいは価値を見失い、アイデンティティを失った。そこから事柄を言語化することが困難になった。また仮に言語化しても意味はあいまいで、浮遊している。そういう言葉は軽く、扱いても軽い。そこから言葉がどんどん省略されていったと考えられる。若者語の省略はまさに時代の産物と言える。

第三の要因は、言葉の娯楽である。若者語は会話を楽しむために使う。したがって、既存の語だけでは会話は盛り上がりず、笑いもあまり生まれない。そこで単語を省略して、従来の語とは違った語感を持たせて、おもしろさを出し、会話を盛り上げている。

本論文では永瀬治郎と米川明彦の見解を参考にしながら「朝日新聞」、「読売新聞」、「毎日新聞」で用いられている特に近年の記事の中で社会的に大きな影響を与えられた典型的な略語を対象にして日本語の多様な姿を捉える調査・考察・分析を行いたいと思う。

第3節 三大紙における「就活」に関する記事

まず、「就活」（就職活動）の略語）を取り上げる。「就活」は近年新聞においても取り上げられることが多いがその登場は日本企業の雇用状況の変化と密接なつながりを有している。そもそも、日本企業において従来「終身雇用」「年功賃金」「一括採用」「企業別労働組合」など日本独特の雇用慣行が行われてきた。いったん就職すれば会社内で手厚い職業訓練を受けられ、充実した福利厚生もあり、家族の一員のように扱われ定年まで雇用が守られる。その対価として、会社には転勤や出張、残業を命じる広い裁量権を与えてきた。しかし、平成初期にバブルが崩壊して、日本の経済に大きな衝撃が与えられ、このような日本独特の雇用慣行も次第に崩れてきた。これに伴い企業の採用活動も変化が生じてきた。1990年代前半までは同じ時期に採用活動が行われていたが、後半に入り、一年を通して採用活動をする企業が増えた。このため就活期間が長くなり、注目されるようになる。就職活動を“就活”と縮めて言うようになったすでに1980年代からあったともいわれるが、新聞に初めて現れるのは2000年10月である。現代用語の基礎知識2001年版に初めて「就活」の語が現れる。いわゆる“就職氷河期”の真ただ中である。この時期に「就活」が定着したものと見なされる。

3-1 「朝日新聞」における「就活」記事の調査

以下の表1は「朝日新聞」2000年1月1日～2000年12月31日における「就活」記事を示したものである。

表1

年月	件数合 計	本文（記事の件数）			見出し（記事の件数）		
		就職活動 のみ	就活の み	就職活動と就活 との両方	就職活動 のみ	就活の み	就職活動と就活 との両方
2000.1	36	36	0	0	0	0	0
2000.2	39	39	0	0	0	0	0
2000.3	31	31	0	0	0	0	0
2000.4	47	47	0	0	0	0	0
2000.5	35	35	0	0	0	0	0
2000.6	43	43	0	0	0	0	0
2000.7	39	39	0	0	0	0	0
2000.8	21	21	0	0	0	0	0
2000.9	20	20	0	0	0	0	0
2000.10	28	28	0	0	0	1	0
2000.11	43	43	0	0	0	1	0
2000.12	33	33	0	0	0	2	0

以下の表 2 は「朝日新聞」2001 年 1 月 1 日～2001 年 12 月 31 日における「就活」記事を示したものである。

表 2

年月	件数合計	本文（記事の件数）			見出し（記事の件数）		
		就職活動のみ	就活のみ	就職活動と就活との両方	就職活動のみ	就活のみ	就職活動と就活との両方
2001.1	40	37	1	3	2	1	1
2001.2	39	37	1	0	1	2	0
2001.3	38	35	1	1	2	2	0
2001.4	37	33	1	0	1	4	0
2001.5	36	32	1	2	3	3	0
2001.6	25	21	1	4	0	4	0
2001.7	19	18	0	1	1	0	1
2001.8	21	20	1	0	0	1	0
2001.9	16	16	0	0	2	0	0
2001.10	23	23	0	0	4	0	0
2001.11	33	33	0	0	5	0	0
2001.12	36	34	2	1	1	1	1

以下の表 3 は「朝日新聞」2002 年 1 月 1 日～2002 年 12 月 31 日における「就活」記事を示したものである。

表 3

年月	件数合計	本文（記事の件数）			見出し（記事の件数）		
		就職活動のみ	就活のみ	就職活動と就活との両方	就職活動のみ	就活のみ	就職活動と就活との両方
2002. 1	33	30	2	1	3	3	1
2002. 2	41	38	1	0	5	2	0
2002. 3	45	45	0	0	5	2	0
2002. 4	30	30	0	0	3	4	0
2002. 5	40	40	0	0	2	3	0
2002. 6	42	39	0	0	1	3	0
2002. 7	37	32	0	1	1	5	0
2002. 8	20	20	0	0	1	3	0
2002. 9	32	29	0	0	1	2	0
2002. 10	44	41	1	2	1	5	0
2002. 11	26	26	0	0	2	0	0
2002. 12	32	32	0	0	2	0	0

朝日新聞では2000年9月以前には見出しにおいても本文においても「就活」の語例は見当たらない。「就活」が初めて登場したのは2000年10月の記事で見出しに用いられている。

さらにこの社告の中で「就活（仮題）」として連載コラムを始める予定であることを記している。実際に2000年10月03日の「朝日新聞」朝刊から2001年08月21日まで朝日新聞このコラムが連載された。これは見出しにおける「就活」の用例である。本文では2001年01月09「朝日新聞」の朝刊 見出し「氷河期乗り切りノウハウ伝授（就活）」の記事である。

以下は「就活」が最初に用いられた2000年10月03日の「朝日新聞」朝刊のくらし面、見出しは「就活モニター」を募集 クラブA&Aで定期アンケート（社告）である。その時の新聞記事を翻字すると以下のとおりである

「就活モニター」を募集

くらし編集部では、学生の就職活動にまつわる様々な問題を取り上げるため、このページで新しいコラム「就活（しゅうかつ）＝仮題」を始める予定です。学生だけでなく、企業の動向もリアルタイムで伝える情報の交差点をめざします。

これに先立ち、これから就職活動に入る予定の学生の方々から、インターネットを通じて定期的にアンケートにお答えいただく「就活モニター」を募集します。

詳しくは、朝日新聞の「クラブA&A就活係」

(<http://mail.clubAA.com/life/monitor.html>) まで。アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で図書券などを差し上げます。

そのほか、手紙やファックス、eメールによるご意見・ご感想もお待ちしています。

クラブA&Aで定期アンケート

3-2 「朝日新聞」における「就活」記事の調査

表4は「朝日新聞」2014年1月1日～2016年12月31日における「就活」記事をしめしたものである。

表4

新聞	略 語	就 活											
朝日新聞	発行期間	2014年1月1日～2014年12月31日											
	発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	月件数	95	89	74	82	49	56	60	37	50	56	68	61
	年件数	777件											
	見出し年件数	111件											
	発行期間	2015年1月1日～2015年12月31日											
	発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	月件数	64	63	94	84	68	78	64	57	52	70	94	63
	年件数	851件											
	見出し年件数	128件											
	発行期間	2016年1月1日～2016年12月31日											
	発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	月件数	67	66	121	77	65	90	57	32	49	51	50	46
	年件数	773件											
	見出し年件数	197件											

以上の表2から2014年1月1日から2016年12月31日までこの三年間で朝日新聞における「就活」記事が最も多く使われた年は2015年で851件である。見出し最も使われたのは2016年で197件である。2014年の月別で多く使われたのは1月で95件、次に2月で89件である。2015年の月別で最も多く使われたのは3月で94件、2016年は3月で121件、これがこの三年間の月別で最も多い。

3-3 「読売新聞」における「就活」記事の調査

表5は「読売新聞」2014年1月1日～2016年12月31日における「就活」記事を示したものである。

表5

新聞	略 語	就 活											
読売新聞		2014年1月1日～2014年12月31日											
	発行期間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	月件数	37	48	51	44	36	36	40	36	34	20	36	24
	年件数	442件											
	見出し年件数	243件											
	発行期間	2015年1月1日～2015年12月31日											
	発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	月件数	35	48	68	34	34	40	39	41	41	31	48	49
	年件数	508件											
	見出し年件数	338件											
	発行期間	2016年1月1日～2016年12月31日											
	発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	月件数	33	32	62	44	40	50	24	34	30	34	37	34
	年件数	456件											
	見出し年件数	311件											

以上の表から2014年1月1日から2016年12月31日までこの三年間で読売新聞において「就活」記事が最も多く使われたのは2015年で508件あることが分かった。次は2016年で456件、第3位は2014年で442件である。

見出しに最もよく使われたのは2015年で338件ある。2014年は月別に最も多く使われたのは3月で51件、次に2月で48件。2015年は月別に最も多く使われたのは3月に68件であり、2016年の3月で62件。この三年間はそれぞれ月別に最も多く使われたのは3月であることが明らかになった。

3-4 「毎日新聞」における「就活」記事の調査

表6は「毎日新聞」2014年1月1日～2016年12月31日における「就活」記事を示したものである。

表6

新聞	略 語	就 活											
毎日新聞	発行期間	2014年1月1日～2014年12月31日											
	発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	月件数	18	14	14	15	16	8	13	6	7	9	10	10
	年件数	140件											
	見出し年件数	84件											
	発行期間	2015年1月1日～2015年12月31日											
	発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	月件数	10	20	21	15	12	15	14	15	17	23	26	11
	年件数	199件											
	見出し年件数	53件											
	発行期間	2016年1月1日～2016年12月31日											
	発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	月件数	14	12	27	17	8	25	12	10	11	16	5	8
	年件数	165件											
	見出し年件数	50件											

以上の表から2014年1月1日から2016年12月31日までの三年間で毎日新聞において「就活」記事が最も多く使われたのは2015年で199件である。次が2016年で165件、第3位は2014年で140件である。

見出しによく使われたのは2014年に84件である。次に2015年に53件で、第3位は2016年で50件である。

2014年月別に最も多く使われたのは1月で18件である。2015年は月別で最も多く使われたのは11月で26件、次に10月で23件である。2016年に3月で27件である。

3-5 三大紙における「就活」記事の調査・比較

表7は「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」における「就活」記事の初出を示したものである。

表7

新聞	略語	就活
朝日新聞	見出し	「就活モニター」を募集クラブA&Aで定期アンケート
	朝夕刊	朝刊
	面	くらし
	発行期間	2000.10.03
読売新聞	見出し	就職氷河期こそ結束 関西の大学生NGOがイベント開く／大阪・吹田
	朝夕刊	朝刊
	面	大阪
	発行期間	2001.01.21
毎日新聞	見出し	「憂楽帳」最近の若いモン
	朝夕刊	夕刊
	面	東京
	発行期間	2001.02.22

以上の表から新聞で「就活」を使った最初の文は2000年10月03日の朝日新聞朝刊、面くらし面「就活モニター」を募集クラブA&Aで定期アンケート〈社告〉であることが分かった。

読売新聞における「就活」を使った最初の記事は2001年1月21日の大阪版朝刊、見出し「就職氷河期こそ結束 関西の大学生NGOがイベント開く／大阪・吹田」であり、毎日新聞における「就活」最初の記事を使ったのは2001年2月22日の東京版夕刊、見出し「憂楽帳」最近の若いモン」であることが明らかになった。

ここにおいて朝日新聞「就活モニター」と称して、アンケートに定期的に答えてもらう就職活動学生を募集するものである。ここで「就活」という語の使用といっても「就活モニター」という愛称として用いたものである。おそらくこの社告以前に「就活」は使われていたことがうかがわれるが、あくまで愛称としての用法で朝日新聞が通常の用法として「就活」を用いたものではない。

第4節 三大紙における「婚活」記事の調査・比較

婚活とは結婚活動の略。少なくとも1980年代以後「結婚活動したくてもできない人」が増えたといわれる。女性の社会進出、終身雇用の崩壊による男性の収入不安定化、自由恋愛の定着などが背景だ。そこで「黙っていても結婚はできない。就活（就職活動）のように婚活（結婚活動）を始めるべき」と主張したのが、2008年2月発行の書籍『「婚活」時代』家族社会学者である中央大学の山田昌弘教授とジャーナリスト白河桃子の共著『「婚活」時代』で、就職活動を意味する略語「就活」の派生語と考えてよい。晩婚化・非婚化が進み、恋愛関係が直接結婚に結びつかなくなった昨今、もはや結婚は人生のデフォルトではないとし、就職活動同様、自分を磨き、出会いの場へ出向いて積極的に自分をアピールする婚活をしないと良い結婚は出来ないとされている。

この言葉は2009年も注目を集めた。例えばテレビでは結婚を主題にした『コンカツ・リカツ!』や『婚カツ!』が登場。また結婚相談所は広告コピーで婚活を盛んに用いた。さらに親同志で見合いパーティーを行う代理見合い、調理を通じた出会いイベントである料理合コンも話題になった。男女を取り持つ機能が、社会全体で失われていることを思わせる流行だった。現代用語の基礎知識2010年版に初めて「婚活」の語が現れる。

以下の表8は「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」における「婚活」記事を示したものである。

表8

新聞	略語	婚 活
	見出し	結婚したいなら“婚活”のススメ
	朝日週刊	週刊
	雑誌	アエラ
	発行期間	2007. 11. 05
朝日新聞	見出し	ベストセラー／福島県(3)「婚活」時代(山田昌弘／白河桃子)
	朝夕刊	朝刊
	面	地方
	発行期間	2008. 05. 31
読売新聞	見出し	「平成を歩く」恋愛してます(笑)結婚と分離、ギャグ対象
	朝夕刊	朝刊
	面	東京
	発行期間	2008. 04. 07
毎日新聞	見出し	香山リカのココロの万華鏡：大切なのは「婚活」の先／東京
	朝夕刊	地方版
	面	東京
	発行期間	2008. 11. 18

以上の表から見ると、2007年11月5日の朝日週刊『AERA』見出し「結婚したいなら“婚活”のススメ」で最も「婚活」を使ったことが分かった。2008年5月31日の朝日新聞の朝刊、福島県面で「ベストセラー／福島県 (3)「婚活」時代 (山田昌弘／白河桃子)」の本を発表したその前に2008年4月7日の読売新聞で朝刊、東京面、見出し「平成を歩く」恋愛してます (笑) 結婚と分離、ギャグ対象」の記事を発刊した。毎日新聞は2008年11月18日の地方版、東京で、見出し「香山リカのココロの万華鏡：大切なのは「婚活」の先／東京の記事で「婚活」を引用されたことが明らかになった。

以下は2007年11月5日の朝日週刊『AERA』の記事「結婚したいなら“婚活”のススメ」である。これが最も「婚活」を用いたものである。

「結婚したいなら“婚活”のススメ」

就活するのに、なぜしない

いつか白馬の王子様が……なんて

信じていないけど。自然な出会いは幻なのか

結婚した女たちの婚活報告。

ライター しらかわとうこ 白河桃子 編集部 きむらけいこ 木村恵子

第5節 三大紙における「終活」記事の調査・比較

終活とは、終わりに向けての活動。人生の終末に向けて葬式やお墓の準備を始めること。現代用語の基礎知識 2012 年版に初めて「終活」の語が現れる。

人生の終焉をより良く迎えるための前準備のことを指す。(自分の)人生の終わりのための活動の略で、就活や婚活の派生語である。

終活は人生の最期をより良いもの(=自分の理想的なもの)とするため、事前に行う準備のことで、例えば葬儀の内容や墓のことを事前に決めておいたり、財産配分が主目的である遺言とは別に、自分の思いや意思、願いを綴るノートを書いておくといったことがある。遺言状の場合、葬儀後に開封されることが多く、葬儀に対する願いを書いても希望が叶えられずに終わってしまう。そこで事前に家族や業者に相談するといった終活をする人が増えている。また、終活をすることで、死や人生を見つめなおすといった人も多い。

なお、終活はユーキャン新語・流行語大賞の 2010 年候補語 60 語にノミネートされた。

以下の表 9 は「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」における「終活」記事を示したものである。

表 9

新聞	略 語	終 活
朝日新聞	見出し	週刊朝日目次・2009年8月14日号
	朝夕刊	週刊
	面	週刊朝日
	発行期間	2009. 08. 14
読売新聞	見出し	人生最後に着たい服 あす大阪で終活ファッションショー
	朝夕刊	大阪夕刊
	面	夕2社
	発行期間	2010.07. 30
毎日新聞	見出し	女の気持ち：終活
	朝夕刊	東京朝刊
	面	家庭面
	発行期間	2010.12. 10

以上の表から 2009 年 8 月 14 日の朝日週刊、『週刊朝日』面で見出し「週刊朝日目次・2009 年 8 月 14 日号」最も「終活」が使われた。2010 年 7 月 30 の読売新聞の大阪夕刊で見出し「人生最後に着たい服 あす大阪で終活ファッションショー」は「終活」が使われたことが分かった。毎日新聞は 2010 年 12 月 10 日の東京朝刊、家庭面で見出し「女の気持ち：終活」は「終活」が使われたことが明らかになった。

第6節 三大紙における「保活」記事の調査・比較

保活（ほかつ）とは、子どもを認可保育所に入所させるための活動のこと。就職活動を「就活」、結婚相手を探す「婚活」に倣って付けられた。主に待機児童の多い都市部で活況化している。預け先の選定から書類集め、申込み落ちた場合の次の候補保育所選びなど、園の近くに引っ越したり、入所を見越し生まれ、月を逆算して妊娠したりするケースもある。

現代用語の基礎知識 2011年版に初めて「保活」の語が現れる。自身の子を保育所に入れるために保護者（親など）が行う諸活動を指すための、日本独特の造語である。

日本の都市部においては、保育所は、全く数が足りない状態に陥ってしまっており、子供を持つ親は、子供を保育所に入れようとしてもそれがなかなか叶わない。統計的に見ると、待機児童は近年増加傾向にあり、2009年4月時点で約2万5千人に達していた。待機児童は全市区町村の約2割に当たる377の市区町村におり、待機児童が50人以上いる市区町村は101にもものぼった。待機児童は特に、首都圏や近畿圏などの都市部に多く、仙台市、東京・世田谷区、横浜市、川崎市、名古屋市、大阪市では待機児童が500人以上にものぼった。（その結果、「待機児童の増加」がさかんに報道されている。）

子供を保育所に入れることが非常に困難で、実際に入れられず苦しむ保護者が上述の数だけいるので、保護者は、子を保育所に入れるためには、そのためにあえて様々な活動を行わなければならない、と考えて、そのためだけの活動を行うという（ヨーロッパ諸国には見られないような）異常な状態になっており、このような、保育所に入れるための活動を、「保活」という表現で呼ぶようになったわけである^{注5}。

以下の表 10 は「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」における「保活」記事を示したものである。

表 10

新聞	略 語	保 活
朝日新聞	見出し	保育園探し「認可」は全滅 記者が経験、奮闘 10 カ月目
	朝夕刊	朝刊
	面	生活
	発行期間	2010. 03. 09
読売新聞	見出し	名古屋市長選 待機児童 解消進まず 狭き門 2年連続 全国ワースト＝中部
	朝夕刊	中部朝刊
	面	中 2 社
	発行期間	2013. 04. 17
毎日新聞	見出し	保活：育休記者の保育園探し 第 1 希望は 11 人待ち／愛知
	朝夕刊	地方版
	面	愛知
	発行期間	2012. 05. 29

以上の表から 2010 年 3 月 9 日の朝日新聞朝刊、『週生活』面で見出し「保育園探し「認可」は全滅 記者が経験、奮闘 10 カ月目」は「保活」が使われたことが分かった。次は 2012 年 5 月 29 日の毎日新聞地方版、愛知面で、見出し「保活：育休記者の保育園探し 第 1 希望は 11 人待ち／愛知」は「保活」が使われた。最後に読売新聞は 2013 年 4 月 17 日の中部朝刊で見出し「名古屋市長選 待機児童 解消進まず 狭き門 2年連続 全国ワースト＝中部」は「保活」が使われたことが明らかになった。

第7節 三大紙における「朝活」記事の調査・比較

朝活とは朝の時間を有効活用すること。デジタル大辞泉のによると「朝活動」の略で始業前の朝の時間を、勉強や趣味などの活動に当てること。平成20年（2008）ごろからの流行語。また、朝日新聞掲載「キーワード」の解説によると出勤前や休日の早朝に、読書、スポーツ、趣味などで自分の能力を高めようとする活動。4、5年前からブームになったとみられ、2009年には、東京の中心部で市民講座「丸の内朝大学」が開講した。現代用語の基礎知識2011年版に初めて「朝活」の語が現れる。

以下の表11は「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」における「朝活」記事を示したものである。

表 11

新聞	略 語	朝 活
朝日新聞	見出し	(何の数字) 15%
	朝夕刊	朝刊
	面	社会
	発行期間	2009. 07. 13
読売新聞	見出し	[いまドキツ] 「朝活」出勤前に自分磨き、ステキな出会いも
	朝夕刊	東京夕刊
	面	夕2社
	発行期間	2009. 10. 10
毎日新聞	見出し	朝活：若者に人気 丸の内の市民講座、受講生200人
	朝夕刊	地方版
	面	東京
	発行期間	2009. 08. 02

以上の表から2009年7月13日の朝日新聞朝刊、社会面で見出し「(何の数字) 15%」「朝活」が使われたことが分かった。次は2009年8月2日の毎日新聞地方版、東京面で、見出し「朝活：若者に人気 丸の内の市民講座、受講生200人」「朝活」が使われたことが分かった。読売新聞は2009年10月10日の、東京夕刊で見出し「[いまドキツ]「朝活」出勤前に自分磨き、ステキな出会いも」「朝活」が使われたことが明らかになった。

第 8 節 調査結果に関する社会的背景の分析

8-1 調査結果の〈まとめ〉

以下の表 12 は朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、それぞれ 2014 年～2016 年の三年間、「就活」、「婚活」、「終活」、「保活」、「朝活」に関する記事を検索した結果を示したものである。

この表を見ると朝日新聞、読売新聞、毎日新聞における「就活」の記事が三社とも多くことが分かった。最も件数が多かったのは朝日新聞の 2401 件である。次は、読売新聞の 1406 件で、第三位は毎日新聞の 504 件である。「婚活」は、読売新聞の方が 906 件が多い。次は朝日新聞 806 件で、第三位は毎日新聞 159 件である。「終活」は、朝日新聞の 332 件が一番多く、次は読売新聞の 178 件、第三位は毎日新聞の 80 件である。「保活」は、最も件数が多いのは朝日新聞の 88 件で、次は読売新聞の 30 件、第三位は毎日新聞の 29 件である。「朝活」は、最も多いのは朝日新聞の 61 件、次は読売新聞の 52 件、最も少ないのは毎日新聞の 4 件である。

表 12

新聞	略語	就活	婚活	終活	保活	朝活
	年					
朝日新聞	2014 年	777	270	103	21	20
	2015 年	851	281	127	18	21
	2016 年	773	255	102	49	20
	合計	2401	806	332	88	61
読売新聞	2014 年	442	335	55	4	23
	2015 年	508	315	64	2	10
	2016 年	456	256	59	24	19
	合計	1406	906	178	30	52
毎日新聞	2014 年	140	58	17	10	1
	2015 年	199	60	24	2	0
	2016 年	165	41	39	17	3
	合計	504	159	80	29	4

以下の表 13 は朝日新聞が「就活」、「婚活」、「終活」、「保活」、「朝活」を記事で初めて使った時を示したものと現代用語の基礎知識における初出の比較である。特に「就活」は、他

の新聞社より早く掲載された。2000年10月3日新しいコラム「就活（しゅうかつ）＝仮題」を始める予定だったことが分かった。この語が当初はコラムのタイトルとして使われたことが推測される。筆者はまず、2000年1月1日～2002年12月31日「就活」を含む記事について調査した。その結果、この三年間コラムと見出しを除く、記事の本文にこの語は殆ど使われていなかったことが明らかになった。

「婚活」は、2007年11月5日の週刊『アエラ』「結婚したいなら“婚活”のススメ」で使われたことが分かった。「終活」は2009年8月14日の週刊朝日「週刊朝日目次・2009年8月14日号」で書かれた。「保活」は2010年3月9日の朝刊「保育園探し「認可」は全滅 記者が経験、奮闘10カ月目」で初めて使われたことがわかった。「朝活」は、2009年7月13日の朝刊「(何の数字) 15%」で初めて使われた。この調査結果に基づいて全体的な傾向を分析しよう。

表 13

略語	発行日	朝夕刊	面名	見出し	現代用語の基礎知識 における初出
就活	2000. 10. 03	朝刊	くらし	「就活モニター」を募集グラ ブA & Aで定期アンケート 〈社告〉	2001年
婚活	2007. 11. 05	週刊	アエラ	結婚したいなら“婚活”のス スメ	2010年
	2008. 05. 31	朝刊	福島全県・2 地方	ベストセラー／福島県（3） 「婚活」時代 （山田昌弘／白河桃子）	
終活	2009. 08. 14	週刊	週刊朝日	週刊朝日目次・2009年8月14 日号 現代終活事情	2012年
保活	2010. 03. 09	朝刊	生活1	保育園探し「認可」は全滅 記者が経験、奮闘10カ月目	2011年
朝活	2009. 07. 13	朝刊	2社会	（何の数字）15%	2011年

8-2 社会的背景の分析

そもそも、なぜ言葉は省略されるのだろうか。朝日新聞 2015 年 5 月 2 日朝刊

NHK放送文化研究所の塩田雄大・主任研究員によれば、「よく使うから言いやすくする」という最大の理由のほかにも、省略する言葉で仲間意識を高める狙いもあるという観点もある。「〇活」は「〇〇活動」の略語と推測される。「就活」は大学キャンパス内流行語として盛んでいたことが推測される。部活のように学生仲間たちが良く使っている。それが仲間意識を高め、お互いに親しく感じるようである。一方、大学内の就職センターで就職活動をサポートするので、この省略語は学生と先生の間にも広がったことが推測されている。

本章の調査によって、「朝日新聞」の最初は「就活」を新聞のコラムにおいて使ったことであることが明らかになった。「就活」という略語を用いた主たる理由は 2 つ考えられる。

第 1 は、読者に対して新聞の見出しの字数は少ない方がより覚えやすい。

第 2 は、読者に対してより新しい言葉を使うとつよいインパクトを与えられる。

現代社会には人間は生まれてから間もなく幼稚園や小学校に入学し、大学を卒業するまで教育（活動）を受け、そして、大学を卒業する際に、就職（活動）をして自分の社会的な職場を位置づけその役割を果たす。又、家庭は社会の組織を構成する重要な要素である。結婚（婚活）、子どもを産み（妊活）、それから、子どもが生まれたら、働きのため子供は保育園に預ける（保活）。一方、人間は年を取るにつれて、いつか、死を免れることはできない。生前に死ぬ時に備えて、活動（終活）することも大切なことである。このような様々な活動は現代に限ったことではない。ところが、現代においてはこのような活動に人々は大変なエネルギーを使うことになった。その原因はともかくとしてもこれが「〇活」の流行を生み出した最大の原因であろう。

本稿で取り上げた「就活」「婚活」「終活」「保活」「朝活」などの他にも数えきれない「〇活」が生まれるであろう。例えば、「離活」「妊活」「美活」「ラン活」（ランドセル活動）など様々な「〇活」という表現が際限なく使われる可能性が極めて大きいと思う。社会が日々変化する中で、マス・メディアが報道する社会的な問題は、瞬時に話題になり、誰もが興味・関心を持つ。そのような時に使用された新しい言葉や表現（省略語）が共通理解され、流行になるという要因もあろうと思う。それに、マス・メディアが多く取り上げることによって言葉がこのような略語を定着する触媒になるであろう。

このような省略形が広まると日本語本来の表現が忘れられたり、誤解されたりする可能性すらある。日本語を大切にし、正しく使うという観点からもあまり好ましい現象ではな

いかと思われる。

新聞は読者の年齢層が極めて多種多様である。しかも、新聞は全ての読者のものである。従って、新聞にはニュースを正しく伝える使命があると同時に、全ての読者に分かり易く、正しい日本語を堅持する社会的貢献も求められているのではなかろうかにもかかわらず、新聞におけるこのような用語の使用にはどのような意図があるのだろうか。

新聞には格調高い文章がある一方で、若者表現が散見される記事があることは時代の動きを反映したものといえよう。これらの省略形の表現は読者によっては日本語の乱用として受けられる可能性があるだろう。＜情報社会と新聞＞は、切っても切れない関係である。時代をこのような省略語の使用によって読者に実感させることを新聞はねらっているであろう。

注

- 1 森岡 健二 (1998) 『日本語学』 第7巻「略語の条件」4頁 明治書院
- 2 フリー百科事典 (2016) 『ウィキペディア (Wikipedia)』 (UTC版)
- 3 Asahi Shimbun Weekly AERA (1999) 26頁
- 4 米川 明彦 (1998) 『若者語を科学する』 51頁 明治書院
- 5 (株)朝日新聞出版発行「知恵蔵」/知恵蔵について情報

第5章 本論文の結論

第1節 本論文の〈まとめ〉

本研究は、メディアの言語における日本語の影響の傾向について、皇室敬語、外来語、省略語を取り上げ、新聞を中心に検証・考察したものである。その結果をまとめてみよう。

第1章では、日本語におけるマス・メディアの影響について考察したものである。第1節はマス・メディアの社会的な役割と特徴を述べ、第2節と第3節はマス・メディアの公共性とは何かを探りながら、新聞の社会的な影響力と公共性を述べた。第4節～6節にはマス・メディアがもたらす日本語への影響について、新聞とテレビを中心に具体的にメディアがもたらす日本語の影響の実例を取り上げ、日本語の乱れの傾向と現象を考察した。第7節は本論文における新聞を言語資料とした理由について述べた。

第2章では、皇室敬語について日本の新聞三大紙「朝日新聞」、「読売新聞」、「毎日新聞」を検証・考察した。その結果は以下のようなものである。

皇室典範では、天皇、皇后、太皇太后、皇太后は陛下という敬称を、それ以外の皇族は殿下を使うとされているが、新聞では陛下は用いても、皇太子を殿下とは言わなくなった。また、共同通信社の『記者ハンドブック 新聞用字用語集』（第9版）によると、「敬称、敬語の使用についての国民感情も共同通信社の世論調査では『今のままでよい』が多数を占めている。ただし、敬語が過剰にならないようにし、特に二重敬語を使わないよう注意する。敬語が多いと読みにくいので、できるだけ敬語を減らすよう工夫する」となっている。これが皇室報道の趨勢である。

今回の調査では、新聞社によって現在皇室敬語の表現はかなり異なっており、異なった敬語の用い方のあることが明らかになった。「朝日新聞」は皇族に対して、敬語表現を避けている。しかし、昭和の末期から平成の初期には、使われていた。ところが、1993年12月に「皇室記事に関する取り決め集」が作られ、敬語を使わないことが決められたという。つまり、朝日新聞社は皇室記事が無敬語表現に方針転換した。これは「朝日新聞」独自に判断したことと考えられている。それに対して、「読売新聞」「毎日新聞」は国民の意向に基づいて皇室敬語を用いている。この点において三社の報道姿勢の違いが明確になった。

第3章では、外来語をわかりやすい日本語に言い換えるために、国立国語研究所が発表した言い換え語の対象となった外来語について「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」を調査した。

三大紙とも高使用頻度の第1位は「ケア(手当て 介護)」であることが明らかになった。次に、「朝日新聞」の第2位は「アクセス(①接続 ②交通手段 ③参入)」で、そして「読

売新聞」は第4位で、「毎日新聞」第3位となっている。

「朝日新聞」の第3位は「「シェア (①占有率 ②分かち合う 分け合う)」で、「読売新聞」は第5位になり、「毎日新聞」は第2位となっている。「朝日新聞」の第4位は「コミュニティー (地域社会 共同体)」で、「読売新聞」は第3位となり、そして、「毎日新聞」は第10位を示している。「朝日新聞」の第5位は「ビジョン (展望)」で、「読売新聞」は第6位となり、そして、「毎日新聞」は第5位となっている。「朝日新聞」の第7位は「グローバル (地球規模)」で、「読売新聞」は第7位となり、そして、「毎日新聞」は第4位となっている。「朝日新聞」の第8位は「ガイドライン (指針)」で、「読売新聞」は第8位となり、そして、「毎日新聞」は第6位となっている。「朝日新聞」の第9位は「インフラ (社会基盤)」で、「読売新聞」は第2位となり、そして、「毎日新聞」は第7位となっている。

このように、「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」(1991年～2015年)三大紙の高使用頻度の言い換え語の上位10語の中で、それぞれ、以上の8語が同時に現れたことが明らかになった。

第4章では、新聞が日本語にもたらす影響力については、以下のように考えられる。

- 読者につよいインパクトを与えられていること。
- 記憶を覚えさせ、ことばが短くなっていくこと。
- 新鮮感が溢れること。

これは、日本の社会が大きく変化したことに起因するのではないかと考えられる。経済不況、社会保障、少子高齢化等が進む中で、様々な社会現象が起きている。その結果、言葉の表現も様々な影響を受けたことであろう。

現代においてはこのような活動に人々は大変なエネルギーを使うことになった。これが「〇活」の流行を生み出した最大の原因であろう。まさに、言葉は時代を映す鏡であり、その時代の社会情勢や文化、流行などによってさまざまな変容を見せてきたことであろう。

本稿で取り上げた「就活」「婚活」「終活」「保活」「朝活」などの他にも今後多くの「〇活」が生まれるであろう。例えば、「離活」「妊活」「美活」「ラン活」(ランドセル活動)など様々な「〇活」という表現が使われる可能性が極めて大きいと思う。社会が日々変化する中で、マス・メディアが報道する社会的な問題は、瞬時に話題になり、誰もが興味・関心を持つ。そのような時に使用された新しい言葉や表現(省略語)が共通理解され、流行になるという要因もあろう。それに、マス・メディアが繰り返し取り上げることによって言葉が定着するきっかけになるであろう。このような省略語が広まると日本語本来の表現が忘れられたり、誤解されたりする可能性すらある。

言葉はコミュニケーションには欠かすことが出来ないもので、意味不明ではその役目を果たしていないことになる。日本語は略さずに婉曲的な表現をするからこそよいのだとも考えられる。

第2節 本論文の結論

本論文では、新聞における言語使用が社会の変容に敏感であることが明らかになった。

第2章～第4章の調査を通じて、新聞の言語使用を通時的に分析することによって、その社会に関する多くの情報を読み取れることが明らかになった。新聞のことは、いわば社会の情報についての豊かな鉱脈である。新聞の言語は、概ね公共的であることが明らかになった。多くは公共性に努めている。新聞の言語の社会に対する影響は以下のように考えられている。

新聞は情報伝達や発信などにおいてタイムリーで、かつ素早い。さらに、社会的に広範で、かつ深い。同時に、言語の動向や成行きを導くことにおいて重要な位置を占めている。

特に、第2章には皇室敬語の使用については新聞社ごとに対応の差があった。各新聞社の表現は異なっていた。皇室敬語において、皇室敬語を使う、使わない、どう使うかという正解はない。

新聞の敬語表現は、敬意の対象となる人間をどれ位高く評価するか、又、その人格をどの程度認めるかという社会の感情や価値観を反映したものと言えよう。

第3章の外来語言い換え語調査では、新聞は外来語を多用する傾向があることが明らかになった。若い世代の多用であり、使用意識、意味の理解度も高い特徴が表われている。外来語は日ごとに増加しつつあり、従って、氾濫する可能性すらある。

第4章では、省略語を取り扱った。近年、省略語は多用する傾向にあって、過剰な造語が多く使われている。その結果、言葉の意味がわかりにくくなっている。本来の日本語の機能や美しさが損なわれ、伝統的な日本の良さが見失われる恐れもあると言えよう。

つまり、社会的なコミュニケーションや国際化時代の日本語の在り方から見ると、外来語や省略語の多用は日本語によるコミュニケーションを阻害し、公正な社会情報の共有を妨げる可能性がある。また、外国人が日本文化や日本語を習得する障害となる恐れもある。

世代間コミュニケーションの障害となることも否定できない。このように公共的な言語使用に反する一面も十分にあると思われる。

新聞には格調高い文章がある一方で、若者特有の言葉づかいが散見される記事もあることは時代の動きを反映したものといえよう。急速に進む国際化の情報社会と新聞は、切っても切れない関係である。そのような時代を上述したような言語の使用によって受け手である（読者）に実感させることを新聞はねらっているのであろう。

一方、新聞は受け手側（読者）の年齢層は極めて多種多様である。新聞は大多数の読者にとって分かり易いと思われる言葉や情報を正しく伝える使命があると同時に、大多数の人が正しいと考えられる日本語を用いることが重要な判断基準となる。常に大多数の受け手側（読者）の意識に一致するように配慮し、受け手側（読者）の声を受け止める姿勢もまた重要であろう。

参考文献

(著者五十音順一覧)

- 飯田豊・立石祥子・永井純一・加藤裕康・程遥・阿部純 (2017) 『現代メディア・イベント論』 勁草書房
- 石井 勤 (1993) 「皇室敬語を考える」『新聞研究』505 「皇室敬語を考える」
- 石野博史 (1993) 「略語の造語法」『日本語学』 第12巻 明治書院
- 稲垣吉彦 (1999) 『平成・新語×流行語小辞典』 講談社
- 井上 宏 (2004) 『情報メディアと現代社会』～「現実世界」と「メディア世界」～
関西大学出版部 関西大学出版部
- 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』 東京堂出版
- 榎垣 実 (1963) 『日本外来語の研究』 東京研究社出版
- 宇野義方 (1977) 『日本語3敬語』「現代敬語の問題点」 岩波講座
- 榎原 猛 (1996) 『世界のマス・メディア法』 嵯峨野書院出版
- 大塚朋子 (2003) 『新語死語流行語』 集英社
- 袁 军 (2000) 『新聞媒介通論』 北京広播学院出版社
- 岡本 厚 (2009) 『マスコミ市民』「文字から離れていく社会のなかで」編集者の立場から
「メディアの公共性」を問う
- 岡本厚・北村肇・仲築間卓蔵・丸山重威 (2013) 『日本のメディア』これでいいのか！
あけび書房
- 岡本真一 (2001) 『ことばの社会心理学』 ナカニシヤ出版
- 岡本能里子・佐藤 彰・竹野谷みゆき (2008) 『メディアとことば』3 ひつじ書房
- 岡部朗一 (2009) 『言語とメディア・政治』 朝倉書店
- 奥山益朗 (1972) 『日本人と敬語』 東京堂出版
- 片岡俊夫 (2001) 『新・放送概論』 日本放送出版協会
- 金田 拓 (2012) 「コーパスに基づく (『外来語言い換え提案』の評価) 『9 コーパスに基づく言語学教育研究報告』 No.08
- 川崎 洋 (1981) 『流行語』 毎日新聞社
- 川岸令和 (2006) 『新聞研究』「自由なメディアとしての新聞の機能」一求められる機能を果たす覚悟はあるか (NO.658)
- 小林千草 (2009) 『現代外来語の世界』 朝倉書店
- 小林弘忠 (2002) 『ニュース記事にみる日本語の近代』 日本エディタースクール出版部
- 国語学会 (1993) 『国語学大辞典』 東京堂出版

- 北原保雄（1978）『敬語』 有精堂
- 敬語講座 10（1974）『敬語研究の方法』 明治書院
- 敬語講座 6（1973）『現代の敬語』 明治書院
- 斉賀秀夫（1966）『現代生活における敬語』 「新聞用語と敬語」
- 斎賀秀夫（1966）「新聞と敬語 一皇室敬語を中心に一」 『国文学解釈と教材の研究』
- 白水繁彦（1988）『コミュニケーションと文化変動』 白桃書房
- 四方由美（2012）『マス・メディアと社会生活』 学文社
- 島飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘（2011）『異文化コミュニケーション学への招待』 みすず書房
- 菅野 謙（1977）『現代生活における敬語』 「放送用語と敬語」 岩波講座
- 菅野 謙（1977）『日本語 3』 「新聞用語・放送用語」 岩波講座
- 菅野 謙（1993）『日本語 2』 「マスコミ言語の省略表現」 第 12 巻 明治書院
- 塩田雄大（2014）『現代日本語史における放送用語の形成の研究』 三省堂
- 武田 徹（2016）『日本語とジャーナリズム』 晶文社
- 高尾元久（2000）『新聞研究』 「読者への説明責任は報道の第三の要素」 — 「知る権利」の委託者に執行状況を報告する義務（NO.587）
- 高橋顕也（2016）『社会システムとメディア』 ナカニシヤ出版
- 高井潔司（2006）『新聞研究』 「中国メディアに芽生える公共性」（NO.659）
- タチアーナ・クドヤーロワ（2011）『計量国語学』 「現代新聞における略語使用の変動傾向とその類型」
- 田中建彦（2002）『外来語とは何か』 鳥影社
- 田中玲子（1958）『日本文学』 「新聞における敬語の研究」
- デニス・マクウェール/大石裕監訳（2005）『マス・コミュニケーション研究』 慶應義塾大学出版会
- 露木茂・仲川秀樹（2004）『マス・コミュニケーション論』 学文社
- 膝 鍬（2016）『武蔵文化論叢』 NO16 「日本のマス・メディアにおける敬語表現」
一昭和末期から平成にかけて天皇に関する新聞報道を中心に一
- 膝 鍬（2017）『武蔵文化論叢』 NO17 「新聞における「外来語言い換え提案」に関する調査分析」 一大学生を対象として
- 膝 鍬（2018）『武蔵文化論叢』 NO18 「新聞における省略 ～活の使用とその社会的背景」
- 徳井厚子（2007）『日本語教師の「衣」再考』 一多文化共生への課題一 くらしお出版
- 中橋 雄（2014）『メディア・リテラシー論』 北樹出版
- 仲川秀樹・塚越孝（2011）『メディアとジャーナリズムの理論』 同友館
- 浪田陽子・柳澤伸司・福間良明（2016）『メディア・リテラシーの諸相』 ミネルヴァ書房

- 波田陽子・福間良明（2012）『はじめてのメディア研究』 世界思想社
- 西尾寅弥（1980）「略語の構造」『言語生活』第339号、岩波書店
- 橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』 ひつじ書房
- 舟田正之・長谷部恭男（2001）『放送制度の現代的展開』 有斐閣出版
- 堀切友紀子（2013）「外来語に関する研究動向」（～使用意識と言語接触の視点から～）お茶の水女子大学『人文科学研究』 9, 113-124,
- 松本 敦（2013）「朝日新聞における皇室への敬語使用の変遷」『学習院大学大学院日本語日本文学』
- 毎日新聞校閲部編（1999）『新聞に見る日本語の大疑問』
- 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編者（2004）『メディアとことば』1 ひつじ書房
- 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編者（2005）『メディアとことば』2 ひつじ書房
- 三宅和子・佐竹秀雄・竹野谷みゆき（2009）『メディアとことば』3 ひつじ書房
- 南 博（1977）『日本語2』「マスコミ日本語」岩波書店
- 森岡健二（1980）「略語の条件」『日本語』第7巻 明治書院
- 門奈直樹（2001）『ジャーナリズムの科学』 有斐閣
- 李光鎬・渋谷明子（2017）『メディア・オーディエンスの社会心理学』 新曜社
- 山腰修三（2017）『入門メディア・コミュニケーション』 慶應義塾大学出版会
- 山口仲美（2007）『若者言葉に耳をすませば』 講談社
- 山田隆信（2008）『日本人と「恥の文化」』目白大学短期大学部研究紀要 目白大学短期大学部 編.(44)
- 米川明彦（1998）『若者語を科学する.』 明治書院
- 米川明彦（1997）『若者ことば辞典』 東京堂出版
- 若月 剛（199） —アラン・ベル「メディア言語の社会言語学的研究試論」『ニュースメディアの言語』を巡って 金城学院大学論集 327～352 頁
- 渡辺武達 発行者 森下 紀夫 著者訳者ジェームズ・カラン（James Curra（2007）『メディアと権力』
- 渡辺友左（1986）「戦後日本の民主化と皇室に対する敬語行動の標準」国立国語研究所報告 86『社会変化と敬語行動の標準』 秀英出版
- 渡辺友左（1999）「現代社会と敬語」の言語社会的な一考察 —現代社会と新聞の皇室敬語—『中京大学社会紀要』14-2
- 和田伸一郎（2004）『存在論的メディア論——ハイデガーとヴィリリオ』 新曜社
- NHK 総合放送文化研究所編（1975）『放送用語論』 発行所 日本放送出版協会
- M・マクルーハン/栗原裕、河本仲聖訳（1987）『メディア論』 みすず書房

本論文と既発表論文との関係

本論文は、筆者が既に発表した論文を基にして、大幅な手直しを加え、まとめたものである。その対応関係を示すと次の通りである。

第1章 「現代日本語におけるマス・メディアの言語表現」を新しく書き下ろし

第2章 『武蔵文化論叢』NO16 2016年3月

「マス・メディアにおける敬語表現」

一 昭和末期から平成にかけて天皇に関する新聞報道を中心に

第1節～第3節の中で、一部内容を新しく書き下ろし

第4節 「三大紙報道における皇室敬語表現の特徴」を新しく書き下ろし

第5節の5-2「調査結果の背景分析」を新しく書き下ろし

第3章 『武蔵文化論叢』NO17 2017年3月

新聞における「外来語言い換え提案」に関する調査分析

一 大学生を対象として

第1節の1-2「外来語の概念」を新しく書き下ろし

第3節「読売新聞における外来語の言い換えについての使用調査」を新しく書き下ろし

第4節「毎日新聞における外来語の言い換えについての使用調査」を新しく書き下ろし

第5節「三大紙における外来語の使用調査の比較」を新しく書き下ろし

第4章 『武蔵文化論叢』NO18 2018年3月

「新聞における省略語

「～活」の使用とその社会的背景」

第2節「略語の定義」を新しく書き下ろし

第5章 「本論文の結論」を新しく書き下ろし